秒速8キロメートル

テノト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

好き合った二人はＩＳによって別れ、ＩＳによってまた引き付けあう。ゆったりと流れる時間、早く流れる時間。それぞれの思いの速さは食い違い、中心となるＩＳに翻弄されていく……。

秒速５センチメートルに感化されて書き出しました。

ハイスピードアクションラブコメの世界に似非ながら秒速世界観を持つオリキャラを入れてみたものです。

と言いつつも秒速要素は雰囲気だけです。

切ない恋愛を書きたかったのです。

新海作品全般の雰囲気が出せたらなと考えています。

感想、評価、ご意見などありましたら、ドシドシ送ってください。

目次

思い出の日々と僅かな願い　1
思い出の日々から続く今　11
学園生活の始まり、心の在り処　23
すれ違った再開　36
決闘の行方　46
戦いの後、再開の前に　57
Meeting to Virgin Flight　65
暴風雨の渦中へ　78
風を前にした花たち　89
嵐は止み　前編　102
嵐は止み　後編　113
学園への帰還　122
力を欲する二人と新しい影　135
追いかける人、振り返る人　146
心の奥底　157
未だ幼い力　171
為すべきこととは　187
焦り、迷い、嫌う　199
試合の先の死合　211
身中の蟲は自分　223

思い出の日々と僅かな願い

「ねえ翔(かける)くん、知ってる？秒速５センチメートルなんだって」
「うーん……。なんの速度だろう？」
　僕は明菜(あきな)の問いかけに答えることは出来なかった。
　春の暖かな陽気に包まれた街は桜色に染め上がっていて、行き交う人々の気持ちを心なしか高揚させていた。
　僕たちは桜の木の下に腰をかけて、互いに持ち寄ったおにぎりやおかず、お菓子に手をつけながら話していた。
「桜の花弁が落ちる速度、秒速５センチメートルなんだって」
「へぇ。それって遅いのかな？それとも早いのかな？」
「ピンと来ないよねぇ。こうやって、お花見してると凄くゆっくりして感じるけど、本当はもうすぐにさよならの時間になっちゃうもんね。それと同じ感じなのかな？」
「そうかもしれないね」
「うん、きっとそうだよ」
　明菜はそう言って勝ち誇ったような笑みを浮かべた。
　自分の方が博識なんだと語るように。
「そういうのよく知ってるよね。やっぱり本で見たの？」
「うん。図書室にある小説に書いてあった。最後まで読めてないんだけどね」
「ふぅん」
　明菜に何か言い返せないかと、話題を振りながら僕は訳もなくムキに頭を捻っていた。
　ふと、一つ思い出したことがあった。
「そうだ。じゃあさ、秒速８キロメートルって知ってる？これはお父さんに聞いた話だから本当のことだよ」
「一秒で８キロってすごい速さだね。時速に直すとね、えっと……、時速２８，８００キロメートルだから新幹線の何倍になるかな？」
「飛行機だって速くても９００キロくらいだよ」

「あ、その顔はなんなの～？すっごい負けた気分！」
「へへへ、勝ったよ！」
一体何に勝ったのだか。そうしてしたり顔を彼女に見せつける。
頬を膨らます彼女の顔が可笑しくて、余計におどけて挑発した。
すると彼女の何となく不機嫌そうだった顔がより鮮明に不機嫌さを訴えだして、それが可笑しくって、でももっと見ていたいとか考えてしまっている。
結局そのままそっぽをむかれてしまったけど、チラチラとこちらに目線だけ送ってきている。きっと答えが聞きたいんだろう。
「早くおしえてよ！」
「これはね、宇宙ステーションが地球を回る速度なんだって。一日で6回地球をぐるっと回るほど速いらしいよ」
「そうなんだ！やっぱり翔くんは宇宙とか、そういうの詳しいね」
「お父さんがそういうことの仕事してるし、何より僕の夢は宇宙飛行士だからね」
少々強い風が吹いて桜の花びらが散り、舞い上がり、僕らの目の前の光を遮る。
美しい光景だった。でもなんだかその光景は僕に、止め処ない不安を感じさせた。まるで僕らに差していた未来の光を遮るように感じてしまった。
そんな杞憂とも思える感傷に浸っている僕に彼女は声をかける。その声を聞くだけで僕は今に戻された。風は止んでいて、巻き上げられた桜ははらりはらりと秒速5メートルで落下している。
「夢がしっかり決まってるんだ。私なんて、自分が何をしたいのかも分からないんだよ？」
「いいじゃん。だってまだ大人まで何年もかかるんだからさ、ゆっくりいろいろ考えれば良いと思うよ」
「そうかな？」
「それにさ、明菜は頭が良いからどんな夢だって叶えられるって。僕はそう思ってるよ」
それらの僕が吐き出した言葉たちは明菜にいう言葉ではなくて、自

分自身に言い聞かせている言葉なんだと、この時の僕は自覚なんてしていないだろう。
本当に情けの無い話だったが、父からは宇宙の知識だけでなく宇宙飛行士には僕がなれないであろうことも、事細かく教えてくれるリアリストだった。
そんなリアルな教えに対しての反感の意思だったのだろうか。
「何でもはないよ。だって私、運動音痴なんだもん。すぐ学校休んじゃうし」
「うーん……。頭を使う仕事なら……、って揚げ足を取らないでよ！結構本気で言ってるんだから」
「あはははは！分かってるよ。ありがとね翔くん。そうやって言ってくれるのは翔くんだけなんだよ？」
「そんなこともないでしょ？」
「そうなんだよ」
そうやって取り留めのない会話を桜の木の下で、永遠にも感じる時間を過ごした。
そうして帰宅を促す夕時のチャイムが鳴り響く。
七つの子を聞きながら一緒に家へ帰る。公園からは明菜の家の方が近かったから、必然と別れるのは明菜の家の前だ。
「今日は楽しかったね」
「そうだね。もう春休みも最後だし、明日からはまた学校だよ」
「うん。これからもよろしくね」
そういって明菜は家の戸を開けてその中へ入っていく。
閉まっていく戸が急に止まり、隙間から明菜は頭だけを覗かせて一言僕に残した。
「来年も一緒にお花見しに行こうね！」
「うん！約束だよ。絶対しようね！」
僕の返事なんて決まっていた。
それに来年だけじゃなくて、何年経ったって僕は明菜とお花見に行くんだろう。そんなことを考えていた。
そう。そう考えていたんだ。

◇

その日は例年より遅めの台風が過ぎていった後で、澄み切った秋の空にモミジやイチョウの葉がひらりらひらりと飛び交っていた。

その日に僕は明菜に電話をかけていた。

「お父さんの仕事の都合で引っ越すことになったよ。もうしばらくは日本に帰ってこれないかも……。モスクワとヒューストンを行ったり来たり……だってさ」

僕は気持ちでは淡々と事後報告のように告げるよう努めていたけれど、家の固定電話近くにある鏡は赤く腫れぼったい瞼の自分を映していた。

きっと僕のこの声も上擦っているんだろうということも何となく悟った。

「そうなんだ……。もう、会えないの？寂しいな……」

明菜の痛烈な孤独感を、彼女のその声色から僕は感じ取ってしまった。違う、自分が孤独を感じて彼女もそうであって欲しいと思ったんだ。

生まれてこの方二人でいつも遊んでたし、学校でもべったりと離れない正しく親友だった。

それでからかわれたりすることはあった。でもそれは恥ずかしいという感覚なんかよりも、二人だけが知っている僕たちの秘密基地を周りに言いふらされるような、踏み込まれたくなかった領域に不躾にも踏み込まれるような謎の不快感を感じていた。明菜はどうだかわからないけど、からかわれる度に眉間に皺を寄せて泣きそうな顔をして、ただ悔しそうに俯いていた。

離れたくなかった。

離れてしまうと、もう一生会えないような気がした。いや、そうじゃない。当たり前だった自分にとって確かな存在を削ぎ落とされるような気がしたんだ。それは、丁度窓の外で散っているモミジやイチョウの葉っぱのようだ。

「お父さんのＩＳの研究が認められてさ、そんなお父さんを支えてあげたいんだ」
ＩＳとは、僕が５歳の頃に起きた『白騎士事件』で世界に現れ、篠ノ之博士によって公開されたいわゆるパワードスーツだ。
あの事件以来、お父さんはＩＳの存在が自分には重要なファクターであり欠けたピースを埋めるためのものだと信じて研究を重ねた。本当に小さかった僕が恐怖を覚えるほどに鬼気迫るものだった。
だから、その研究が認められた今だからこそ支えてあげないといけない。じゃなければきっとお父さんは壊れてしまう。そう、強く感じた。
「ごめんね……。一緒に桜を見る約束、守れないよ……」
「仕方ないよ……。だって、私たちじゃどうにもできないもん……」
それ以上の言葉を僕は出すことが出来なかった。寂しいと言ってくれた明菜に何か慰めや気の利いた言葉も思い浮かばなくて、そんな自分が情けなくて堪らなかった。でもグッと拳を強く握ることしかできなかった。
なんて自分は無力なんだ。そう自分を責め立てることで少しだけ気が晴れた。でもそんなことで気が晴れてしまう自分に強い嫌悪を抱いた。
そんな負の感情の堂々巡りを繰り返していると、明菜が高く声を上げた。
「引っ越しって、いつ？」
「来週の日曜日の飛行機でモスクワに行くんだ」
「じゃあさ、今週の日曜日にコスモスを見に行こうよ！」
無理をしているのが手に取るように感じた。
今にも泣きだしそうな声なのに、明るく振る舞って僕の感情を上へと向けてくれた。
彼女のそんな優しさが、チクリチクリと僕の胸に小さな軛を打ち込んでいくのを感じた。
「ソメイヨシノじゃないけど、コスモスも秋の桜なんだから代わりにはなるよね。きっと」

「う、うん！なるよ！絶対なるって！」
「じゃあ、行こうね！」
時間と場所をその場で決めて、二人で出かけることが決まった。

◇

少々遅咲きのコスモスを一緒に眺めながら、明菜が作ってくれた弁当を食べた。
今日の為にお母さんから作り方を習ったらしい。
一朝一夕の付け焼刃だから味に保証はない、なんて言いながら笑う明菜の弁当は、美味しかった。言葉には出来ないくらいに。
そのあとは別れを切り出すのが怖くて堪らなかった。
学校は転校の手続きで行かなくなるし、この数日で引っ越しの準備を完全に終わらせなくてはならないからだった。
だから、きっと明菜とはもう会えなくなってしまうのだった。
「桜が見れてよかったね……」
「うん、よかった」
「もうこっちでやっておきたいことってない？」
「約束もこんな形だけど果たせたしね」
嘘だ。
こんな言葉、嘘なんだ。
やっておきたいことなんてまだまだ沢山ある。
ソメイヨシノを一緒に見たかった。夏には一緒に祭りに行って遊んで、冬には雪遊びだってしたい。
一緒の中学に進んで、どんどん先に進むだろう勉強に必死に食い付いて。
そうやっていつまでも一緒に楽しみや色々な感情を共有したかった。
「モスクワにヒューストンかぁ。すっごく遠いね。やっぱりもう会えないのかな？」
「分からないや……。日本に来るようなことがあれば絶対に会いに来

るけど、分かんないから約束は出来ないよ」
「そっか……。そうだ！翔くんの夢って宇宙飛行士でしょ？ヒューストンならそういう勉強しやすいんじゃない？」
「そうだね。きっとお父さんの伝手で宇宙飛行士の人にも会えるかも。だから、夢には確実に近づくね」
「すごいじゃん！きっと翔くんの夢に神様が導いてくれているんだ！」
「そうなのかな？」
僕はそんな導き要らない。神様ならわかるでしょ？僕の気持ちが。
そんなの嫌だ！明菜と離れたくなんかない！
そんな叫びが聞こえているはずだ。
だけど、そんな叫びは意味もないし別れを辛くするだけだった。
だから飲み込むしかないんだと弱い自分に精一杯言い聞かせた。
そうすることでしか自分を保っていられなかったし、これから先のことへと進めなくなる気もしたからだ。
日が傾いて、空が焼けて見える。
公園内のスピーカーからは『赤とんぼ』が流れ出した。
別れを告げる時が来たのだ。
「私はね、まだ翔くんにしてあげたいこと、一杯あるんだよ」
僕だってそうだ。
でも、今から一生会えるかも分からない様な僕のことをもう考えないでいて欲しかった。
互いが辛くなるだけだから。
「私ね、言いたいことがあるの」
やめてくれ。
きっと、その先を聞いてしまうと自分が抑えられなくなってしまう。
「私、翔くんのことが……大好きなの」
聞いてしまった。

「色々考えたんだけどね、言うことにしたよ。これを言ったらお別れが余計に悲しくなるの……。でもね、言わなかったらきっと後悔するって思ったの。だから、言うことにしたの。だから、私のこの告白の返事をして欲しいな……」
明菜はそう独白する。
なんだ。僕の方がよっぽど臆病で弱い奴じゃないか。言ってしまうと別れが辛いから、僕は保身のために何も言わないことを選んでいた。
クラスのいじめっ子から好きな人に関して囃し立てられた時、目に水を溜めて俯いていた時の明菜じゃないんだ。しっかり前を見て、強い自分を持っているんだ。

「僕も……。僕も明菜のことは大好きだよ！嫌だよ！離れたくないんだよ！大切なんだよ……！」
僕は明菜に抱き着いて声を引きつらせて咽び泣きながら返事を返した。
明菜も泣いているのが分かる。肩に冷たいものを感じたから。
腕を回して力強く抱きしめると、明菜も負けじと強く力を籠めた。抓るように背中を捕まれたけど、その痛みが僕に何か大切な切片を刻み付けているように感じて心地よかった。
「私も離れたくないよ……。だけど仕方ないんだもん。嫌なのに、嫌なのに！」
「ごめん、ごめんね。僕は何も出来ないんだ……」
「うぅ……」
二人の気持ちが重なった気がした。僕はそう思う。
だけどこんなに悲しい気持ちで一つになるなんて、世の中は酷いものなんだ。喜びの気持ちでこうなれたら、どれだけ素晴らしいのだろう。
そんなことばかり考えてしまって、これ以上先に進んで行けなくなってしまいたい、そんな衝動に駆られていた。
けれども、そんなことをしてしまったら明菜の歩みも止めてしまう

というある種の恐怖にも駆られた。
ふと明菜は僕の背中に回した腕を外し、僕の顔を見た。身長差はそれほど大きくないし、互いに目線は同じ高さだ。
同じ高さにある彼女の目が一層涙を溜めて、潤んだ瞳で僕の心を突き刺した。そして薄く目を瞑って唇を差し出した。
この時の僕に迷いなんてなかった。驚きによる一瞬の静止を経て、彼女の問いに答えた。
今、僕はきっと明菜の全てを手に入れたように感じた。僕も明菜にこの時だけでもと全てを差し出していた。
でも、この明菜の全てを僕はどう扱えばいいのか、余りにも手に余る大きな存在で戸惑った。
葉とともに日は落ちていく茜色の中で、僕は幸福に包まれていた。包まれていたかった……。
幸福の後には戸惑い、不安、絶望。そんな感情に包まれて、自分の心はもう滅茶苦茶になっていた。
永遠にも似た一瞬の出来事。未だに明菜の唇の感覚が残っている。それが無性に気恥ずかしくて、そんな情けないであろう顔を見せたくなくて明菜をひしと抱きしめた。お互いに火照っているのがよく分かった。
明菜も僕に強く抱き着いて顔をこちらに向けようとはしなかった。同じことを考えているのだろうか。
でも僕の中の心はこの時に強く堅牢で確実な意思を抱いた。
例えどんなことが起きても、僕は明菜のことを好きでいるのだと。
火照りが覚めた時に僕は重い口を開けて声を出した。ここで立ち止まらないために。
「僕、もう行くね……。さよなら明菜」
「うん……。いつでも私は翔くんのことを待ってるから！電話もメールも一杯するから！」
「僕もするよ！僕だって明菜のことは忘れないよ！何があっても！」
「ありがとう……。きっと、また会えるよ！それまで元気でね」
「うん、元気でね」

思いを言葉に乗せてぶつけ合った。悔いが残らないように。
「翔くんなら、この先どんなことがあっても大丈夫だよ！だから、さよならっ！」
「……！っ……うん、さよならっ！」
そういうと、二人で背を向けて歩き出した。
後ろから嗚咽交じりの泣き声が聞こえてくる。いや、僕が泣いてるだけかもしれない。
それを振り払うように僕は走った。全力で走った。
部屋に戻って僕は咽び泣いた。そして請うた。
もう一度、どうかもう一度僕と明菜を引き合わせて欲しいと。
僕らの思い出の花である桜とコスモスに、そう願った。

思い出の日々から続く今

「明菜、どうしたの？なんだか落ち着かない声をしてるわね」
「あ、鈴ちゃん。ううん、何でもないよ」
「そ～う？それならいいんだけどさ。あ、また一夏がやらかしたの？あのバカ！」
「いやいや、織斑くんは関係ないよ？そんなことより、好きな人を馬鹿とか言うのはどうかと思う」
「だって馬鹿に変わりないもの！あの朴念仁の天然ジゴロ！」
友人の鳳鈴音こと鈴ちゃんは思い人の織斑一夏くんのことを、こうやってけなしている。けれど、これは自分に全く振り向いてくれない織斑くんにやきもきしちゃって、やり場のない気持ちを吐き出しているだけなのだ。要するに、好きな気持ちの裏返し？なのかな。
言葉は粗暴な印象を持たれちゃう鈴ちゃんは思ったことをはきはきという直情家なだけで、こうして親しくなると端々からしっかりと本心の優しさを感じられる。
私は今日からＩＳ学園に通うことになる。公然の女子高で、自分にとって気楽でいい。何より入学するときは大まかな目標でしかない将来の夢を考えて選んだけど、今となってはもっと大きな希望を持てているのだから。

◇

私は小学５年生の終わりに引っ越した。お父さんの仕事の都合で東京へ。
翔くんと遊んだあの町や、一緒に桜やコスモスを見た公園を離れることになるのは辛かった。彼の思い出が遠ざかるような、彼とより離れてしまうような気がして。
あの別れからもう４年経ってしまって、だんだん翔くんの記憶が薄らいでいくのがひしひしと感じてしまい、胸の奥底が冷えるような毎日を過ごしていた。

引っ越して最初は引っ込み思案な私は自分から話すことはなく、常に受け身な受け答えをして過ごしていた。というよりも、自分がこうしているこの時間に翔くんは何をしているかが気になってしまっていたのかもしれない。

いつも受け身でいるし、転校生といういわゆる新参者の私はクラスに中々馴染めないで過ごしていた。結局、翔くんに大丈夫なんて言っておきながら、自分はてんで大丈夫じゃなくて。いつも隣に翔くんがいれば楽しい生活になっていただろうか、とばかり考えていっつも上の空だった。

やっぱりというか、転校してきてしばらくすると、小学生特有の男子による女子へのからかいが始まり、新参者の私はその洗礼を受けた。

「根暗ボッチ」

朝来るとその文字が私の机にチョークで書かれていた。

前の学校でも翔くんと私の関係を揶揄して相合傘なんかでからかわれたことはあったが、こうしたものもあるのだと妙に落ち着いて感心してしまった。だから、私は無表情に近い顔でその文字を雑巾できれいに拭き取った。

そんな私の態度が気に入らなかったのか、からかいは遊びのつもりがイジメに発展した。

道具箱にカエルや、教科書隠し、直接的なものは足を引っかけて転ばしたり。そんな目にあった。

でも、私はイジメられても特に傷心することはなかった。このことを翔くんに電話で話すと、彼はとても私を心配した。心配した後には必ず憤慨して、最後には優しい言葉で慰めてくれた。その度に私は有頂天に達した。

そんな翔くんの心の機微を感じさせてくれる話の種が他にはなかったのだ。だから、少しイジメに感謝してしまったりしていた。

ある日、いつものように教室に入ると、クラスの男の子と女の子が二人で複数の男子と言い争っているところに出くわした。言い争いの場所は私の机が中心だった。

複数の男子は手にチョークやクレヨンを持っていたので、すぐに私のことをイジメていた男子たちだと分かった。もう片方の男の子と女の子はいつも一緒にいる二人で、一緒に登下校してたり遊んでいたりしているのを見る度に翔くんのことを思い出してしまう、そんな二人だった。

「牧瀬のこと庇うのかよ織斑はさ」

「庇うも何も、イジメ自体が良くねぇって言ってるんだよ。それ鈴の時も言ったよな？お前ら学習しねぇのかよ」

「ほんっと、バカなんだから。何？アンタらあの子のこと好きなの？」

「うっせーよバーカ！パンダみたいな名前してるくせに！」

「そうだそうだ！あ、分かった！織斑、牧瀬のことが好きなんだろ!?鳳と二股かよ！」

「は？意味わからないし関係もねーだろ？」

なんだか入りにくい空気になってしまったので、そのまま廊下で待つことにした。しばらくすると大きな音、具体的には机をひっくり返したような音が聞こえてくると、教室の中は怒号が響きだした。

喧嘩が始まったのだろうと思って職員室へ向かい、先生を呼び出した。偶々職員室にいた先生が体育の怒ると怖い先生だったので、その喧嘩はすぐに収束した。

それがきっかけで私は鈴ちゃんと織斑くんと友達になった。転校して初めての友達だった。

そしてそれがきっかけで私の中の翔くんの存在が薄らいでいった。

別れてから二日に一度の頻度でしていた電話もメールも、日に日に内容が普遍的でありきたりな日記のような内容になって、電話も特に話す内容がなかったので、自然と回数は減っていった。

いや、ちょっと違うかな。私はメールや電話の度に鈴ちゃんや織斑くんのことを話していた。正直なところ、彼らと一緒にいると刺激的で話題に尽きることはなかった。でも、翔くんはいつも同じ日々を繰り返しているかのような口ぶりだったし、メールの中の翔くんはいつも一人でいる印象を受けた。

時が流れ、徐々にメールと電話の回数が減っていった。そして、私

がどこの中学に上がるかの話をメールで送り、返信に翔くんがヒューストンへ引っ越すことが決まる話が送られてきたものを最後に、彼と私の連絡は完全に絶えてしまった。

桜の花が枝木と別れるように。

そして中学に上がって新しい友人に五反田弾くんと妹の蘭ちゃん、御手洗数馬くんが加わり、それこそ楽しい中学生活を送った。

中学に入って初めて帰ってこないメールを翔くんに送り出した。内容は、身体測定時に初めて受けたＩＳの適性検査だった。判定は「Ａ＋」で、これからはどこかの企業からオファーが来るかもしれないというものだった。

メールは宛名違いのエラーメールが帰って来るだけだった……。

月日は無情に過ぎていった。

通信が取れなくなってすぐ、私は途方もない絶望を感じた。翔くんにとって私はもう要らない存在で、私がいなくても大丈夫になってしまったのだと。だから、私は翔くんを思い出にすることにした。

最初は鈴ちゃんに心配された。勿論大丈夫だと答えたら、「あなたはその大丈夫が怖いのよ」と図星を突かれた。

これは私が乗り越えなきゃいけない試練なんだ、翔くんも私との関係を後腐れないものにしたいに違いない、と言い聞かせて気丈に振る舞って見せた。部活は織斑くんの勧めで剣道に入って病弱だった体を鍛えるところから始まり、勉強も常にトップレベルであろうとした。ある企業からのＩＳパイロットのオファーも受けた。それに、鈴ちゃんたちと一緒にいると楽しくて仕方がなかった。これで翔くんのことを思い出に出来たと思えた。

でもそれはただの虚構に過ぎなかった。なぜなら、家に帰って部屋に戻って一人になると、無意識にケータイの翔くん専用受信フォルダーを確認して、繋がらない番号にかけて電子音声を聞いて、遅れもしないメールを打っては削除する。これが私のルーティーンになっていた。嫌でもわかる。私は翔くんを深く求めていた。

そしてある日に私は学校で倒れ、そのまま救急車で近くの病院に搬

送されることになった。原因は過労、らしい。
病院で入院していると、みんながそれぞれの手土産を持ってお見舞いに来た。
それなりに談笑して自分は大丈夫である旨を伝えると、鈴ちゃんを残してみんな退席した。
残った鈴ちゃんは畳んであるパイプ椅子を雑に開くと、ドカッと腰かけた。見て分かる通り、かなりご立腹の様子だった。
「で、何が大丈夫なの？」
「えっと……。ごめんね」
答えに迷って謝ると、鈴ちゃんは声高く怒鳴った。
「そういう言葉が聞きたいんじゃないのよ！何が大丈夫なのよ！全然ダメじゃない！」
「……」
鈴ちゃんは一気に畳みかけてきた。
「中学に入学してから、アンタおかしいわよ？柄にもなく剣道なんか始めちゃって。元々勉強が出来るのは分かってたけどさ、ＩＳのオファーも受けちゃって。普通の人でもハード過ぎんのに、元々体が弱いアンタがやったらこうなって当然よ」
「返す言葉もないよ……」
私はこれ以上聞かれることを拒みたくなった。
織斑くんに恋をしてい鈴ちゃんに私がこうなった理由を話してしまうと、きっと色々なものが蘇ってしまう。それに、翔くんとの関係は二人だけのものにしておきたかった。他の人に踏み込まれたくない領域なんだ。
「あなたがおかしくなり始めるその時のことや理由、自覚してるんでしょ？あたしに教えなさいよ」
「ごめんね、それだけは嫌」
「なっ……！」
だから、ここではっきりと拒絶した。
普段こういう明確な回答を出来なかった私だけど、この時だけはスルッと口から言葉が出た。

自分自身もだが、いつもと違う私に鈴ちゃんも驚いている。
「め、珍しいじゃない。明菜がここまではっきり言うのって。でも私は聞き出すまで絶対にこの部屋から出ていかないからっ」
「ご勝手にどうぞ。私もこれだけは話したくないの」
「っっっ～～～！このぉ！」
「いはははははは!!このっ！」
「あたたたたたたたっ!!」
何故か鈴ちゃんの挑発に乗って煽るようなことを言ってしまった。
この時の自分の考えは今でも分からない。でも今思えば、同じ恋をしている仲間の鈴ちゃんにこのことを話して楽になりたかったのかもしれない。感情を分かち合いたかったのかもしれない。でも話したくない感情もあって素直になれなかった、のだと思う。
怒った鈴ちゃんは私の頬を両手で摘まむと思い切り引っ張った。だから私も負けじと耳を引っ張った。
この時、喧嘩をするのは翔くん以来だったと思い出した。どうでもいいことで喧嘩して、結局先に折れるのはいつだって翔くんだった。
なんだか、私が先に折れるべきなんだって気持ちになった。
「はなふから！はなふからはなひえ！」
「か、観念した様ね！キリキリ話してもらうわよ！」
その後は、誰にも言わないことを条件に包み隠さずに話した。
翔くんのこと。花見の日のこと。引っ越しのこと。コスモスを見た日とあの時の出来事。こちらに私が引っ越してきてから、翔くんの存在が薄らいでいく恐怖。音信が取れなくなって私が無理をしだしたこと。顔を真っ赤にしながら話した。
話していると、ふとただの惚気話になっていることに気が付いた。
なんだ。思い出になんかできてないし、諦めてなんかいない。それに沸騰するようにあの頃の、別れてすぐの純粋な「会いたい」気持ちが溢れ出てきた。
それを抑え込んでしまっていた自分が惨めで、寂しくて、会いたくて、情けなくて。ボロボロと涙を流しながら鈴ちゃんに抱き着いていた。

それから私は変わった。
今は会えなくても、いつかきっと会える。その時にもう一度自分の声で面と向かって、自分の気持ちを真っ直ぐに伝えるんだ。そう決めて一歩を踏み出した。
剣道部は引退して、ＩＳ関連の道を一本で進むことを決めた。
今は競技ＩＳが人気で兵器としての側面が色濃く、宇宙開発分野は余り注目を集めていない。けれど、元来ＩＳは宇宙開発用パワードスーツとして研究されていたものであり、白騎士事件さえなければ、今頃画期的な宇宙服として活躍しているはずだ。
それに、少し調べれば渡良瀬勉（わたらせつとむ）、翔くんのお父さんの名前が出てくる。そこには宇宙活動用のＩＳが実験段階に入ったこと、ＩＳ単体での大気圏離脱と再突入の理論立証が完了していることが取り上げられていた。
だから、宇宙開発分野を専攻したＩＳ関連の道は最も翔くんに近付く道なんだと信じることにしたんだ。
私は最初に受けた企業のＩＳパイロットを辞退して、他にオファーが来ていた三橋重工のＩＳ部門へと通う毎日となった。
三橋重工はいわゆる財閥系で、昔からロケットの開発など宇宙工学分野で日本ではリードしている。だから選んだ。
毎日通い詰めるうちに会社の内情も聞こえてきた。ＩＳを競技用としてだけでなく幅広い分野に応用する計画が持ち上がり、ＪＡＸＡなどの要請もあってプロトプランに宇宙開発分野が挙げられた。
その時は翔くんに近付いたと胸の前で小さくガッツポーズをした。
季節がいくつも過ぎて中学3年に上がるころに、鈴ちゃんの両親が離婚して中国へ帰国することになった。
引っ越しで大切な人が遠くへ行ってしまうのは悲しかった。けれど、私もあの時みたいに幼くないし弱くもないつもりだった。
だから、私は鈴ちゃんに「また今度ね」と再会を約束した。
鈴ちゃんは日本に帰って来る気満々で、
「明菜みたいな恋、アタシはしたくない。距離なんてブッ壊してやるんだから！」

そうガッツポーズして見せてくれた。
でも、織斑くんに告白は出来たのかな。それだけが私には気がかりだった。鈴ちゃんは織斑くんのことだけは直情的になれないから。
後で確認してみたら、
「鈴が日本に帰って来た暁には、毎日酢豚をタダで食わしてくれるって。持つべきものは友だよな」
鈴ちゃん……。
このころにはＩＳ単行での大気圏離脱、再突入は試験飛行を無事に成功させていた。
そのＩＳの名前はそう、
『桜花』
秒速５センチメートルで落ちる桜、秒速８キロメートルで飛ぶ宇宙ステーション。
あの頃の記憶を蘇らせるのには、たったこの２文字の漢字で十分だった。
中学３年、私は進路希望をＩＳ学園にした。勿論それは三橋重工の意向もあったし、私自身ＩＳを動かすことは楽しかった。
私のＩＳは専用機でもないけれど、元々生身の人間では行けない過酷な環境下での作業を目的とした機材などの試験運用なんかが主立った仕事だった。競技も苦手ではないけれど代表候補になれるほどの実力はなく、ＩＳ分野は競技部門と他分野汎用分野に二分された。
と言いつつ、他分野汎用分野なんてものに所属するパイロットは私しかいなかった。
そんな中、私はあることを耳にした。
再突入中のＩＳ『桜花』が暴走して墜落。墜落予測地点のドイツにてパイロットは無事に回収されたが、暴走の原因からサイバーテロが指摘される。
勿論こんなの関係者じゃなきゃ知りえない情報だけど。
私はこのニュースが他人事に感じられず、不安で仕方がなかった。
パイロットが無事なのを聞いて安心したが、これを機に宇宙開発か

ら手を引くことになるのではと考えた。
桜花が落下していく映像を見た時に桜が散るようにここで何もかもが潰えるのでは、と自分の気持ちと重ねていた。
けれどそれらは杞憂に終わり、桜花も存続し三橋重工も手を引く考えはないそうだ。
それが私にとって一層の励みになって、無事ＩＳ学園に入学を通常受験よりも早期に決め、私に専用機を預ける話も持ち上がった。
そして私だけじゃなく、世界を驚かせるニュースが飛び出した。

男でＩＳを扱える人が発見された。
一人は織斑一夏。
そして、もう一人は渡良瀬翔。

私はきっと、世界の誰よりもこのニュースに驚かされ、そして誰よりも喜んだ。
ことの顛末は織斑くんが公衆の面前でＩＳを動かしてしまったことから始まり、実は数年前から動かせていた翔くんが発表されることになった。翔くんのことは世界の混乱を避けるために、各国高官レベルまでで情報を秘匿していたらしい。
二人は今年の春からＩＳ学園にて生徒として入学することと決まり、今に至る。

◇

「にしてもあのバカと渡良瀬、だっけ？がＩＳ学園に入る、ね」
「うん。鈴ちゃんも中国の代表候補だなんてすごいね。にしてもなんでこっちに来なかったの？」
「うぐっ！だ、だってＩＳ学園に興味はなかったし全寮制じゃその……、い、一夏に会いに行けそうもなかったから、その……」
「話を全く聞いてない証拠だよ。ウィークデイは確かに学園内から出られないけど、土日祝日は許可書を発行してもらえば簡単に出られる

のに。それに織斑くんとは連絡先の交換をしていなかったとかもう色々残念だよ鈴ちゃん……」
「う、うっさいわね！だから今ウチんとこのお偉いさんにお願いして4月末にはそっちに行ってやるんだから！」
「あはは。なら鈴ちゃんがこっちに来るのは内緒にしておくね。驚かせたいでしょ？」
「そうね……。うん、黙っててね。アイツのアホ面見てやるんだから」
電話先の鈴ちゃんは心底嬉しそうな落ち着かない声色で話す。人の声のこと言えないじゃん。
「明菜も渡良瀬との再会、楽しみで仕方ないんでしょ？落ち着かない声の原因もそれね」
「やっぱり分かっちゃうよね。ニュースに翔くんが載った時は本当にびっくりしたんだから私も驚かすの。仕返しっ！」
「やっちゃいなさい！女に寂しい思いをさせる男なんてブッ飛ばしちゃいな！」
「ブッ飛ばしはしないけどね……。あ、もう時間だ。今から始業だからもう電話切るね」
「そうね。じゃあまたそっちで会いましょ」
そういって電話を切った。
入学式に翔くんの姿を見ることはなかった。でも、彼はここに絶対いるんだ。もう5年近くあってないけれど、私は翔くんだってわかる自信があった。
なんでだろう、雰囲気？もっと根本的なものだと思うけれど、確証の無い自信が私を突き動かす。
配布されたクラス名簿だと、翔くんは一組。私は二組だったから同じクラスではないけれど、隣のクラスなんだからいつでも会おうと思えば会える。
制服を着て一緒に手を繋ぎながら寮と教室を行き来する登下校。これに密かな憧れを抱かない女の子はいないと思う。少なくとも私はそうだから。
実は、鈴ちゃんとの電話は少し早くに切っていた。一組の教室を確

認するためだ。
教室にはまだ男の子の姿は見当たらなかったから、こうして一組の教室の前で来るのを待っていることにした。こうしていれば確実に会えるから。
「あっ……」
そして遂にその時が来た。
織斑くんじゃない男の子は一人しかいないからすぐにわかった。けど、私にとって見分ける基準はそこじゃない。
彼の姿を見たときに、見た目は随分と変わってしまっていた。真っ黒だった髪は三割近く色が抜けた白髪になっていたし、背も同じくらいだったはずなのに私より頭ひとつ分近く高くなっている。体だってがっしりと筋肉が付いていて逞しく感じるけど、なにがそう思わせるのか私には翔くんだと確信を持てた。
そう思い始めると、自分を抑えることは出来なかった。
自然と目頭が熱くなって頬を冷たいものが伝う感覚をはっきりと覚えた。
小走りになって駆け寄って、手を取った。
「翔くんっ！」
周りは翔くんのことを好奇の目で遠巻きに見ていたから、私の行動にビックリして黄色い声を上げた。私はそんなこと気にも留めていなかったけれど。
近付いて、気恥ずかしい心をはね除けて、自分でも分かるくらい真っ赤な顔をしながら彼の顔を見た。
ほんの少しだけ垂れた目元、よく私に微笑みかけてくれた口元、優しいあの独特な空気。全てが私を満たしてくれた。
「私、私ね、凄く会いたかったよ……。もう会えないと思ってたから。また会えてよかった……っ……！」
彼の胸に顔を埋めて泣き声を抑えて自分の気持ちを解放した。こんなに幸せを感じたのは初めてだった。
だからこそ、違和感を感じたのだろう。

彼が私を抱き返してくれることはなかった。

私が彼の胸から顔を上げ、彼の顔をよく見てみる。

何か困ったような笑みを浮かべて、私の心を突き刺す言葉を発した。

「僕たち、何処かであったことあるっけ？」

「えっ……？」

「酷く落ち着きがないね。きっと他人の空似だったんだよ。じゃあ、僕はもう教室に入るから。今度は間違えないようにね」

そういうと彼はハンカチを使って涙を拭いてくれた。そのまま私の手に握らせると、一組の教室へと入っていった。

「どうして……!?」

私が翔くんを間違えるはずがなかった。声の柔らかさも変わりない。間違えるはずがないのに。

私は翔くんに拒絶されているんだ。

嫌でもそれを認識してしまった。するしかなかった。受け入れたくなかった。

翔くんと私の再開は最悪としか言いようがなく、その絶望に私は咽び泣いて立ち尽くすことしか出来ないかった。

学園生活の始まり、心の在り処

「全員そろってますね～？それじゃあ、ＳＨＲ始めますよ」
我がクラスの副担任、山田真耶先生が発令した。
背が低くてポヤポヤした感じのこの先生で大丈夫かと聞きたくなる。こういってはなんだが、山田先生は幼く見えるし強く言えないのではないかというか、覇気がないというか……。
とにかく、なんだか子供っぽい先生だ。
「はい。それじゃあ、今年一年よろしくお願いしますね」
「……」
明るくクラスの雰囲気を引っ張っていこうとしているのがヒシヒシと伝わって来た。ああ、胸にスッと来た。間違いない。この先生は生と思いないい先生なんだ……。
そんな先生の意思とは裏腹に、クラスのみんなの視線は二か所に集中していて、妙な空気が生み出されている。
「げ、元気ないねみんな……。じゃあ、自己紹介から始めましょ！」
余りにもみんなの異質な空気に先生は若干気後れしてしまった。みんな反応してあげてよ！可哀想じゃないか！
いやね、俺だけでも反応してあげたいと思ってますよ？でもね、俺にはそんな余裕はなかった。
簡単な理由だ。
俺ともう一人、隣のやつ以外みんな女の子だからだ。
そりゃ、女性しか使えないはずのＩＳのことを学ぶ学園なんだから、女の子だけってのは当然だ。その例外が二人、出ちゃったわけだ。
先生、ごめん。このクラスの空気作ってるの、俺と隣の人です。助けるどころか元凶です。
こう、なんていうか。
初めて上野動物園に来たパンダ（名前は知らない）の気持ちが分かった気がする。いわゆる、客寄せパンダ。
（これは……。想像以上にキツい……）
まず席が悪い。一番前の真ん中に野郎二人が並んでいて、他はどこ

を見ても女の子、女の子、女の子。特にこのＩＳ学園みたいな女子高も同然の場所でこうなったら、クラスの視線を釘付けにしちゃうのもわかる。
（助けて……。居心地悪いよこれ……）
助けを求めるように、発見した幼馴染の篠ノ之箒を見やるが、少し目が合っただけでプイとそっぽを向かれてしまった。そりゃないぜ。俺、何かそんな嫌われることしたかよ……。
次は隣に座るもう一人のＩＳを使える男に目を向けた。
こっちは何というか、全く何を考えてるのかわからない。上の空だ。ポーッと宙を見てい。
しばらくしてこちらの視線に気が付いたのか、目がパチリと合った。
目元だけで薄っすらと笑みを浮かべて軽く会釈すると、また前を向いて宙を見る。
な、何なんだこの人……。
結局のところ、俺を助けてくれる人なんていなかった……。
「……織斑一夏くんっ」
「え、あ、はい！」
しまった。周りに救援を求めるのに夢中になって、自分の番が回ってきていることに気が付かなかった。
やばい、紹介の内容とか全く考えてない。
失念してたところに声をかけられたせいで素っ頓狂な返事をしてしまった。
周りからクスクスと笑い声が聴こえてくる。それが余計に俺の気持ちを焦らせた。
「名前順できて、順番的に『お』まで来たから、織斑くんの番なんだけど、自己紹介してもらえるかな？お、大きな声で驚かせちゃったのは、ほんとにごめんね？」
「あ、ああ、いえ、大丈夫、です」
落ち着け一夏！というか、先生が焦っちゃって逆にこっちは落ち着いちゃった。

「ほ、ほんとに大丈夫？大丈夫なんだよね？」
「はい、大丈夫ですので。自己紹介もしますから、先生も落ち着いて……」
先生も落ち着きを取り戻して一段落する。
よし、俺もしっかり落ち着けた。
「織斑一夏です。……以上です」
あ、ダメだこれ。
咄嗟になって何も頭の中に浮かばなかったから、もう何しても無駄だし手遅れだ。
自分に正直に名前だけにして自己紹介を終わらせた。
クラスのみんなはきっと、心の中でズテーンという音を出してコケているに違いない。
すまない、期待には応えられない。元々無茶なものだとは思ったがな。
スパーンッ！という子気味良い音が突如として教室に響いた。音源はどこって、俺の頭だった。
ていうか痛い。そしてこの痛みは何というか、既視感がある。こんな痛みを与えてくる人間なんて一人しか思い浮かばない。
頭を叩かれた衝撃で下を向いていた顔を上げて前に向ける。
そこには黒いスーツとタイトスカートに包まれた、鍛え上げられた体、オオカミのような鋭い目つきの見知った人がいた。
「げぇっ！関うづっ！」
またしても頭を叩かれた。
「誰が三国志の英雄か。それにお前は碌な自己紹介が出来ないらしいな。この馬鹿者が」
低いトーンで語りかけてくる俺の実姉、千冬姉。てかここで教師してるとか聞いてない。家族にはそれくらい伝えてくれよ……。
山田先生と今まで聞いたことのない優しい声色で何やら話している。おそらく、この場の引継ぎだろう。
そして教壇の真ん中にいた山田先生が少し横にずれて、そこへ千冬姉が位置取る。

そして声を張って言葉を発した。
「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠１５歳を１６歳までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」
なんという暴力宣言。だが、このクラスの人たちは戸惑いなんかを覚えずに、黄色い声援を上げた。
女子独特の甲高い声でキャーキャーと歓喜の悲鳴を上げる。
これは別に不思議なことではない。ＩＳ操縦者で元日本代表にして元世界チャンプ、世間はこう呼ぶ『ブリュンヒルデ』。
今や女子の花形ＩＳにおいて、女の子たちから憧れの的にならないはずがない。
このクラスじゃなくてもこんな反応されるんじゃないかな。
「全く。毎回私のクラスには馬鹿どもが集められる。わざとじゃないんだろうな？特に、今回は男を二人も送り込んできた」
やれやれと困った仕草をしてみせると、黄色い声は一転。はぁ～っとウットリしたような溜め息が聴こえてくる。
あれ？男子二人がメンドクサイとか言ってた？え、酷い。隣の彼も苦笑いしてるじゃないか。
「さて、ＳＨＲも終わりだ。諸君らにはＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で染み込ませろ。いいか？いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」
またしても暴力的な……。
こうして俺のＩＳ学園での生活は、不安のどん底からスタートすることとなった。
一時限目のＨＲが終わり、幼馴染の箒との再会を果たした俺は織斑先生からのありがたい鉄拳制裁を頭に受けて席で授業を聞いていた。
すらすらと教科書の内容を読み上げていく山田先生を尻目に、俺は

黙って下を向くだけだった。
開かれた教科書の内容は専門用語ばかりで、何かの古文書のように感じる。
なにこれ？全く理解できない。
あれだけ黄色い声を上げてワイワイとしていた女子たちも、今は教科書とノートに噛り付きながら先生の話を傾聴している。
（全く付いて行けてないのって、俺だけ？）
いや、女子はこの学園を目指すにあたってある程度のＩＳの知識を持っているから、俺とはスタート地点が違うはず。この際俺はゼロからスタートしているといってもいい。
これはまずい。必死こいて予習、復習を済ませなければ。と、思った矢先にふとしたことを思いついた。
隣のもう一人の男子。そう、確か名前は渡良瀬翔、翔だ。
翔はどんな状況なのかが気になった。俺と同じで全く理解できていないのでは？
そんなことを考えていると、山田先生から指名された。
「織斑くん、何かわからないところがありますか？なんでも聞いて下さいね」
ジーザス。
ここはもう知ったかしても仕方がない。それで回答をさせられた時になったら大火傷だ。火傷は小さいほうがいい。
「ほんとになんでもいいですか？」
「いいですよ。先生をどんどん頼って下さい！」
頼られたことが嬉しかったのか、胸を大きく張ってドヤ顔を見せてくれた。顔よりも主張の強い胸の方に行ってしまったのは内緒だ。
「ほとんど全部わかりません」
「えっ」
教室が凍り付いた。
「ぜ、全部って、全部、……ですよね？」
「はい。全部です」
「えっと……、皆さんの中で分からないところがある人は手を挙げて

ください」
誰も手を上げない。静まり返る教室。
え、ほんとに誰もいないの？
翔くん！君も今のこれ理解してるの!?男なのにすでに格差が出来てしまっているのかよ！
「……織斑、入学前に配られた参考書はどうした？」
「あ、あれを読んでおけばとりあえず付いてこれるはずなんですが……」
二人の先生から問いかけられる。そんなのあったっけ？
あ、それってまさか。
「すみません、古い電話帳と間違えて捨てました」
頭に雷撃が走った。
ゴヅン!!という鈍い音がした。織斑先生に教科書の角で思い切り殴られた。
これ、骨大丈夫か？
なんでこんな目に合わなければならない……。
普通の勉強なら人並み以上に出来ていたし、自分が間違えて捨てたことに非があるのは理解してる。
望んで来たわけでもないところでこんな仕打ちをされるのはなぜなのか。保護を名目にＩＳ学園にという女の園に放り込まれた俺の気持ちはいったいどこに？
「貴様、望んでここにいるわけではないと考えているな？望む望まざるに関わらず、人は集団の中で生きていかなければならない。それをしたくないのならば人間であることを放棄するんだな」
手痛い言葉を頂いた。
確かに千冬姉のような超現実主義者はそう考えるだろう。けれども的を射ている。
ＩＳを扱えたのは偶然の不幸かもしれないが、こんな惨めな状況になっているのは確実に自己責任だ。それに、自分の感情を言い訳に逃げようとする自分にも気付いた。かっこ悪いことこの上ない。
やるしか、ないな。

「大丈夫だよ！放課後時間が空いてれば先生なんでも教えるよ。一緒に頑張っていこうね！」
山田先生の優しい言葉に救われた気がした。
そうだ。始まったばかりなのに弱音を吐くのもおかしな話だ。
最初のこの学園生活に対する感情と、今の自分の感情はがらりと変わっていて、目の前は新鮮に見えていた。

横に座る渡良瀬翔は、朝からいままで席を一度も立たずに座って上の空の様だ。
一限終わりの小休憩では箒と話していたから声をかけられなかったけど、これからの学園生活で男友達は唯一無二の存在となるだろう。彼もそう思っているに違いない。
「少しいいか？」
「あ、うん。構わないよ。どうしたの」
うわ、改めて顔をこうやって見ると、今まで見たことのないタイプのイケメンだ。
王子様気質というか、優しさが直に伝わってくるような感じだ。
「いやさ、これから三年間男の友人ってのは学園内じゃ作れないと思うんだよ。だからさ、一緒に仲良くやっていこうぜって思って声をかけたんだよ。よろしくな。渡良瀬」
「そういうことね。翔でいいよ、織斑くん。こちらこそよろしく」
「俺のことも一夏でいいぜ」
「いや、下の名前で呼ぶのって慣れてなくってね。織斑くんのままにしておくよ」
うーむ、結構固い奴なのか。フレンドリーに一夏って呼んでくれりゃいいのに。
まあ、いいか。
「そうか。そんでさ――――――――」
「ちょっとよろしくって？」
翔にＩＳ関連のことを詳しく聞こうとしたら女子に話を遮られた。
金髪の縦ロールにお嬢様言葉。容姿はすごく整っているが、そのこ

ちらへの話し方は『いかにも』な感じだ。
いかにもというのも、ＩＳの普及に伴って女が優遇される社会となって来たのだから、こういった手の女が出てくるのだ。
ＩＳを使える女は偉い。男は格下の奴隷だ。といった感じだろうか。
女尊男卑の思想を持った女はすぐにわかる。
つまり、この子もその一種ということだ。
「君はイギリス代表候補生のオルコットさんだね。何か用があるのかい？」
翔が返答した。
イギリスの代表候補ってことは……。国家代表だった千冬姉の一つ下ってことでいいのか？
「あら、極東のこんな辺鄙な地でも私の名は聞き及んでいるそうですわね」
「そんなに有名なのか、翔？」
「まあ、国によって違うけどさ、専門誌なんかじゃ有望株として取り上げられてたし……」
「つまりエリートということですわ！あなた方のような卑しい方たちが合うことですら幸運ですのよ。分かっていて？」
「あ、あはは……」
「そりゃ幸運なんだろうな」
アイドルと同じ学校になったようなもんだと考えると、それは確かに幸運なのかもしれない。
「……バカにしてますの？」
失敬な。割と本心だ。
「それに、あなたよくこの学園に入学できましたね。ＩＳについて何も知らない様でしたけど。男で唯一ＩＳを使えると聞いてほんの少しは期待してましたのに。それがこんな知性の欠片も感じないようでは仕方がありませんね。こちらの方はある程度ご存知の様ですけれども」
「少なくとも3年はＩＳを動かしているかな」

「え、それ結構すごい！」
おっと、いつの間にやら立ち聞きしていた周りの子まで参加してきてしまった。
それからは翔が質問攻めにあう。
ＩＳに触った過程とか、三年間秘匿にされている間何をしていたのかとか、彼女はいるのかとか、好きな食べ物はあるのかなどだ。
段々と翔の顔色が悪くなっていく。こういうのに慣れていないのか、色々された質問の中に何か嫌なものがあったのか、それは分からない。けど、可哀想だし友達の為だから止めてやらないと。
「ちょっ――――――」
「とにかく！」
俺が止めようと思ったら、オルコットさん（でよかったっけ？名前）が声を張ってワイワイと翔を囲む女子が黙るように仕向けた。
「あなた方のような男が学び舎をこうして徘徊していることが――――――」
キーンコーンカーンコーン。
今度はオルコットさんの声が予鈴によって遮られた。
「ほら、みんな予鈴もなったし席に戻ってよ。先生に怒られるよ」
翔が周りを窘めて着席を促す。女子たちは「織斑先生に怒られるなら……」と不穏なことを口にしながら渋々といった感じで戻っていく。いや、それはダメだろ。
千冬姉が教室に入ってくるころには全員しっかり着席していた。そこはしっかりしているんだな、ＩＳ学園生。
「よし、全員いるな。では今から授業の前にクラス代表を決めてもらう。自薦でも他薦でも構わん。名を上げろ」
教壇に上って一番にそんなことを言い出した。
クラス代表って言うと、学級委員長みたいなものか？
「クラス代表はクラス間でのＩＳ対抗戦を行う。他に生徒会や委員会に出席して情報をクラスに持って帰って来る。これらが仕事だ。ちなみに対抗戦ではこのクラス代表がクラスの強さを表す指標となる。対抗心による向上を目的としているから、決まれば基本的には一年間

変更はない」
クラスがざわめきだした。そりゃそんな面倒くさそうなものを押し付けられるのは嫌だもんな。
近くの人と顔を見合ってこそこそと話す声があちらこちらから聞こえてくる。
「はーい！織斑くんがいいと思います！」
「分かった。候補一、織斑な」
「ちょっと待てよ！」
思わず椅子をガツンと後ろに押し出して立ち上がってしまった。
「なんだ？自薦他薦問わないと言ったはずだ」
なんと理不尽な！これ絶対男だから選んだんでしょ!?
「他薦されたからには責任を果たせ。期待を裏切るのか？」
うぐっ。
その言い方はなんかずるい。
「じゃあ私は渡良瀬君を推薦します！」
「すまないな。渡良瀬は候補外だ。諸事情によりクラス代表に選出出来ない」
やっぱ理不尽じゃねーか！
なんだそれ!?
「納得いきませんわ！」
そんなおり、後ろの方から声が聞こえた。振り返ればオルコットさんが立ち上がって机を叩いていた。
そうだ、納得できない。言ってやれ！
「男が物珍しいからと言って選ばれるのには納得しかねます！いい恥さらしですわ！そんな屈辱をこのセシリア・オルコットに一年間味わえとおっしゃいますの!?」
いいぞ！ん？馬鹿にしてないか？
「実力を考えれば私が代表となるのは必定！それをなんですか。私はこんな極東の地で極東の猿とサーカスをやりに来たのではありません！ＩＳ技術の修練に来ているのです！」
興奮した勢いのまま人を猿呼ばわりしてきた。馬鹿にするのも大

概にして欲しいものだ。人が傷つかないとでも思っているのか？
段々癪になってきた。
「大体、このような辺鄙で後進的な文化しか持ち合わせていない島国にいること自体が私には耐え難い苦痛で――――――」
「イギリスの方が辺鄙な島国じゃねえか。世界一まずい料理で何年覇者になってんだよ」
あ、つい言葉が出てしまった。
まあいい。
ここまで言われたままっていうのも日本男児の名が廃る。売られた喧嘩は買う主義だ。
「あ、あなた！私の祖国を侮辱しますの!?」
「どっちが先に侮辱した？言わなきゃこっちだって言わねぇよ」
キッとオルコットの目を睨み付ける。
ワナワナと震えて遂にはつけていた白いシルクの手袋を投げつけてきた。
「決闘ですわ。ＩＳで決めますわよ」
「おう。四の五の言うより分かりやすい。受けて立とうじゃないか」
こうして、クラス委員はＩＳでの勝負によって決めることとなった。

◇

クラスに入ってからもう3限目に入る。
僕は授業の内容に打ち込む振りをして、心は違うところに捕らわれていた。こんなところに僕の意識はなかった。
明菜と合うことが出来た。
ここ5年間で一度も姿を見たことはなかったけど、髪型もストレートロングから肩までの長さのポニーに変わっていた。背も同じくらいだったのが、僕の方が頭一つ程も大きくなっている。声も少し落ち着いているように聞こえるし、纏っている雰囲気にはあの時には感じ

もしなかった艶のようなものを帯びていた。
本当に会いたかった。
元気な姿を見たかった。
ＩＳに触れてしまって、それが反応してしまったあの日。それから僕の存在は世の中から秘匿された。世のために存在してはいけないのだ。
口に戸口は立てられないからと、『保護プログラム』の名目で、僕は一切の外部との連絡手段を絶たれた。
明菜との唯一保っていられたメールと電話という関係も容赦なく絶たれた。
僕の中にあった煮え切った憤りはぶつける宛もなく、ただエネルギーとして自分の中で燻るだけだった。
父さんはそんな俺にＩＳ操縦者となる道を示した。
僕は必死にその道を進むことにした。
基礎的な知識や動作をマスターし、日々訓練に明け暮れた。訓練に明け暮れている毎日は疲れたら死ぬように寝ていたので、ＩＳについて考えること以外のことを考えずにいられた。そうやって自分を押さえつけて、本当の感情が自分でも見分けがつかなくなるまで心と体をイジメ抜いた。それこそが僕にとって最高の自己防衛だったから。
１年近く経った時だろうか。僕に専用のＩＳが与えられた。
スペースシャトルのＩＳ、『桜花』だ。
父さんは名前を付けるのに、僕が子供のころから好きだったものから、特に美しく日本的な名前を選んでつけたらしい。これから引退するまでの永いパートナーとなると思って。
渡されて、名前の謂れを聞いて、押し殺したはずの感情にまた息吹が戻った。けれどもうあの時のような純粋な感情ではなくて、今の僕にとってはただただ首を絞めてくるだけの存在だった。
明菜は元気だろうか。体が弱かったし体調を崩しやすかったから心配だった。中学に上がってからまた何かイジメられるようなことはないだろうか。メールの端々にあった『織斑くん』の文字。もしかしてもう自分は必要のない存在なのではないか……。

そんな負の思考の悪循環に陥って僕に苦しみを与えてきた。
さらにＩＳの不具合まで出て来た。僕に最適化されてから、初期化指示を一切受け付けなくなった。
僕の精神状態が宇宙飛行士にとって相応しくないと父さんが判断し、初期化して操縦者を交代しようとしたが、初期化しないのだから僕が続投するしかなかった。
何度も何度も試験を繰り返し、その度に僕はいわゆる抗鬱剤を投与した。最高速度である秒速８キロメートルに耐えられる体にするため、血液にナノマシンを投与したり準ずる薬品を投薬した。
そうして何度も成層圏（ストラトス）を超える高度を飛び、ついに宇宙ステーションにさえ到達した。その時には黒かった髪の３割近くが白髪になっていた。
そしてヒューストン、宇宙ステーション、モスクワを交互に行き来する生活が始まり、名実ともに夢だったとなった。
我ながら気持ち悪いと考えてしまうが、日本の上空を飛ぶときはハイパーセンサーを使って明菜の姿を探してしまっていた。それもついぞ見つけることは叶わなかった
こうして夢が叶ってみれば、余りにも自分の下に残るものは少なかった。本当に欲しかった、叶えたかった夢が分かった気がした。
きっとそれは僕にとって、宇宙飛行士になることよりも難しいことなのかもしれない。
今目の前で繰り広げられるオルコットさんと『織斑くん』の言い争いをよそに、僕は一人ごちる。

夢は、叶わないから夢なのかもしれない。
あの時、僕には明菜を抱き返すことなんてとてもじゃないが出来なかった。
それが悔しくて堪らなかった。
心を曝け出せればいいのにと、どれほど深く思ったことか。

すれ違った再開

ＳＨＲが始まって、今はこちらに気を向けることで自分の感傷を紛らわしていた。そうしないと、私はあのことに心を圧し殺されてしまうから。

もう二度と会えないと思っていたから、もう一度会えることができて私の心はどれだけ解放されたことか。今までの悲しみが緩和されたことか。

でも現実は非情で、緩和された痛みを何十倍にもして返してきた。

なんでこんなことになるのかな……。

今まで分かっていた、分かっていたつもりでいただけなのかもしれないが、翔くんの心がどこにあるのか分からなかった。理解することが出来なかった。

「次は牧瀬さん、自己紹介お願いしますね」

「あ、はい……。牧瀬明菜といいます。趣味は料理です。ＩＳでの戦闘は苦手ですが、一年間よろしくお願いします」

用意した紹介内容を感情なく読み上げる。

こうして、私のＩＳ学園での生活は始まった。

暗い闇を落としながら。

◇

昼食の時間、織斑（くん付けだけはむずむずするからやめて欲しいと嘆願された）に誘われて二人で食堂に向かった。

おばちゃんに発券した券を渡してほんのちょっとだけ待つと、すぐに料理が出てきた。

二人で空いている席を見つけて、というか周りの人たちがモーゼの奇跡のように割れて、そそくさ開けてくれた席に着くと、自然と二人でため息を吐いた。

「なんというか、ほんとに男っていうのは肩身の狭い生き物なんだなって実感したよ」

「織斑、言うことが爺臭いぞ。まあ、こんな視線にさらされ続ければそういう気持ちになるのも理解できるけどさ」
「翔はどうなんだよ。こんな立場で辛くないのか？」
「人と話せるだけで気が楽さ。僕がＩＳを動かしたときは非公式な場所だったからすぐにその情報を防いで、人間関係を完全に統制されたから友達なんて片手で数えられるかどうかだよ。だから、こんなんでも嬉しかったりするんだ」
　僕は本心を口にした。
　最初に引っ越したモスクワではロシア語なんて話せるわけでもなく、周りがそれなりにフォローしてくれたが、本心を話せるほど親しくなった人もいなければそれを口にするほど言葉が堪能でもなかった。
　ヒューストンに越した時には中学に上がる間も無く『保護プログラム』によって人間関係と情報の行き来を統制された。
　まともな友人が出来るわけなんてどこにもなかった。
　だから、何か裏を隠さずフランクに話しかけてくれる織斑の存在は僕に確かな友情と安寧を与えてくれているようだった。
「そっか。俺がこうしてＩＳを使えることが分からなかったらずっと一人だったんだな。一歩間違えれば俺もそうなってたって考えるとゾッとする」
「だからこそ、僕は織斑に救われたって言って良いかもしれない。ありがとう」
「いやいや、なんかそう言われるのは照れ臭いというか偶然だから大丈夫というか」
　織斑は顔を赤くして文字通り照れ臭そうに、注文したうどんをすすって誤魔化した。
「それにしても、ああやって代表候補生のオルコットさんに大見得切るのは男らしかったよ。僕にはとても出来そうにないね」
「男は度胸だよやっぱり。女尊男卑のこんな世の中じゃあ中々通せるものじゃないかもしれないけどさ。千冬姉、じゃなくて織斑先生にきっついこと言われただろ。あの時に１つ決めた覚悟みたいのがあ

るんだ」
織斑先生に言われた言葉。
望む望まざるに関係なく集団の中で生きるには、という言葉だ。
確かに正論だけど、その正論が時に人を傷つけるのではないかと考えてしまう。僕のように望みもしないのに集団から追い出され締め出された人間もいる。
恐らくだが、あえてキツく突き放すような言葉を言ったのだろう。自分の弟だからこそ信じてあえて選んだ言葉なのだろうか。そう感じずにはいられないし、それは正しかった。
「目指すなら上へ、トップが良いってさ。望んでこんな立場に居ちゃいないけど、こうなっちゃったからには男代表とした、威厳を見せつけたいとか考えてるんだ」
こうして乗り越えて上を目指している。前を向いている。
いつも振り返って後ろばかりに気をとられている僕とは偉い違いだ。

「織斑はさ、すごいよ……。そうやって自分の気持ちだけで強く前へ上へとのし上がっていく。そんなやつを見てると自然と応援したくなっちゃうな」
「そんな事ないって。翔だって3年間ＩＳをずっと動かしてるんだろ？やっぱ大変なのか？良ければ教えてくれ！」
「教えるのはいいけど、戦闘訓練とはかじる程度にしかしてないんだ。基本操作だけだけどいい？」
「ああ！ありがとう、助かるよ。ほんとのところさ、ＩＳでの戦闘って一回しかしてないんだ。試験の時に一度だけやったんだ」
「へぇ。僕は自分の専用機を持っているけど、勝てなかったなぁ。いや、当然なんだけどさ」
「俺もなんだかな。なんていうか、試験官の人が突っ込んで来たから避けたんだよ。そしたら壁に当たって撃墜判定出ちゃったんだよな。これって倒したって言っていいのか？」
「倒したというより倒れたって感じだね……」

それはどうなんだろう……。
勝負は時の運とも言うけれど、なんて表現したらいいのだろうか。とりあえずその試験官の教諭が心配だ。色々と。
自分で注文したカレーライスを口に運びながら、話は一か所に留まらずにあちこちへ飛んでいく。
関係ない話から関係ない話へと飛ぶ会話に、久しぶりにこんなに会話をしていると感じた。これも織斑の人柄が成せる業なのだろうか。
食べ終わった後、食器とトレーを返却に持っていく。
そこで僕は会いたくなかった人と合った。
「お、明菜じゃん。そういえばお前もＩＳ学園だったな」
「織斑くんと、……翔くん……」
「え？二人とも知り合いなのか？」
織斑は明菜の消え入りそうな声を聞き取って、僕と明菜、二人を交互に見ながら尋ねて来た。
「ああ、朝も彼女には会ったんだよ。誰かと勘違いしたらしくてさ」
「……」
「そ、そうなのか？」
「そうだよ」
止めてくれ。
沈黙してそんな目をしないでくれ。胸が張り裂けそうだ。
そんな自分の感情を押し殺して、表情を上手いこと取り繕って笑顔を出す。
「んじゃ、紹介するか。小６からの幼馴染の牧瀬明菜だ」
知っている。そんなことは。
「まあ、俺とよく一緒につるんでた友人の一人だから、これから仲良くしてやって欲しい。明菜は引っ込み思案なところがあるから、クラスで友人が出来るか心配で心配で……」
「そっか、牧瀬さんね。改めまして渡良瀬翔です。よろ――」
「――――っ！」
明菜は僕の挨拶を聞き終わる前に体を反転させてその場から逃げ出した。

その時の顔は酷く狼狽していて、今にも泣きだしてしまいそうなほどに目に涙を溜めこんでいた。
僕は明菜を深く傷つけた。
――――――当然だ。でも、これでよかったのかもしれない。
「な、どうしたんだ明菜のやつ……。今まであんな顔は見たことないぞ？」
「そうだね。嫌われちゃったみたいだ」
「そんなはずないだろ。何かの勘違いだ。すまんな、また今度しっかり紹介するよ」
状況が飲めずに焦った一夏の真っ直ぐな眼差しが酷く僕の中の後悔の念を呼び起こした。

放課後、山田先生から部屋の鍵をもらって自分の寮室に向かった。
急遽この学園に入ることになった僕は荷物をここに送り付けて、外部から入学式に参加した。そのため、今初めて自分のこれからの部屋に入ることとなる。
配慮されたのか、僕は機密を扱うことが多いから一人部屋を希望したら、その希望は通った。
鍵を開けて入ると、一つだけ大きな段ボールが入っているのみだった。
中身はＰＣ、私服、食器、しばらくの食料、そしてアルバム。それ以外の日用品全ては備え付けのものだ。
ルームメイキングというほどのものもないが、中身をそれぞれ決めた位置へ移動して荷解きは終わり。
ＰＣを立ち上げて２５桁もの長いパスコードを入力する。するとメールが届いていた。
『桜花戦闘型開発計画』と記されていた。
内容は、桜花に記録されるデータをもとに、対ＩＳテロ用、競技用などと用途の違うプランがいくつか記されている。
「役人もこんなことをする暇があるなら……」
添えられた文から推測するに、桜花の次の開発段階への予算が足り

ず、競技用、軍事用に展開していくことで、競技関連や軍需産業面で埋め合わせようとしているのか。
スペースシャトルとしての役割を担える上に、ＩＳとしての活動も可能なポテンシャルに目を着けるのは良いけれど、純粋に宇宙開発ができれば良いだろうに。もしかしてこういうことのために僕をわざわざＩＳ学園へ入学させたのではないかと勘繰ってしまう。
プランの実行を了解するメールを送信してＰＣを閉じる。
時間を持て余した。
ＩＳについて教えてほしいと言っていた織斑がくる気配もなく、ただベッドにゴロンと寝転がった。
荷物に入っていたアルバムに目が行く。
これだけはどうしても捨てられなかったし、引っ越しの時に必ず荷物に詰めていたものだ。
僕と明菜の思い出。だけど、今は開く勇気も度胸も余裕もない。
自分にはまだ早い。そう考え、段ボールに入れてベッドの下に収納する。
「僕も、織斑みたいに発見されていれば……」
今ごろ、こんなに苦しむことはなかったのだろうか。

「緊急事態！完全にコントロールを失った！ＯＳと共にハッキングに対して対抗するも無効、このままでは翔の命が危ない！」
通信の向こう側で声が聞こえる。
いや、通信だけがこうして行えるのだろう。
証拠に、僕がどれだけ体に命令しても全く桜花は応えてくれなかった。体が動かないのだ。
スラスター全力で下降に対して使われており、想定再突入速度を遥かに超える恐ろしい速度が出ている。
いわゆる人体改造的な投薬を行っていなければ、僕の体はボロボロになっていても可笑しくない。絶対防御があるため命に別状ははな

いと思うけど、許容範囲を超えた熱量と衝撃が僕を蝕む。もはや痛みなんて感じないまでに。
桜花は何者かのハッキングによってコントロールを失い、僕の意識は現在かかっている再突入での衝撃で既に希薄となっている。それでとなお重力に引かれるはずもないＩＳで、地球の底へと、下へ下へと落ちていく。
「スラスター出力低下、エネルギーシールドの残量僅か！省エネルギーモードに移行します！ＰＩＣ出力最小限、落下速度減衰極小！」
「パイロットのバイタル低下、心肺停止してます！このままでは危険です！」
「今ドイツの部隊へ協力要請を出した！ＡＩＣ搭載ＩＳによって緊急停止を計る！今のうちにロスコスモスに連絡をとって、急患受け入れの報を入れておけ！」
もはや周りが自分を助けようとしていること何て気がつかなかった。体にかかる圧力が加わるようになると、僕は完全に意識を手放した。

モスクワの施設で看護される僕に、ジョン・ロウズ国際宇宙開発機構（ＩＳＤＡ）長官が面会へ来た。
「調子はどうかね？」
良いわけがない。
全身に麻酔が効いている今の状況でどうすれば返事ができるのだろう。
混乱の渦中にあって状況をうまいこと思い出せない僕に、長官は語り始めた。
「今回の桜花墜落事故、外部からＩＳへのハッキングによってコントロールを喪失し、そのまま君は再突入の衝撃に耐えられなくなった、覚えているかね？」
ギリギリ残っていた意識を思い出して頷く。
「ブリュンヒルデの指揮下にある、ドイツ軍のＩＳ部隊によって救助された。そのことよりことは覚えていないのだな」

頷く。
「私が危惧していたことが現実に起きたわけだ」
問答を終えたのか、ロウズ長官はことの顛末を話し出した。
「我々が開発しているＩＳ『桜花』は単行で大気圏を離脱、再突入を可能にしたＩＳだ。技術的には未だ各国が開発したばかり、または試験段階、開発途中の第三世代を大きく引き離す、第四世代のものと言っても過言ではない」
長官は僕の枕元に置いてあった見舞品のリンゴを１つ手にとってかじった。
「『桜花』は戦力として、兵器運用を想定していないからその面での水準はかなり低い。しかし、宇宙航行を可能にした高い技術に対する各国からの工作、テロはいずれ起きると予想していた。それに加えてパイロットが唯一ＩＳを操縦できる男となれば、その危険性は格段に跳ね上がる。だから君に対する情報、存在を秘匿した。それでも、今回のようなテロが起きた」
長官の言いたいことを僕は理解できた。
今は言葉を発せないが、詰まるところこういうことだろう。
「辛い現実を突きつけるようだが、これからも君を標的にしたテロは何度も起こり続けるだろう。その度に君は命の危機に直面する。そのことを重々承知して置きたまえ」
僕を中心にテロ行為が起こる。
その忠告なのだろう。

気付けば少しうたた寝をしていた。
あのテロの時の夢だ。
今思えばサイバーテロといっても、あのようにＩＳそのものにハッキングを仕掛けられる人間なんて、行方不明の篠ノ之博士以外に存在しないだろう。もっぱらあの人は『白騎士事件』の巡航ミサイルハッキングの主犯だとも言われている。ＩＳのデモンストレーションに

丁度良いだろうから。
けれど、解せないことはいくつもある。
初期の発表当初は宇宙開発用パワードスーツだったが、あのようなデモンストレーションをすれば軍事使用されるのは火を見るよりも明らかなのに。仮に篠ノ之博士がそうしたのなら、初めから軍用パワードスーツと発表すればよかったはずだ。
父さんは宇宙開発に文字通り命を賭している人だから、篠ノ之博士の行動にはいつも怒りと疑問を抱いていた。
けれど、そんなことを僕が考える必要はないだろう。
僕にとっての問題は、テロに他人を巻き込んでしまう可能性だ。
織斑の存在発表後に僕が言い渡されたＩＳ学園への異動は正しく、僕らを保護することが目的なのだろう。
僕の存在を知っていたのは、ＩＳＤＡの中でも主要となる下部組織、日本のＪＡＸＡ、アメリカのＮＡＳＡ、ロシアのロスコスモスの三つ。そして各国政府の長官だけだ。
元々僕の情報は公開されるはずがなかったが、匿名希望の情報が各国大手マスメディアにリークされ、殆ど体裁を保つためにＩＳ学園への入学が決定された。
「ＩＳ学園ならテロ対策も施されている。３年間まともに人と関わらなかった君にとって良い刺激になるだろう。良い機会だ。学生時代を楽しんで来なさい」
長官からはそういって送り出された。
だから、この３年間は大切に過ごしたいと思っている。
卒業して保護から外れたとき、また僕はあの孤独の中に戻っていかなければならないから。
だから、友好を確かめ合っても深い関係になることはできない。みんなをテロに巻き込むことなんてしたくはない。
明菜との関係も白紙にした。僕が一番テロに巻き込みたくない人だから。
過去から深い関係を持っていたという情報が流れたとき、彼女にどれだけの苦労と災難が降り掛かるか分かったものじゃない。

それだけは何としても避けたかった。
明奈が僕のことを忘れていてくれればどれだけよかったか。僕が明奈にとって必要のない存在になっていればどれだけ救われたか。
彼女は僕を忘れていなかった。
僕と同じように、きっといくつもの想いを募らせていたのだろうと、抱き付かれたとき手に取るように理解できた。
だから、徹底的に突き放した。拒絶した。
「明菜、僕のことはもう忘れてくれ……」
僕はそう言葉に出さずにはいられなかった。

決闘の行方

「織斑……」
「大丈夫。言わなくても何が言いたいか分かるから」
初日にオルコットさんとの対戦が決まって数日が経ち、翌日にその対戦を控えた今日。織斑は終ぞ僕のもとを尋ねて来なかった。
そのかわりに、毎日会うたびに絆創膏や湿布が増えていった。一体何があったんだろう……。
「箒、あ、篠ノ之箒な、同じクラスの。幼馴染みなんだけど、何故か同じ部屋にされてな。あのときは間が悪かったんだよ。色々見ちゃってさ……」
「ああ、うん。察したよ」
「てかなんで翔と同じ部屋じゃないの？」
「一人部屋を申請したら通ったけど」
「そんなの聞いてないぞ俺！」
そんなこと僕に言ったってしょうがないだろ……。
話によると、昔からの幼馴染となんの不満もなく再開できた織斑は、篠ノ之さんに「腑抜けてるじゃないか！鍛え直してやる！」と言われて、この一週間近くずっと剣術の鍛練をしていたらしい。
本人に言わせると、拷問を受けていた、そうだ。
傷が毎日増えるんだから、あながち間違っていないのかもしれない。
そして今日、なんとか言ってＩＳの基礎訓練を実行しようとした矢先、練習用ＩＳの申請枠は既に埋まっていた。
つまり、もうＩＳを使っての練習は出来ないことが決定した。
「俺さ、箒に文句言ってもいいよね？」
「それは全部終わってからにしなよ。そんなことより、今はすることがあるでしょ」
織斑を俺の部屋に上げている今、明日に向けて必要なことをする。作戦会議だ。
「敵を知り、己を知れば百戦危うからずってことだよ」

「敵は知れても己を知れないんじゃ」
「……」
「なんでもございません」
　この様子を見るに拷問だと言いつつも、ＩＳの実機訓練を忘れた織斑にも責任の半分はあるんだろうなこれ。
　織斑のすっとぼけ具合には少し呆れてしまう。
　そうため息を吐きながらＰＣを立ち上げて、公開されているオルコットさんのＩＳの情報を集めた資料を見せる。
「オルコットさんの所持しているＩＳはブルー・ティアーズ。イメージ・インターフェースの代表格であるＢＴ兵器を用いたオールレンジ攻撃と、高火力な遠中距離射撃武装、レーザーライフルのスターライトｍｋⅢ。これらを使って相手のアウトレンジから一方的に攻撃するのが得意戦術だね」
　イギリス政府が公開している戦闘動画と合わせて説明した。基本的にこのブルー・ティアーズはＢＴ兵器試験用のために、情報が開示され軍用や競技用とは一線引かれている。
　開発技術の公開による国力の誇示と言えば良いのだろう。
　織斑はウンウンと唸りながら、何度も動画を戻しては再生してまた戻すのを繰り返している。
「何か動きに引っ掛かりがあるんだけど……。駄目だ、思い浮かばない」
「少なくとも近距離での戦闘を完全に拒否しているから、インファイトに持ち込んめれば織斑持ち前の剣術で勝ち目が見えてくる」
「そうじゃなきゃ勝てないみたい言い方だな」
「当たり前じゃないか。一朝一夕で勝てるなら、国家の代表候補なんて存在に意味はないでしょ」
「そりゃそうだよなぁ……」
　僕の言葉に弱音を吐く織斑。
　そもそも今回のこの件はやっぱり無謀としか言えない。
　でも、僕の目からすれば勝ちの目はいくらでもあると思う。
「僕から出来るアドバイスはいくつかあるよ」

「なんだ！教えてくれ！」
弱音は吐いても勝ちには拘る、それが織斑なのだろう。
目の色を変えて食いついてきた。
「まず第一、こっちは向こうの情報を持っている。向こうは何の情報もない。これはとても有利に働くよ」
ある程度行動の予測が付けば、自分がとるべき行動や戦術は分かる。逆に相手のを嵌めることも出来る。
でも向こうはこっちの情報がないのだから、いわゆる初見殺しが可能になる。
「次に、オルコットさんは典型的な女尊男卑主義者で代表候補生。つまり、油断や慢心する要素が十二分に揃っているからそこを突ければベストだね」
恐らくはこれが一番重要な要因だと思う。
彼女の様子を察するに、確実に慢心を持っている。けれど長期戦になればその慢心は消えるだろうから、如何に早く決着を着けるかが勝利の鍵だ。
「あとは天命に任せよう」
「最後は運かよ！」
そういうしかないじゃないか。
一つの判断ミスで取り返しのつかない差が生まれる。そうでなくても元々実力差があるのだから。
「四方八方から飛んでくるレーザーを避けながら近づいてインファイト。でも確実にインファイト対策の何らかの物を隠し持ってるはずだ。情報公開は全てをさらけ出すものじゃないからね」
能ある鷹は爪隠すってわけじゃないけど、全ての情報を公開するほどバカではないのだから、隠し兵装をいくつか所持していてもおかしくない。
「それに勝負は時の運っていうけど、その運っていうのは最後まで勝ちを目指す者に味方するんだ。オルコットさんは勝ちは当たり前のものだけど、織斑の勝ちは目指すものだ」
「そうか、うん！そうだな！絶対勝ってやる」

僕の言葉に励まされたのか、拳を高く突き上げて高らかに叫んだ。
この時、織斑ならなにかやってくれるんじゃないか、と思えた。それは僕が織斑に感じたコンプレックス故なのだろうか。

当日、織斑先生と山田先生に連れられて織斑と篠ノ之さんと僕でアリーナの選手控え室に行くと、そこには真っ白なＩＳが鎮座していた。
これが織斑の専用機、『白式』だ。
世界にただ二人の男のＩＳ操縦者なのだから、専用機が配布されないわけがなかったし、それについては前々から用意されると織斑には伝えてあったようだった。
織斑はこの『白式』の姿に立ち尽くしている。
なにか思うところがあるのだろうか、少なくとも自分が対面したときにはあった。
「直ぐに装着しろ。最適化する時間はないが、戦闘中に自動で行う。ぶっつけ本番だがいけるな？」
織斑先生が声を低くして尋ねる。
織斑は無言で頷き、黙々と装着していく。
装着は直ぐに済み、足を動かしたり手を握ったり広げたり、体を捻ったりして具合を確かめる。
「なにか気分が悪かったりするなら直ぐ言ってほしいが、その様子なら問題ないな。行ってこい。一夏」
「ああ、行ってくるよ千冬姉。俺は今、望んでこの場にいるよ」
姉弟の絆がそこにあった。
前に言われた言葉に対する織斑の反骨心が、ただの嫌みではなく自ずから出した答えなんだと思う。何故なら織斑の目は鋭い力強さと自信に溢れていたから。
「箒、翔、俺は勝ってくるよ」
「ああ、行ってこい！」

「今の織斑なら勝てるよ。諦めるなよ」
僕らが送り出すのに多くの言葉は必要なかった。
ＩＳを操縦するのはこれで二回目のドが付くほどの素人のはずなのに強い説得力を感じるその姿は、僕にとっての羨望を年を抱く存在だった。

「織斑先生、あの『白式』ですけどもしかしなくても所持武装って……」
「そうだな。現役時代を思い出す」
やっぱりそうなるのか。
もう戦闘を開始してから２０分近く経っているが、織斑はオルコットさんに苦戦を強いられていた。というのも、右手に握られている刀型の近接武装。それを振り回しながら逃げ回るオルコットさんを追い回しているからだ。
ＢＴ兵器とレーザーライフルの段幕を回避運動しながら近づいていくが、どうしても何発か被弾してじりじりてシールドエネルギーは消耗していっていた。
所々が非常に粗っぽいが、その戦闘スタイルはブリュンヒルデ、かつて日本代表だった織斑先生と同じだ。
「やっぱり射撃武装はないんですね」
「そうみたいだな。何の問題もない。寄らば切る、寄って切る。下手に戦術を扱えないあいつにとってこれほど分かりやすい戦術もあるまい」
全くその通りだ。その通りだけど、その理屈は貴女だから言えるのではないだろうか？
これでは初見殺しも出来ない。例えば瞬時加速を使えれば話しは別だ。初見殺しとして絶大な効果を誇っただろう。だけど搭乗回数二回の織斑にそれは無理だ。
せめて、当てることは出来なくても威嚇牽制の射撃が出来れば近づくことが出来るはずだ。それさえも出来ないこの状況でなんてそれこそ不可能に近い。
それに相手は完成されたインファイト拒否を実行し得る実力者で、

相性は絶望的だ。
どうすれば織斑は勝てるのだろうか。僕はそう頭を抱えた。
「どうした渡良瀬。何故お前が頭を抱えている？」
「え、あ……」
織斑先生に唐突に尋ねられた。
咄嗟に返事が出来なかった。
なんで僕は織斑が勝つことに拘っているのだろう。同じＩＳが使える男としてのシンパシー？それとも厚い友情を感じている？
確かに僕は希薄ながら友情を感じていたが、それは頭を抱えるほど深いものではなかったはず。自分の中で心変わりでもあったのだろうか。僕は人と深くかかわってはいけない人なのに。
そんな自分に困惑している僕に対して織斑先生は告げた。
「お前はこれまでに自分が経験したことで老成してると思っていたが、それは理性だけだ。本質的には年相応のガキなのだな。なにがお前を掻き立てるのかは想像できなくもない。だがそんなに肩肘張っていてはいつか壊れてしまうぞ」
試合を注視しながら、優しい調子でそう告げた。
……僕は織斑先生が考えているほど老成もしてなければ心も強くない。
それならば僕はどうすることが正しいのか。
それを聞く勇気さえない僕には、こうしていることが一番未来に不安を覚えずにいることが出来る。
これが精一杯の僕にとっても、他人にとっても最大防御なんだ。関わった人がテロに巻き込まれたら、僕はきっとその重責に耐えられない。
織斑もこれから3年間は普通に過ごせるだろう。
けれども卒業してしまえば、きっと僕と同じ道を辿ることになる。
やっぱり、織斑に感じているのはシンパシーなのだと結論付けることで、僕は逃げようとした。
「あいつ、油断しているな」
「油断？」

「ああ。左手を握ったり開いたりしているだろ。あれがあいつの癖でな。勝利を確信した、油断しきっている証拠だ」
だが、織斑先生はそれ以上深く追求してこなかった。それどころか、目はしっかりとこの試合を事細かく見ていた。
織斑先生の言う通りに左手に注目すれば、実際にそうしている。
それが本当ならば、自分が油断をしてどうするんだ織斑！

◇

操縦感覚にも慣れて来た。
こうしてセシリアの射撃を避け続けて１０分、もう結構削られているが、翔に見せてもらった映像の違和感が分かった。
あいつ、ＢＴを使ってるときはそっちに集中して動けない。それに的確すぎる射撃のせいで、俺の集中が一番行かないであろう場所、人の死角になってるところに必ず打ち込んで来る。
それさえ把握できれば、避けるのは簡単だ。
ライフルを構えれば銃口に注目して、動きが止まれば死角に備えて回避運動してやればいい。それどころか、わざと隙を作ってやればそこに必ず正確に飛び込んで来る。
「アンタの弱点、完全に見切った！」
「ふん！この圧倒的な差に遂に妄想に捕らわれてしまいましたのね。もう踊り疲れてしまったのかしら？ではフィナーレにして差し上げますわ、哀れな極東のお猿さん！」
戦闘中で通信がオープンチャンネルになっているのを確認して挑発する。
イメージしていた方向とは違うが、挑発に乗って一気に攻めて来た。
これはチャンスだ！
全周囲３６０度の視界を取ることが出来るＩＳのハイパーセンサーは優秀だが、人間が扱うからどうしても真上や背後の見えている

はずの視界に意識が行かない。何度も自分で確認するように、セシリアはそこを突いてくると反芻する。
だったらこうだ！
――――――ボンッ!!
「なぁっ!?」
真上と真後ろに意識を向けてやれば、丁度真上に飛び込んで来たＢＴを見つけた。そのＢＴにむって捩じり込む機動を取りながらブレードを叩き込んだ。見事にＢＴは爆散し、セシリアはその光景に驚愕していた。
「――――――あと３機！」
「こんなことッ！」
セシリアはライフルで牽制して俺から大きく距離を取る。勿論そんなこと俺が許すはずもなく、全力で距離を詰める。
距離を取ったセシリアはさらに３発、本命と牽制を交えたライフルを打ち込み、それを回避する俺にＢＴを向かわせた。
「そこまでは俺も読めてるぞ！」
ライフルを回避する勢いで、背後に回り込んだＢＴに向かう。頭上にも意識を向けていたが、あそこに向かったＢＴは牽制用だ。全く照準が定まっていないのが丸分かりだ。
ＢＴの照準を下へずらすように突っ込み、ブレードで叩き切る。
「これで残り２機……！」
「あ、ありえませんわ！こんなことって！」
「ありえるんだよ代表候補生ぃッ！」
狼狽するセシリアに向かってまたフェイントを交えながら飛び掛かり距離を詰めていく。
この調子で行けば、行ける！
その調子が続いて、残りの２機も順調に破壊する。
自分が考えていたよりもあっさり終わり、少し拍子抜けしてしまう。
「どうした代表候補生！これでもうオールレンジ攻撃は出来ないぞ！」

「こ、こんなことってありますのぉ！無茶苦茶ですわ！」
ここからはもうこっちのものだ！
セシリアはもう後退しながら俺にライフルを打つことしか出来ない。こっちと同じく攻撃の選択が一択しかないなら、勝敗はイーブンのところにあるはずだ。
向こうはまだまだシールドエネルギーが残っているが、こっちはあと3回エネルギーシールドを貫通されたら負けるだろう。
だから、寄れば俺の勝ち。寄れなければセシリアの勝ち。
「ならばぁっ！」
寄って斬る！
その時、アラートが鳴った。
でも攻撃を受けたときのようなアラートや警告音でもない。一体何なのかと思っていると、コンソールパネルに文字が表示された。
『最適化が完了しました。確認しますか？』
セシリアに飛びかかりながら、俺は迷わず確認をする。
するとＩＳが眩しい光を放って俺を包み込んだ。
光に包まれた後、この『白式』を動かしやすくなった感覚を得て、自分の体を確認すると所々無骨だった外装が洗練されている。なんというか、ただ洗練されているんじゃなくて俺に合わせて姿を変えただけのようだ。
これでようやく、こいつは本当の意味で俺専用となった。
「あ、あなたまさか今まで初期設定のままでしたの!?」
「そうだ！やっとこっからが俺の本番だ！」
「有り得ませんわ！私がこのような姿を見せるなどと！」
「有り得なくないんだよ！」
懐に飛び込むことに成功し、一次移行してから形の変わった野太刀のようなブレードで横凪ぎにする。
それはかわされたが、ここで終わらせるほど俺は諦易くなんかない！
更に追撃を仕掛ける俺に、セシリアが勝ち誇った笑みを見せた。
「掛かりましたわね！」

そう言うとブルー・ティアーズの腰部なら脚部にかかる大型のスラスターが分離してこちらに向かって飛んでくる。
「ブルー・ティアーズは４機じゃなくってよ！これでフィナーレでしてよ！」
急速に近づく俺と、猛スピードで突っ込んでくる２つのミサイル。それによる総合的な接近速度はバカみたいに速い。けれどもそれは、
「それは読んでいたぞぉ！」
そう。
翔が隠し武装を確実に用意しているであろうと教えてくれた。だから、最初からミサイルみたいな形をしているあのスラスターはそうなんじゃないかと当たりをつけていた。
それが見事に的中した。
体をミサイルの軌道上部へねじり混み、その回転の勢いのまま横に一閃抜き胴のようにミサイル２本を真っ二つに切り、それによる爆発でさらに『白式』を加速させてセシリアへ肉薄する。
ふと表示されたブレードの名前に目がいった。
銘は『雪片弐型』だ。
千冬姉が日本代表の時、武装は刀型近接ブレードのみで覇者へと登り詰めた。その時のブレードの銘が『雪片』だった。
そう。これは千冬姉の正当な後継なのだ。
まさか、男の自分が憧れだった姉の後継者になれるとは思わなかった。特に、このＩＳ完成については無理だと決めつけていた。
だが、今こうしてなれている。
あの千冬姉を継いでいるのだ。
「翔は勝つために情報と知識をくれた！箒は体の動かし方を思い出させてくれた！俺は一人じゃない、３人でこの場に立ってるも同然だ。それが一人で戦ってるやつに負けるはずがない！」
「何を訳の分からないことをごちゃごちゃと！」
「そして！この一刀で俺は千冬姉を継ぐ！継いでみせる！」
完全にセシリアの懐に潜り込んだ！
今度は逃げられないように切り抜ける勢いで突進しつつ全力で雪

片弐型で袈裟斬りにする。
「そのためにも、お前にはここで負けてもらうぜ！」
「ああん、もうっ！インターセプター！」
逃げ切れないと判断したのか、セシリアも近接武装を取り出して見せた。それを持って俺に刺突してくるが、射撃攻撃の精度と比べると格段になっていない。
翔の言った通り、インファイトは不得意のようだ。
俺は完全に勝ちを確信した！
「ぜぃあああああぁぁぁぁ!!!!」
雪片弐型の刀身が割けるように開き、そこから荷電粒子？で出来たであろうビームの刀身が伸びる。
一振り目は刺突の勢いのままかわされるが、それは布石だ。避けられるとは思っていたから、あえてフェイントとしての袈裟斬りだ。
本命はこっち、避けられた後の横一閃だ！
ーーーーーーギンッ！
独特の接触音が鳴り響いて、俺の剣撃は確実にセシリアの胴体を捉えた。
シールドバリアを貫通し、操縦者の生命の安全を確保する絶対防御に届いた。
「いっけぇぇぇぇぇ!!」
そしてこの一撃で俺は……！
ーーーーーー両者、シールドエネルギー0！よって引き分け！
勝つことは出来なかった……。

戦いの後、再開の前に

「この馬鹿者が」
　ピッチに帰って来た織斑を待っていたのは、織斑先生による熱い鉄拳指導だった。
「お前は私の使っていた雪片、あれの性能と特性を知っているな？」
「エネルギーシールドを貫通というか、無効化して絶対防御を発動させる。それで大量のシールドエネルギーを消費させて一撃で仕留める、であってるよな？」
　バシンッ！
「痛ぇ！　」
「教師にタメ口とは貴様いつから偉くなった？半分正解だかまだ完全解答ではないぞ」
「え～っと……。あ、自身のシールドエネルギーを消費してその効果を発動するんだった！」
「そうだ。諸刃の剣なのだから、頻繁に発動できるものではない。そして自分のエネルギーが少なければ少ないほど不利になる。仮にオルコットからより多く被弾を受けていたら、お前は負けていただろうな」
　勝てなかった理由を説明され、納得はしていてもその顔は悔しさに歪められている。
「2回目の操縦なのに、それも初期設定のままで代表候補生にあそこまで戦えているんだ。それだけで周りからは尊敬の眼差しで見られるよ。織斑はよくやったよ」
　僕が織斑にかけてやれることばなんてこの程度だ。
　勝てなかった上に、引き分けというはっきりとしない試合結果に煮え切らない気持ちなのは何となく分かるが、それに対する本当に必要な言葉が僕には見当がつかない。
　でも、これは僕の本心からの言葉に違いはなかった。
　それも織斑には届きそうになかった。
「違う、違うんだよ翔。俺が目指しているのは千冬姉の後継者なんだ。

そう決めたんだ。だから、それは客観的には翔の言う通りかもしれないけど、俺にとっては言い訳なんだ」

「……」

そうなのか。

そうかもしれない。けれどそれは焦りだ。

手が届かないと自分で思い込んでいるものを必死に追い求める姿、それに似た姿勢を織斑はしている。

それは過去の僕に似ていた。

努力さえすれば報われる。先へどんどん進めば見えてくる未来がある。開ける未来があると思っていた。

けれども、それは僕の中で作り出した自分勝手な理論に過ぎず、結局のところ自分の心をすり減らすだけのものだった。

織斑の目に光が宿っている。それが僕との違いだろうか。

ならきっと、本質を教えれば織斑は今の自分をいつかは振り返ってくれるだろうと思った。

「織斑先生だろうと、失敗はするだろうし、全てにおいて完全無敗というわけではないよ。それに織斑は先生とは違う。焦る必要なんてないよ。失敗して、その度に起き上がれる勇気と心があれば織斑の夢は必ず叶う。だから、自分を無理に追い込まない方がいいよ。いつか心がだめになってしまうから」

自分にとっては、叶うわけがない夢。

でも織斑の夢はきっと叶う。

身の丈に合った夢だから。

個人の技能に対するテロは起きない。けれども、技術を開拓した者に対しては起こり得る。

だから、織斑と僕では立場が違うから事情も違うのだ。

所詮僕の夢や希望というのは、秒速8キロメートルで飛ぼうが、1センチメートルさえも近付くことはないのだろう。

そんな自虐的なことを考えつつ織斑に言った。

僕はそれ以上に何かを言える資格もないし、かける言葉も見当たらなかった。

後は織斑先生が色々話してくれるだろうし。
そのまま織斑の返答を聞かずにピッチを後にして自室に戻った。

自室に戻ってメールを確認すると、父さん達から緊急の召集がかかっていた。
恐らく桜花に兵器を積み込む用事だろう。
場所はヒューストンの開発施設。明日の朝に日本の下請け会社の人間とヒューストンまで飛んで来いと書いてある。
飛んでくる理由は、その下請け会社のＩＳの試験飛行も兼ねているらしい。
ＩＳで飛んでいくということは、特にこちらから向こうへ持って行くものはないということだったので、余計な支度とかはせずに手ぶらでその下請け会社に向かえばいいということだろう。
「はぁ」
自然とため息が出てしまう。
僕自身、この学園に入学する意味はなかった。
既にＩＳの知識について、この学園で学ぶことはない。あるとするならば、いわゆるＩＳを用いた戦闘に関することだろう。
だから、形だけの入学。本質はＩＳＤＡの職員で、定期的に国際宇宙ステーション（ＩＳＳ）との交信のために学校にいないことが多くなるだろう。だから、本当に形だけの入学のつもりだった。
「……楽しいのがいけない」
楽しいんだ。
ＩＳ操縦者となってから、僕は学校という存在からは無縁だった。学校生活で得られるはずだった友情や青春、それらのもの全てを手放して宇宙飛行士（コスモナウト）になったのだ。そうなってしまったのだ。
だから、今のこの学園生活は投げ出した3年間を取り戻しているみたいで楽しかった。
男友達なんて、今までに出来たことはなかった。
僕は小学校に入る前から明菜と一緒だったから、他の男子と遊ぶことなんて考えもしなかった。そのせいで明菜との関係をからかわれ、

余計に明菜以外の人と遊ぶことはなかった。二人でいられればそれでよかったから。
結局のところ、僕は明菜に依存していた。いや、しているんだ。だからこそ、人との交流で形容できないこの寂しさを紛らわすことに、安らぎと楽しみを覚えていたのだろう。
友達のために何かに悩んだことなんて久しぶりだ。明菜のこと以外なかっただろう。
必死にアドバイスをして、必死に応援して、その友人が困った時に一緒に頭を抱える。
それは自分の理想の一つであり、叶えつつあるものだった。
この三年限定のものであろうとも、僕はそれだけで幸せだった。
宇宙を孤独でさ迷うことは、こうも人をセンチメンタルにしてしまうのだろうか。
人間関係に飢えさせてしまうのか。
「明菜……」
会いたいという本心と、会えないという現状の板挟みにあって僕は崩れそうだ。
ＩＳ学園で会おうと思えばいつだって会えるだろう。でも、そうじゃないんだ。
一週間前に明菜を拒絶したあの日から、僕らの関係には途方もない亀裂が入っているに違いない。
証拠に、明菜は僕を見かけると視線を反らす。
自分から拒絶しておきながら女々しくて都合のいい話だが、僕はそんな光景に出くわす度に、心を蝕まれる音が聞こえるようだった。
何故普通に再会させてくれなかったんだ。あの決別の時まで想い逢っていたのに、なんで……。
拒絶なんてしたくなかったに決まっている。仕方がなかったことも分かっている。
けれども。
けれども時間は僕の傷を癒してなんかくれやしない。
蝕んで蝕んで、心を釘付けにして放してくれない。

こんなに近くにいるのに、心の距離は一向に縮まることはないのだろう。
中途半端に人の温もりを知ったからだろうか。
織斑という人と触れ合って、人の温もりを知ったから、それが明菜であればどれだけのものだろうと想像して止まないのか。
そんな堂々巡りの考えをしているうちに、僕の意識は遠退いていった。
もう一度、あの時間に戻りたいと願いながら。

◇

「牧瀬さん、今日からこれが貴女の専用機だよ。名前はまだ決めてないから、貴女の好きな名前で登録しておいてね」
黒いタイトスカートに青地のカッターシャツ、その上から裾の長い白衣を羽織った黒縁メガネの女性、三橋重工の私の担当主任兼研究者の三島さんは、試験場に私を連れてきてそう言った。
目の前には黒紫色のＩＳが鎮座していて、それは他のものより一風変わった形をしていた。
ＩＳというのは、脚部が機体の高さの３分の２以上を占めていることが多く、それはスラスターが集中しているのが理由で、現在それが主流だった。
それに対して、目の前の黒紫のＩＳは脚部がえらくスッキリして甲冑のようで、代わりに背部に大きな２つのスラスターと可動翼が特徴的だった。
「このＩＳのコンセプトは、今まで牧瀬さんが収集していた『人間が活動できない場所での活動』を目的とした試験運用、それを元に、従来の後付武装によって可能とするのではなく、ＩＳそのものがもつハードウェアとして発展させて開発させたもの。後付武装なしでも地球上の様々な過酷な環境で活動を行える。言わば擬似第四世代ＩＳだね。これ単機で後付武装なしに、シールドエネルギーを消費せずに、局地対応できる」

話を聞きながら、このＩＳを装着して最適化する。
コントロールパネルを開いて機体のスペックを確認する。
耐熱性、上限９００℃。真空状態でも活動可能。圧力では水深８０００メートルまでは耐えることが出来る。出力は、１０トンの重量を持ち上げられる。最高飛行速度は時速９００キロメートル。
確かにこのスペックは競技用でも軍事戦力でもなく、正しく災害時の救援活動を行うのに相応しいものだった。
考えうるのは物資輸送、火砕流や火災現場などでの活動、潜水艦などの救助、かな？
これに後付武装を備えれば大抵の環境下で活動できる。
「ＩＳＤＡの渡良瀬博士はこう言った。『ＩＳの本質は戦闘能力の高さではなく、環境適応性の高さと操縦者の安全性だ』とね。元々は宇宙服の延長線にある代物だから、間違っていない。現に、渡良瀬博士は戦闘能力を考慮しない『桜花』を開発し、役立てている」
私は渡良瀬の名前に体を強ばらせてしまった。
心の中で頭を振って、今は考えるべきことじゃない、と思考をこちらに戻す。
「桜花は素晴らしいスペックを持っている。打ち上げ重量は1トンと既存のロケットに比べて非常に少ないが、それ以上に打ち上げの安全性、必要人員数、所要時間等が格段に向上している。我が社としても、あれの更なる開発に協力して会社の利益、人類の利益となることを視野にいれているんだ」
私が三橋重工に入ったときには既に桜花の存在は発表されてから分からないけど、三島さんは発表されてからはこればっかりらしい。
このＩＳ開発部門で1，2を争う研究者の三島さんが会社上層部に嘆願したからこそ、私は雇われて競技用、兵器用以外の開発がスタートしたらしい。
勿論、ＪＡＸＡからの技術協力要請もあった状態での判断でもある。
「さっそくだが、来週すぐに機動試験を行いたいんだ。内容は追って連絡するけど、学校には一週間程度休学を要請しておいて欲しい」

「あ、あのわかりましたから！ちょっと落ち着いてください！」
三島さんは心底鼻息を荒くして興奮気味に言った。
私は自分でもボーッと呆けている方だって自覚はあるけれど、こうやって声を大きくして出すのは、なんだか久しぶりに感じる。
それに、こんなに三島さんが声を荒げるのも珍しい気がする。
「落ち着いてなんていられないね！なんてったって、桜花の打ち上げに立ち会えるんだから！今回の輸送は宇宙探査機の輸送を兼ねているし、桜花の積載打ち上げ試験も兼ねている」
「えっ!?」
「わわっ！どうしたんだい？」
「い、いえ。なんでもないです……」
心底、心底驚いたし嬉しい気持ちも悲しい気持ちも、どんどん際限なく湧いてくる。
また翔くんと会える。それはとても嬉しいものだし、今にでも踊り出しそうな気持ちで一杯だ。
でも、彼はきっとまた私を拒絶する。それが怖くて仕方がない。
学園での初日、あれから私は意識的に翔くんを避けている。それは自分の気持ちを裏切ることで、その度に心をキツく締め付けられる。
けれども、またこっちから話しかけて拒絶されたらどうなるだろう？きっと私は壊れてしまう。おかしくなってしまう。そうならないために私は彼の存在から離れようとしている。
学園生活を送る中で、気づけば翔くんを探している。そして必ず見つけてしまう。でもそれは彼に近付かない為なんだと自分に言い聞かせている。目があってもそっぽを向くしかできない。
彼と向き合えないのから。
だから、鈴ちゃんからの電話にも出られない。
翔くんについて聞かれてしまったら、きっと私は泣き出してしまう。今の私には友人にすがる勇気もないから、どんな言葉でも拒絶してしまう。
彼から貸してもらったハンカチも返せていない。返してしまうと、本当に彼との繋がりが切れてしまう気がした。だから返せていない。

自分の心をどれだけ偽っても、彼との関わりを絶つことは出来なかった。
「本当に大丈夫かい？顔色も悪くなってるよ」
思考の海に溺れていた私を三島さんが引き抜いてくれた。
気付けばＩＳの最適化も完了していて既に一次移行となっている。
角張った機体は丸みを帯びて、洗練されている。
色合いも少し変わっている。さっきまでただ単に黒紫一色だったのが、何本もの黄色く細い線がカーブを描いて模様を作っている。
「無機質な機体が随分と美しくなったね。これだからＩＳは止められない。この子は一体どう成長するかな。それは貴女次第なんだ。これから色んなことに励みなさい」
このＩＳの姿を見て私はあの光景を思い出した。
遠い想いでの日々、その中でも鮮烈に私に刻み付けられた光景の一つ。
別れの日、一面に広がっていた色とりどりの花。
その花々の一角に、このＩＳと同じ色をしたものが爛々と咲いていた。
「三島さん。この子の名前、決まりました」
「そうかい？早いね。何て言うんだい？」
あの花を見て、私達は別れた。
色褪せても、会えなくても、きっと同じ事を想い続けていると私は信じている。
これは私の決意の一端。
まだ本当の意味では踏み切れない私だけど、この位は許されるよね？
「名前は、『秋桜（コスモス）』です」
私の心は移り変わらない。
どんなことがあっても、貴方がどんなに遠くに行ってしまっても、私はずっと絶対に翔くんのことが好きなんだ。

Meeting to Virgin Flight

あの試合が終わった翌日、ＳＨＲ前に席についた俺は翔から言われたことの意味を考えていた。

「心が壊れてしまう、お前は千冬姉じゃないんだから焦るな……かぁ」

俺は焦っているつもりはなかったし、そんながむしゃらに見えてたのか？

確かにあの引き分けてすぐの時は悔しかったし、あの時発動した『白式』の単一仕様能力「零落白夜」だって、咄嗟に発動するんじゃなくてしっかり確認していれは分かっていたものだ。

雪片弐型ってブレードの名前も、千冬姉がモンド・グロッソで優勝した時のものと同じ名前だ。少し想像すれば「零落白夜」のことを思い付いたはず。

結局のところ、勝てる試合を逃したのは俺の油断のせいだ。翔にも箒にも申し訳ない。

千冬姉に追い付きたいと考えていても、それはあくまで最終目標であって、そこまでトントン拍子で行けるほど甘くないことは、弟の自分だからこそよく分かる。千冬姉の背中をどれだけ見てきたことか。

そもそも千冬姉はＩＳ操縦者として憧れにしてこそ目標にしちゃダメだろ……。

射撃戦が基本のＩＳで近接装備しか持ってない方が奇特なんだ。

俺のこの『白式』は零落白夜を発動させることを前提にするために、雪片弐型を積んでいる。だからこれは外せない。雪片弐型のお陰で、一次移行にもかかわらず単一仕様能力を使える。

けれどもこれのせいで拡張領域の全てが使われていて、ナイフ一本後付武装に入れることは出来ない（ここらへんの詳しい知識は、翔が帰った後に山田先生から聞いた）。

だから、俺は嫌でも千冬姉の戦い方を身につけなければいけない。それが勝ち上がる唯一の道筋だと考えている。

話がずれたが、焦って千冬姉に近付けるならいくらでも焦るが、そんなことで至れる境地ではないのだ。
だから一歩ずつ確実に近づいてみせる、とは思った。焦る要素なんて何もない。
逆になんで翔は俺にそういったんだろう？
翔は優しいし、同年代から見ても落ち着き過ぎているようにも感じる。
たまに見せる顔は物憂げというか悩ましいというか。クラスの内外から女子がうっとりとしてしまっている。
何か自分がそう感じているところでもあるのか……？
いや、翔に限ってそれはないな。
焦ってる様子も何もない。
ただ、たまにするその物憂げな顔は何なんだろう？
そうこう考えていると山田先生が来た。
俺は腕を組んで仏頂面で俯いていた顔を上げて、なんとなく周りを見やる。
ってあれ？隣が空席だ。
翔、来てないのか？
「みなさんおはようございます！昨日は色々ありましたが、実際に戦うのを見て学べることは多かったと思います。というわけで、一年一組のクラス代表は織斑一夏君に決定しました！一が揃ってて、なんだか縁起がいいですね」
「そんなことより、翔のやつは来てないんですか？」
「そ、そんなことよりって大事なことじゃないですかぁ……。渡良瀬君は今日から2週間公欠です。なんでも、ＩＳを使った宇宙での実験があるらしいですよ」
山田先生がそういうと、クラスが大きく湧いた。
「やっぱり渡良瀬君は只者じゃなかったのね！」
「あの時々見せるセクシーな悩ましい表情……。私たちと同年代とは思えない！」
「ほら、宇宙とかに行くと思想とか性格とか、なんかそういうの変わっ

ちゃうって聞いたことあるよ。きっとそれよっ」
「宇宙を旅する大人な渡良瀬君と、剣を振るう爽やかな織斑君……。女の監獄にこんなイケメン男子二人を賜るなんて、神様は寛大よね!?」
「掛け算しなきゃ……掛け算しなきゃ……」
と、口々に黄色い声を出した。
やっぱり、翔は人気があったのか。うん。男の俺から見ても確かにかっこいいもんな。
ていうか、俺もその中に入れられるのはなんというか、嬉しいような恥ずかしいような……。
「お前ら静かにしろ」
後から少し遅れてやって来た織斑先生こと、千冬姉はクラスの空気を締め直した。
「渡良瀬は重要な任務を預かって今日の朝早くから学園を出発した。恐らくニュースにも出るだろう。貴様らも学びに励み、一人前になれ。いいな、わかったな?」
そういうと、さっきまでの黄色い声は嘘のようになくなり、全員のはいっ!という返事が重なった。
もうここまでこのクラスは教育されているのか。さすが千冬姉だ。
それにそうか、翔は宇宙開発の仕事と掛け持ちで入学してるんだったな。
そんな素振りを全くしなかったし、宇宙の話なんて聞かなかったから忘れちまってた。
「では、SHRは終わりだ。織斑、今年一年間クラス代表として、クラスに、学園に奉仕するんだな。よろしく頼むぞ」
ん?え?
何か面白いことが聞こえてきたぞ。
俺がクラス代表?
それは本気で言ってるのだろうか?
千冬姉は冗談とか言わない人種だぞ?
「返事をしろ。貴様がこれからクラス代表だ。拒否権はない。奉仕し

ろ。以上だ」
「……はい」
なんでこんなことになっているんだ……。

◇

「えっ」
「あっ」
ＩＳ学園から出ているモノレールに乗り、駅を出たらすぐに迎えの車があった。その車に乗って下請け会社の三橋重工に着いてすぐ、思いもよらない人にあってしまった。
明菜がそこにいた。
なんの心の準備もしていなかった僕が心を乱すのは必然だった。
なんで明菜がこんなところに？
「えっと、牧瀬さん、おはよう」
「……おはよう。渡良瀬くん」
自分が蒔いた種だが、明菜に下の名前で呼ばれないのはショックだった。
小学校に上がる前からの付き合いで、今まで名字で呼ばれたことはなかったか尚更だ。
明菜も僕が牧瀬さんと呼んだとき、同じ事をかんじたのだろうか？ならば始めて会ったことを装った時なんて、もっと辛い気持ちになったに違いない。
つくづく自分が如何に酷く醜い人間かを理解した。
「渡良瀬くんの打ち上げる宇宙探査機『ひこぼし』と必要機材をヒューストンまで運びます。運搬と輸送用ＩＳの試験飛行を兼ねたテストパイロットの、三橋重工所属、牧瀬明菜です。２週間ほどですが、よろしくお願いします」
明菜はそう言って、笑顔で右手を差し出した。
「ＩＳＤＡ所属『桜花』パイロットの渡良瀬翔です。よろしくお願いします」

入学の日のあの抱擁以来、久し振りに明菜に触れた。
６年近く触れていなかったのだから、久し振りという言葉は違和感があるかもしれないが、僕にはこの一瞬で数日間が膨大な時間に感じてしまった。
「上司の私が自己紹介をせずに、部下が先に済ませてしまうとは……。私は三島律子。牧瀬の担当主任をしております。私は飛行機の都合もあるから先にヒューストンに向かうけど、向こうではよろしくね」
奥の建物からキャリーケースをがらがらと引っ張ってきた三島さんはそう短めに挨拶すると、それじゃあといって僕の横を抜けて会社を出ようとする。
「あの子、２０分も前からあそこで貴方を待っていたのよ。渡良瀬君のファンなのか、それとも旧知の仲なのか。私はそんなこと知らないけど、仲良くして上げてね」
「っ！」
心臓が止まるような感覚に襲われた。
明菜は僕のことを諦めずに想っているのか？
無駄とかそういう言葉を使いたくないけれども、僕はその想いに応えることは出来ない。だからあの日に拒絶した。
これ以上僕は明菜を裏切りたくない。いっそのこと、頬を叩いてでも拒絶するべきなのだろうか？
そんなこと、僕に出来るわけがない！
中途半端な拒絶でこうなってしまったのだろうか？なんで僕を忘れてくれないんだ？
僕たちの想いは仮に一致していたとしても、それを世界が繋ぎ留めてなんかくれないというのに、どうしてこうも側に置こうとするんだ。
引き裂くならいっそのこと遠くへ、二度と出会えないように引き裂いてくれ！
そんな心の叫びを吐き出してしまわないように、懸命に飲み込む。
「それじゃあ、早速出発の準備をしよう。飛行時間は１２時間程度だから、その間食事も取れないし大変だね」

「そうだね。それじゃあ、出発前のミーティングをするから会議室に移動するよ。着いてきて！」
「おぁ、ちょっと！」
明菜は無邪気に僕に微笑んで、手をぐいっと引いた。
瞬間、僕の不安な気持ちの全てが払拭されたように感じた。
僕の願いが叶ったのか？
明菜の手の温もりが、あの遠く果てしない過去の、思い出の日々を思い起こさせた。
初めて出会った保育園。馴染めない僕を、明菜は手を引いて遊びに誘ってくれたこと。
小学校ではいつも一緒にいることをからかわれて、それで泣いてしまった明菜の手を引いて家まで帰ったりした。
桜の木の下を、明菜は僕の手を引いて駆けずり回った。
コスモスの咲き誇る秋、別れの日にはお互い手を引っ張らずに、同じペースで歩いていた。別れの際にはキスをして、お互いの気持ちが同じ場所にあることを確かめ合った。
そんな幸せな気持ちが次々と沸き上がって、それが永遠であればいいと思ってしまった。
たからこそ、今僕たちが置かれている世界が許してくれないから、悔しくて仕方がなかった。
「少し、痛いよ」
「あっ。ご、ごめん」
「ううん。いいの。緩めてくれたからそれで」
僕は無意識の内に彼女の手を握る力を強めていた。
ハッとして手を離して明菜の手を見てみると、僕の握り方が悪かったからか、明菜の手の甲には爪痕が付いてしまっていた。
「痛かったでしょ？本当にごめんね……」
「いいって言ったでしょ？大丈夫だから」
明菜は離した手を見て、爪痕の付いた手を反対の手で包んではにかんでいた。
今の彼女の気持ちは分かる気がするけど、手を離してみて僕は現実

に引き戻された。
だから彼女のその笑顔に対して、僕は自分の心に蓋をするしかなかった。
「ねえ、渡良瀬くん。私の専用ＩＳの名前、知ってる？」
「えっと、知らないよ。話を聞く限りだと、今日が世間に初顔出しらしいじゃないか」
「えへへ。それも当然だよね。だって４日前に私が名前を付けたんだもん。知ってる人なんてまだ三橋の人と私だけだよ」
「そ、そうなんだね」
僕の知らないようなことをわざわざ探して問いかけて、知らないって言えば笑顔を見せて僕に答えを教えてくる。彼女は何も変わっていない。
その笑顔はいつも僕の本心をさらけ出させる。
今もこうして僕の心の蓋を開けようとする。
「秋桜（コスモス）っていうんだよ」
こうやって、僕の心を激しく揺さぶるんだ。
たった数分の出来事だと言うのに、僕の心は目まぐるしく容貌を変える。僕を振り回す。
自分の心だというのに、それについて行くことは出来なかった。

◇

拒絶される怖さよりも、求める勇気の方が勝った。
私はそう感じた。
２０分前までに会社の地下駐車場の本館入り口。そこで翔くんを待った。
翔くんが車で連れられて来ることは分かっていたから、必然とこの場所を通ることになるから。
２０分も前に来て待ち伏せしたというよりは、目が覚めてしまったから早めに来て、待ち伏せすることにした、と言った方が正しい。
早く目が覚めたのは、きっと自分の決意のようなものがそれだけ強

くて緊張していたんだろう。
でも早く来たお陰で冷静にもなれたし、自分の本心も整理出来た。
重い女だとか、厚かましい女だって思われても仕方がないと思う。けれども、訳が分からないまま拒絶されて、そのまま引き下がるほど私の気持ちは弱くなかった。
私は翔くんが好き。ずっと好き。
この気持ちは変わらないものだけど、翔くんが私のことをどう思っているのか。それだけが私の心に軛を打つように突き刺さっていて、翔くんが私以外に好きな人がいると言ったら、きっと私は壊れる。その軛から粉々に打ち砕かれてしまう。
はっきりと言ってくれない翔くんが悪いんだ。
そんななんというか、煮え切らない態度の翔くんを私が引っ張っていかなくちゃ、なんて気持ちになってしまった。だから昔を思い出して、咄嗟に彼の手をとって引っ張った。
ハッとしてみると、かなり大胆な行動だったと思う。
翔くんはギュッと強くてを握り返してきた。それはすごく強くて、私の手の甲には爪痕が残った。
血こそ出ていないけどちょっと痛かった。
でもすぐに離してくれて、怪我の心配までしてくれる。
私に初対面であるように振る舞っているけど、昔から私を心配してくれたりするその優しさは全く変わってなかった。それが堪らなく嬉しかった。
それに翔くんの爪痕が残ってて、私が翔くんのものである証明に思ったりしちゃって、気恥ずかしくて嬉しかった。
会議室では今回の仕事の説明がされた。
予定が話されていたのより少し変更があった。
ヒューストンへ直行するなら、アリューシャン方面へ飛んで行くのが最短コースだけど、ハワイの研究施設にある探査機の回収をしていく事になった。
ハワイでの打ち合わせと積み込みをして行くので、5，6時間は増えるらしい。

でも休憩出来るようになるから有り難いかなと思っている。
変更点はそれだけなので、ミーティングにはこそまで時間を取られなかった。
そこからは一旦翔くんと分かれ、ＩＳスーツに着替えて倉庫で落ち合うことになった。
そして会議室を出ると、私たちは囲まれていた。
「渡良瀬さん！こっち見てください！」
「男で最初にＩＳを動かした人の意見を聞きたいのですがぁ！」
「ＩＳで宇宙へ行く感覚を一言でお願いします！」
「隣の女性とはどういう関係ですかーぁ!?」
扉を開けた先は報道陣がフラッシュを焚きまくり、カメラを何台も回している。
一斉にマイクをこちらに突き出して、更衣室への道を完全に塞ぐ。
「あの、もう試験飛行までの時間がないので道を開けて貰えませんか？」
愛想笑いを浮かべながら囲む報道陣へそういうけど、離してはくれなかった。
床の方に目を向けると、警備員さんが何人か倒れている。恐らく押し切って来たのだろう。
「世間にちゃんと説明してくださいよ！」
「世間は答えを求めていますよ！」
「責任を果たして下さい！」
「我々には報道する義務があるんですよぉ！」
更に詰め寄ってくる報道陣。
企業として秋桜の存在と今回の実験の話は公開している。する責任があった。
ある程度こうなることが予想できていたけれど、ここまで来るとただの妨害出しかない。
翔くんは愛想笑いを絶やさないが、その顔色は明らかに苛立ちを覚えていた。
「今回ロールアウトする秋桜のテストパイロットの牧瀬さんですね？

一言もらえますか？」
「お二人の関係についてコメントもらえますか？」
「ええっ!?えっと、あの……」
男のＩＳ操縦者なんて世界に二人しかいないから、こうやってくどく絡まれても仕方ないよね、可哀想だけど。なんて思いながら脇を抜けようとすると、私まで囲まれてしまった。
ど、どうしよう。こういう時どうすればいいなんて私知らない。翔くんをこの場に置いていこうとしたバチなのかな？
こうやって翔くんと私は扉を出て前から動けなくなっていると、ミーティング進行の役員さんが私たちの手を掴んで会議室に引き込んだ。
「ごめんね。まさかここまでマスコミが妨害になるとは予想してなかった。今二人はＩＳスーツを何処に置いてある？」
「あ、えっとそれは……」
私はＩＳスーツを既に服の下に着込んでいた。
けっこう着るのに時間がかかるし手間だったから、家を出るときに来てきたのだ。
でもそれを言うのは憚られた。
そんなずぼらな女だって思われたくなかったし……。
「僕は下に着込んでいるので、服を脱ぐだけですからここでも大丈夫です」
「そうか。じゃあ悪いけどここで脱いでくれ」
「構いませんよ」
どうやら翔くんも着込んでいたらしい。
早速翔くんは服を脱いでＩＳスーツの姿になった。
翔くんのＩＳスーツは黒地の一色で、何故かおへそを出すデザインになっている。
上下の丈も肘と膝までで、ピッチリしているから翔くんの体の輪郭がよく出ている。
全体的に筋肉がしっかりついている。やっぱり宇宙飛行士だから筋トレとかしっかりしてるのかな。

ＩＳスーツもピッチリしているので、太ももや二の腕などがうっすらと筋肉の形に張り付いている。
太ももは特に水泳選手みたいだ。
腹筋も割れていて逞しい。
男らしくてかっこいいなぁ……。
「で、牧瀬くんは何処にあるんだい？」
「ふぇっ!?えっとはい……」
「悪いけど時間が結構押しているんだ」
ついうっとりしてしまっているところに急に話しかけられて、びっくりしてしまう。
それと、もうみんなを待たせられないよね……。
「ちょっと棚町さん。女の子に対してデリカシーが欠けてますよ。人が人なら訴えられてます」
「ぬっ？ああ、北原の言う通りだ。済まなかったな。この通りだ」
「いえ、いいんです。下に着てますので今脱ぎますね……」
役員さんこと、棚町さんは女の役員、北原さん（私、三島さん以外の社員さんの名前全然覚えてないんだなぁ……）に諭されていたが、私がはっきりと言わなかったのが悪かったんだ。
その場ですぐに脱ぎ始めると、翔くんはパッと私に背を向けた。
きっと真っ赤になってただろう私の顔は、今はっきりと耳まで赤くなっていることを自覚した。
そりゃ急に脱ぎ出したら、下にＩＳスーツを来てるって言ってもびっくりするよね……。
翔くん以外の男性は頭に？を浮かべていたけど、北原さんがキッと睨み付けると慌ててそっぽを向いた。
穴があれば入りたい……。
「もう仕度は終わったんで大丈夫ですよ……」
私の着ているＩＳスーツは、指定のスクール水着のようなタイプではなくて、競泳水着のような太ももまで丈があるタイプだ。色はワインレッドを選んでいる。
意識的にか、翔くんは私を見ないようにしていた。

恥ずかしいからあんまりジロジロ見られたくはないけど、露骨に目をそらし続けるのはなんだか癪に思ってしまった。
「さて着替え終わったな。じゃあ、今からこの窓を開けるからそこから倉庫へ。『ひこぼし』を積み終わったらハワイの研究施設に真っ直ぐ飛んで行きなさい。こんな形になってしまって済まない。試験の成功を祈ってる」
棚町さんがそう言うと、窓を開けた。
会議室の人たちに順番に握手をして窓側に着くと、先に私がジャンプして飛び出し、落ちる前に秋桜を展開した。
続いて翔くんが飛び出して桜花を展開する。
「わぁ……！」
「どうしたの？」
「渡良瀬くんのＩＳ、綺麗だなって」
「ははは、ありがとね」
翔くんは愛想笑いで返してきたけど、本気で綺麗だと思ったんだ。
秋桜の元になったＩＳというだけあって、脚部と腕部は甲冑のようにスッキリとしている。
背中に５枚の花弁のような放熱板？を備えていて、色合いは白地を中心に、機体の末端に近づくほどに段々と桃色が濃くなっている。
見た目だけで桜を連想させるカラーリングだった。
「さ、そんなことより倉庫に向かおう」
「そ、そうだね」
つい見惚れてしまった私を諭してすぐに倉庫へ向かった。
倉庫で積み込みの作業をしてくれる作業員さんたちは、ＩＳで飛んできた私たちを見て驚いていた。
そりゃ驚くよね。話に聞いてないもの。
私が事情を話すと「上はもっとそういうマネジメントをしっかりやれってもんだ！こうなると皺寄せはこっちに来る」と、顔を赤くして憤った。
積み込み作業はそんなに時間のかかるものではなかった。
秋桜の背部にあるランチアームでしっかりと『ひこぼし』を固定す

る。
ふと倉庫内にあった鏡の中の私の姿を見ると、一辺2メートルの立方体が背中にくっついていて、不格好だなぁなんて思ってしまった。
そんなこんなで積み込みも終わり、ランチアームの固定の確認、拡張領域にその他機材を満載して飛行準備は完了した。
ふわりと重さ８００キロ近い物を背負ったＩＳを浮かべると、作業員さんたちは作業帽を手に持って振った。
先導してくれる翔くんを追うように飛び、一気に航空機の飛ぶ高さまで上がる。
「ここから先はこの高度、時速８８０キロメートルを維持して飛ぶよ。飛行データは全部自動で研究所に送られるはずだから、あとはハワイを目指すだけだ。さあ行こう」
「うん！よろしくね」
これから7時間近く飛行をするのだ。
その間、私たちは二人っきり。
誰にも邪魔をされることはないし、誰にも話を聞かれることはない。
だから、私は覚悟を決めた。
翔くん、私は貴方の気持ちが知りたいの。

暴風雨の渦中へ

「ねえ、３年間もＩＳを動かしてたんでしょ。二次移行とかってもうしたの？」
「まだしてないね。ＩＳの適性はＳが出てて、織斑先生の現役時代と同じなんだ。それでも二次移行はまだ来る気配もないよ」
「そうなんだ。でも適性Ｓってすごいね。私なんてＡ？で適性値が高いからって三橋重工にスカウトされたんだよ」
「面白いのがさ、桜花だとＳ判定が出るんだけど、他のＩＳだとＤ以下でパイロットにすらなれないんだ。反応しないわけじゃないんだけど、何故かダメなんだよね。しかも、桜花は僕以外じゃ反応しないんだ」
「そうなんだ。じゃあ、桜花は文字通り渡良瀬くん専用のＩＳなんだね。桜花に好かれてるのかな」
「好かれるって、ＩＳは機械なんだからそんな風にならないんじゃないかな？」
「ほら、ＩＳコアは一つ一つが人格を持って自己進化するって言われてるじゃない。だから、自己進化していけば自我が生まれたり、感情とかも生まれるんじゃない？」
「そんなものなのかな」
「きっとそうだよ」

ハワイに向けて飛び始めてから既に６時間くらいが経っている。
桜花も秋桜も順調で、飛び始めてから一時間くらいは地上の施設と交信しながら飛んでいた。
それからしばらくは予定通りに飛行して、飛び始めてから２時間経った頃だろうか、秋桜の稼動限界予定速度の時速９００キロに速度を上げて試験飛行を行った。
実際に試験を行ってみれば時速９６０キロまで出ることが分かり、計算なら最大荷重の１０トンを積んだ状態での飛行が時速９００キロ程度になるとのことだ。
それらの試験をしながら飛行すること４時間。データ交信も粗方

終わってハワイに向かうだけになると、地上施設からの交信もなくなった。
次の交信は、ハワイまで残り１０分程度になったときに向こうからかけてくるらしい。
といったところで、４時間は交信などの作業で存外に忙しかった。
今は余裕が出てきて、明菜の方から残りの3時間程度、お話をしようと誘ってきた。
僕には断る理由はないわけではないが、外との関わりが全くないのだから、少しくらいいいだろうと自分の心を甘やかした。
会話の内容というのも、自分の趣味の話やＩＳのことについて話した。宇宙空間でした作業や、ヒューストンとモスクワ、日本の種子島をＩＳＳ経由で行ったり来たり繰り返していたこと。
明菜も自分の趣味やＩＳでは戦闘訓練を全く積んでいなかったこと。筆記は高得点だったが、実践試験では全く試験管に歯が立たなかったＩＳ学園入学試験の話。中学の修学旅行で行った京都が綺麗だったことなど。
なんの他愛もない話だけど、それだけでもう二時間は時間を潰していた。
ただ、お互いを名字で呼び合って、中学より前の話は全く話題にしなかった。
これでいいんだ。
僕はこうして話しているだけで幸せだったから。
本当に幸せな時間だったから。
「ずっと学校に行ってないって聞いたけど、もしかしてその間本当に友達っていなかったの？」
「えっと……。友達と言える友達はいなかったかな。情報統制されてたから、一般人は僕の存在を知ることなんてできなかっただろうし」
「本当に独りぼっちだったんだね」
「あ、そういえば一人だけいたかもしれない」
「え？それって誰？どんな人？」
「アレックスっていうんだ」

一人、そん当時の僕の気持ちを半分くらいは理解してくれた、きっと友人だ。
僕は一人だけ男でＩＳが使えること、そして明菜という唯一無二の友人であり深い仲だった人との縁を切られて自棄になっていたときだ。
アレックスはロウズ長官の養子で、一つ年下だった。自分も局長に拾われるまで一人だったことを語り、好物でいつも持ち歩いていたビスケットをくれた。
内心そういった優しさをくれるのは嬉しかったけど、当時の僕は邪険にした。
嬉しく思う裏で、僕を本当の意味では理解してくれるわけではなかったし、日々の多忙さに追われる僕は構っていられなかった。
それでも、僕が何か失敗したりしたときにはビスケットを持って励ましてくれた。
そうか。
今思えばロウズ長官だって、ＮＡＳＡのブライアン長官も、ロスコスモスのモロトフ長官も、ＪＡＸＡの宮田理事も、父さんだって僕を励ましてくれていたんだ。心配してくれていたんだ。
僕は無自覚のままに独りじゃなかったんだ。
そうやって自分が独りなんだと思い込んで塞ぎ込んで。本当にどうしようもない。
「僕を励ますためにビスケットをくれるやつ。僕はその時色々余裕がなくてさ、邪険にしちゃったんだよね」
「そうなんだ。じゃあ、それに気付けたならしっかりお礼を言わないとね」
「うんそうだね……。ヒューストンには結構滞在するから会えるかも。その時に言うよ」
「そうだよ。言えないで後悔することだってあるんだから……」
一瞬、僕は沈黙した。
空気というか、なんとなく明菜の雰囲気がここを境に変わった気がする。

「ねえ、翔くん。私のお話を聞いて。私の本当の気持ちを」
優しい声色だった。
でも僕にとって今の明菜の声は、真綿で首を絞めるようなものだった。
数時間にも渡って話していたのは僕の抵抗を弱くするためか？
時間を持て余したから話していただけで、僕のこのちっぽけな決意は揺るぎながらも、崩れることはないと思った。
崩すわけには行かないんだ。
明菜の為にも、僕が堪えなければいけないんだ。
そんな、強迫観念に近いもので自分の心を押し殺す。
ああ、僕が自分の心を甘やかさずに、彼女を拒絶していればこんな気持ちにさせることも、苦しめることもなかったのかもしれない。
「私が翔くんを間違えるわけないじゃん。だって、こんなに会いたかったんだよ？会えなくなって、連絡が取れなくなってすごく苦しかった。死んじゃうんじゃないかって思ったくらいだよ」
速さは変わらずに、同じ速度で飛んでいる桜花と秋桜。
同じ高さを同じ速度で並んで飛んでいる。
明菜が僕の腕を、無機質な甲冑のような腕部で掴んだ。
「私は翔くんのことが好きって気持ちは今も変わらない。翔くんの心が移っていても、もう思い出になってしまっていても構わないの」
「っっ!!」
明菜は目に涙を溜めて僕の瞳を射抜いてくる。
その真剣な眼差しに僕は応えることが出来ず、ただ目をそらすことしか出来なかった。
掴まれた腕を振り払う勇気さえなかった。
「私のことをしっかり見てよ！こっちを向いてよ！今この場だけでもいいから、本当のことを教えてよ！」
明菜の口から吐き出される言葉一つ一つが僕の胸を刺す
すべてを否定してやりたかった。
明菜のことが好きだと叫べればどれだけ僕は救われるだろう。
「何も分からず、ただ拒絶されて。一緒に遊んだあのときも、泣かされ

て励ましてくれたあの時も、桜を一緒に見たときも！秋桜を一緒に見たときも！抱き締めてくれたことも！キスしてくれたことも！好きだって言ってくれたことも！みんな、全部まとめて思い出にすらなってないで!!全部無かったことにされるなんて嫌なの!!」

掴まれていた手を引き寄せられて、僕は思い切り抱き締められた。頭を胸に抱き寄せられるような形で。

嗚咽を漏らしながら僕に言葉の全てをぶつける。

ぶつけられながら、本当に自分は愛されていることを改めて理解した。

そしてこの愛を全力で振り払わなければならないということも。

僕は覚悟を決めた。

「……放してよ」

「……嫌」

「……放せって」

「……絶対に嫌っ」

「放せって言ってるだろ！」

僕は強く明菜の肩を掴んで、放り投げるように突き飛ばした。

小さく怯える声がこのプライベートチャンネルの中で響いた。

血反吐が出そうな気分だ。実際吐いているのかもしれない。今から僕が吐き出す言葉はそれほどまでに醜いのだから。

「何が言いたい？何がしたい!?僕は君と出会ってなんかいないんだ！それを思い出だのなんだのって、全く理解が出来ない！君は精神を病んでもいるのか？昔想っていた人間を僕のことだと勘違いして思い込んで！挙げ句の果てには説教垂れて！これ以上訳の分からないことを言わないでくれ、頭が痛くなりそうだ！」

「え……。そ、そんな。そんなことって！」

明菜の、明菜の心が傷付く音が聞こえた気がする。

勿論、傷付けてあるのは他でもない僕だ。

「いや、僕が悪かったね。君みたいな人間に気を許したのが悪かった

んだ」
「酷い……。酷いよぉ……」
その場に泣き崩れてドンドンと秋桜は速度を落としていく。
「速度を落とすな！責務を果たせ！それも出来ないのか？どれだけの人に迷惑がかかると思っている!?」
「う、うぁっ……。ヒック……ウゥ……」
叶うことなら自分の手で僕を殺してやりたい。
自分の心を甘やかして、明菜に希望を持たせるようなことをして、結局これか？
ふざけている。どれだけ人を傷付ければ気が済むんだ？
本当に自分自身が大嫌いだ……。
ハワイまであと４０分というところで止まってしまった。
『こちらハワイ宇宙観測研究所。桜花、秋桜共に停止を確認した。状況報告を求む』
『こちら桜花。秋桜のパイロットの気分が優れないようだ。時間はかかるがそちらには確実に向かう』
『こちらに送られてくるバイタル的に、精神的ストレスが大きいようだ。早めの到着を推奨する』
『了解。安全に配慮して至急そちらに向かう。アウト』
「ほら行くよ。泣いてたって仕方がないだろ」
「……」
完全に止まってしまった。
泣き出したいのは明菜だけじゃない。
僕だって泣き出して何もかも捨ててしまいたい。
なんでこんなことを言わなきゃならないんだ！
自分が言いたい言葉とは正反対の言葉を吐いて、慰めの言葉なんてかけられるわけもなく、ただ腕を引こうとするしか出来なかった。
「っ!!」
だが触れようとすればその手を全力で払い除け、その場から動こうとしない。
「悪かったよ。僕が言い過ぎた。だから機嫌を直して早く陸へ降りよ

う。きっと長いこと飛んでいたから疲れているんだ」
「どうして……？」
「は？」
疲れていたのはきっと僕だ。
きっと明菜と同じくらい、心が壊れそうになっているはずだ。
この場を離れて、僕は明菜の前からいなくなってしまいたかった。けれどもそういうわけにもいかない。
今は前に進むしかないんだ。
だから少しでも進みたくて、進んでほしくてかけた言葉に問いかけられたとき、自分の心を見透かされるような気分に陥った。
「どうして、泣いてるの……？」
「あっ……」

それからどちらが先に動いたかは覚えていない。
ただハワイの研究所に着いた時は二時間の遅れが出ていたことだけは分かった。

ハワイに着いてすぐ出迎えてくれた研究員にカウンセラーの下へ連れられた。
試みとして、ＩＳによる長時間飛行や大洋横断なんかは既に行われ成功しているが、それは訓練された軍人が成功させたものだ。
あくまで高校生の明菜にとって膨大なストレスになったものだと判断したのだろう。
よたよたと力なく歩く後ろ姿は、余りにも悲痛だ。支えて上げられるなら支えてあげたいなんて、傷付けた本人が思うことはきっと薄汚いエゴなんだろう。
一日の休養を必要として、明日にはまたヒューストンへ向かう。
その時にはハワイの研究所で製作された5トン近い大きいサイズの探査機『ビッグディッパー』を輸送することになる。こちらは桜花での打ち上げは無理だから、今まで通りのロケットで打ち上げる。
きっとそれを背負って飛ぶ姿は亀の親子みたいなんだろうなと考

えてしまって、クスリと笑ってしまった。
それと同時に、また二人きりの時間が続くのだと思うと暗い気持ちになった。
ここまで来るのとは違う、関係が少し変わってしまった状態で大丈夫なのだろうか？
二人分かれて向かうことを打診してみたが、長距離飛行に慣れていない初心者を一人で飛ばすのは危険との判断が下された。
これからの約7時間、きっと過酷で残酷な時間になるのだろうと思い更ける。

◇

また、拒絶されてしまった。
今度は手酷かった。
こうなることは覚悟していた。暴力を振るわれることも覚悟していた。
でも、翔くんの拒絶は全く本当の拒絶じゃないって分かった。
突き飛ばされたことも、暴言を吐かれたことも、私の心を確実に抉った。辛かったし、受け入れられるものじゃなかった。
けれども、それらの行い全てを持っても私の楔を打ち抜くことはなかった。
もし本気で拒絶していたら、私はハワイまで飛べていない。きっとその場で自害している。
でもそうじゃない。
翔くんは私を拒絶していながら泣いていた。
本当に嫌いだったら、拒絶するなら泣いたりなんてしない。
目をしっかり見て、本当の翔くんの心が分かった気がした。
私の心を傷付けながら、自分の心を磨り減らしていた。
私に言えない何かが、見えない分厚い大きな壁が私たちの間に立ち塞がっているんだ。
そう信じることしか私には出来なかった。

そうやって自分の心を保つことしか出来なかった。
明日、また7時間ちょっとの二人きりの時間が始まる。
翔くんはきっとまた優しく振る舞っているだろうけど、それは赤の他人として。
私の想い人としては振る舞ってくれないだろう。
だから、きっと辛い旅になる。確実に。
そんなの嫌。耐えられない。
だから私は懇願する。
お願い。お願いだから……。
「今のあなたは、私に優しくしないで……」

◇

今日の飛行の道のりは、嵐になることが予報されていた。
季節外れのハリケーンがハワイからアメリカよりで発生していて、上陸していれば停電は免れないレベルに大きいらしい。
三橋重工は極地状況下でのデータが欲しいので明菜に低めの高度で嵐の中を飛んで欲しいと打診した。
それは強く要望するものではなく、明菜の精神状況を鑑みた上で可能であれば、という極めて消極的な要請だった。
明菜はそれに二つ返事で答えを出した。
秋桜は『ビッグディッパー』を下にして、その上から『ひこぼし』を載せて合金ワイヤーとランチアームでガッチリと固定した。
予想通りの不恰好さに少し笑ってしまった。
そんな僕の様子を見て、明菜は頬を膨らましてへそを曲げた。
そう。僕らの間に昨日のやり取りなんてなかったかのように、互いが意識して振る舞った。
そして再考した予定の時間でハワイを飛び立ち、ヒューストンへ向かった。
細々とした交信を地上施設と行って、小一時間も飛ぶとそれもなく

なった。
それから僕らは無言のままで、ただ真っ直ぐに飛んでいく。
風雨が酷くなってきて、ＰＩＣがあるからこそ姿勢維持などに大した支障はなかったが、人間の本能的に揺さぶられるようだ。
ハリケーンの中心近くに近付くと、姿勢維持にも僅かに支障が出てきた。
桜花と秋桜は極地状況下での活動を根底に作られているから、他のＩＳと比較すればどうってことはない。
これが仮に競技用ＩＳならば、それなりに煽られて大変なはずだ。
『こちら秋桜。姿勢制御に支障が起きてますが、大したことはありません。データは送れていますか？』
『こちら本部。データを確認した。予測計算との誤差は殆どない』
明菜の方も異常が起きた段階ですぐに連絡を入れている。
『こちら本部。データは十分にとれた。これにてデータの収集を終了し、定刻通りにヒューストンへ向かってくれ。協力に感謝する』
『いえ、とんでもないです。お役にたててよかったですよ。お疲れ様です』
そう社交辞令を述べて通信を切る。
あとは本当に何もないまま飛ぶようになるだろう。
「お疲れ様。あとは飛ぶだけだね」
「そうだね……」
これから始まるであろう沈黙は、色々と耐え難いものなんだと思う。
けれども、僕が選んだ僕にとっての修羅の道。進まなければならない。
そんな感傷的なことを考えていられたのはこのほんの一瞬だけだった。
「明菜っ!!」
「えっ、なっ…!!」

空気を切り裂くとんでもない轟音が響いたかと思えば、大きく秋桜の背中が爆ぜた。

風を前にした花たち

「牧瀬さんっ！大丈夫!?」
「う、うん何とか大丈夫。でも『ひこぼし』が……」
最悪だ……！
ハリケーンという視界不良の中でも、ＩＳにはハイパーセンサーがある。
一瞬だけ見ることが出来た、小型のミサイル。だが気付いたときには既に命中が確定していた。
爆発の勢いで明菜は吹き飛ばされたが、当たりどころがよかった。『ひこぼし』にミサイルは命中し、秋桜に損傷は殆どなかった。
探査機はスペースダストにもある程度耐えられるよう頑丈に作ってあるのがよかったのかもしれない。
一番上に取り付けてあった『ひこぼし』は思い切り大破してしまったが、『ビッグディッパー』は健在だ。
けれどそんなことはどうだっていい。
「いいんだ。こんなこと中々予想できないから」
明菜が無事でよかった。
しかし、そんな悠長なことは言ってられない。一刻も早くこの空域を離脱しなければ、何が起こるか分からない。ミサイルが飛んでくるなんて、異常事態もいいところだ。
「速度を上げるよ。救難信号を送りながら全力でハリケーンの上空まで上がる。そうすれば……」
「そう簡単に上手く行くと思ってるのかぁ？」
「っっ!?」

雲間を抜けて一機のＩＳが僕らのルートを阻むように現れた。
灰色と深緑で塗装されたＩＳの、褐色肌の操縦者はおどけるような言葉遣いで僕らに話しかけてきた。

何者だ？
　テロリストだとは予想していた。
けれどＩＳを使ったテロだって？
そんなことがあり得てたまるか！国際ＩＳ委員会がコアの所在を完全に把握していないってことなのか!?
……いや、今は落ち着け。今考えることじゃない。
憤る感情を抑えて冷静さをアピールしなければ、それが弱味になってつけ込まれてしまうかもしれない……。
「あなたは誰ですか？所属は？何が目的なんですか？」
「１度に色々と聞かれてもなぁ……。あたしはそこまで頭がよくないんだ。一つずつしか答えられんぜぇ？」
目の前のテロリストがゲハハと笑い声とは裏腹に無邪気そうに笑う。
そして笑いながら左手をスッと上げると、二機のＩＳが僕らの後方に現れた。
一機は灰色と黒のカラーリングに大型の砲門を携えている。もう一機は灰色と水色のカラーリングに多量の増加装甲とスラスター。
完全に囲まれている。どうやらここを通ることがバレていて、待ち伏せされていたらしい……。
僕はプライベートチャンネルを開いて明菜に言った。
明菜はこの状況を理解しかねている。困惑がはっきりと顔に出ていた。
「牧瀬さん、桜花の肩にしっかり掴まって。一気に離脱する」
「うん……」
「あは、うふふふはぁはははは！甘いなぁ。ハチミツのように甘いなぁ。あたしはそういう甘いの、大好物なんだよぉ」
　一体何が言いたい。
まさか僕が意図したことはもうばれている？
いや、そんなことはどうだっていい。
今は一刻も早く逃げないと、きっと殺される……！
「あたしらは亡霊。死に逝くものと世界を見て、愉悦に浸る悪霊だよ。

君らももう時期にあたしらの愉悦の一部になるんだ。ああ、愛しいなぁ……！」
前に塞がるリーダー格であろう女が、自分の体を抱き締めながら演説をしてきた。
「歯を食い縛って、降りほどされないことだけを考えていて」
「わ、わかった……！」
僕はそれを無視して明菜に声をかける。
そして心の中で3、2、1とカウントダウンする。
体の中を循環するナノマシンを起動させる。
3人が一斉に銃口をこちらに向けて引き金を引く瞬間、全力でスラスターを吹かした。
「今！」
今持てる桜花のスペックをフルに生かして、瞬時加速（イグニッション・ブースト）で離脱を試みる。
大気圏を離脱するわけでもないし、元々操縦者に非常に負荷のかかる桜花なのだ。今はリミッターがかけられている。
それに加え、元々打ち上げ能力が1トン程度である桜花に対して、今乗っている重さは４００キロ近い秋桜と約5トンの『ビッグディッパー』。せいぜいマッハ2程度しか速度は出ないだろうが、既存のＩＳでここまでの速度を有するものはないはず。
このまま一気に上昇して……。
「なぁっ!?」
「きゃっ！」
無理のない程度に、かつ急速に桜花の速度を緩めて停止する。
ナノマシンで強化されている視力と動体視力がなければどうなっていたか分からない。僕の向かった先、上空には無数の機雷が散りばめられている。
空中機雷？そんな兵器は今まで聞いたことがなかった。
「へへハァ！だから言ってるだろ！そう簡単に上手く行くものかってよぉ！」
下準備もしっかりしてあるのか！

３機が連携を取りながら僕らに銃弾を打ち込んでくる。
全力で回避運動をとりながら、３人の包囲網脱出を試みる。
このままでは本当に危険だ……！
「そらそら！当たっちゃうぞぉ？」
回り込みながら急降下して、すれ違うように銃弾のをかわす。その回り込んだ勢いのまま一気に離脱を試みるが、ここでまた急停止する。
その瞬間、そのまま進んでいれば僕がいたであろう場所を荷電粒子砲の弾が通過する。
「なかなか鋭い感を持ってるッスね、コイツ」
「フォグ、そうじゃなきゃ面白かねぇだろ？」
あの粒子弾は異常なまでの熱量を持っていた。
本当に殺しに来ている……のか？
「捕縛するのが任務だって。だから殺しちゃダメだって」
「ヘイル、その割に楽しそうじゃねぇか」
「ガスト、楽しいものは楽しい！」
「フゥヘッハハハ！違いねぇや！」
話しぶりからじゃ、殺しには来ていない。捕縛だ。
違う。操縦者の命はどうだっていいんだ。
狙いはやっぱり桜花のデータと技術！そして俺が男であることが原因だろう。
クソ！一体どうすればいい？
とりあえず止まっているわけにはいかない。動いて撹乱しないことにはやられる！
手を緩めるつもりのない攻撃をかわしながら、ＩＳＤＡ施設との交信を図る。
が、一向に応答が返ってこない。
「なんで通じないんだろうなぁ？お留守番サービスにも繋がんねーか？」
「もっとメーデーメーデー叫ばなきゃ届かないんじゃないッスか？」
「Ｅ・Ｍ・Ｇ！Ｅ・Ｍ・Ｇ！」

桜花のリミッターが解除できれば、きっと現状は打開できる。けれど解除コードは父さんとロウズ長官しか知らないから、今は外せない。許可を貰おうにも交信が出来ない。
完全にコイツら３人が原因だ。
「このままエネルギーが切れるまで遊ぶんだって！」
ヘイルと呼ばれるテロリストの灰色と水色のＩＳから、数十発もの小型ミサイルが発射される。
最初のミサイルもコイツか……！
全力で振り切ろうとしても、ミサイルが異常な機動で襲い掛かってきた。
「ぐぁっっ！」
「翔くん！」
意味が分からないで混乱したまま数発被弾する。
ミサイルが直角に曲がって来るなんて想像できるものか！
「大丈夫、大丈夫だから……！」
「でも！」
「いいから！」
明菜にそう言いながら自分にも言い聞かせる。
大丈夫だ。何とかなる。何とかして見せる。何とかしないでどうする!?
根拠のない言葉で自分を勇気づけて、何とかこの窮地を脱して見せたかった。
「ふへへへへへぇ！武装も持ってないのかい!?そんなＩＳで三人に勝てるわけないだろぉ!?」
けれども状況は悪くなるばかりだ。
僕の進路を阻むように無数に散りばめられた機雷は動き出し、こちらの動きが止まればミサイルと粒子弾が飛んでくる。それらを掻い潜った先には、ガストと呼ばれたテロリストが大型のブレードを振振りかぶってくる。
その繰り返しが数十分も続いた。
やっぱり、こうなってしまった。

僕のせいで明菜をテロに巻き込んでしまった。
僕にこの状況を打開する力はあるだろうか？
無事に帰ることはできるのか？
いや、違う。そうじゃない
絶対に生きて帰る。そう強く誓った。
僕が無理でも、明菜だけでも必ず無事に帰す……。

◇

こうして背中に掴まっているだけで私はこの数十分、何も出来ないでいた。
そうじゃない。怖くて動けなかった。
初めて自分が死ぬことを意識している。実感を持ってそう言える。
腰が抜けていて、思考もまるで滅茶苦茶。だからこうやって、翔くんの背中に縋ることしか出来ていない。
私を守りながら、私の分まで戦って傷ついている。
そんな翔くんが、こうやって背中にくっついているのにとても遠い存在のように感じる。
独りで戦って、こうしている間にも私から離れていくような、どんどん遠くへ飛んでしまっているような気がする。
違う。
もう遠くへ飛んで行ってしまっているんだ。
そして気が付いた。
「翔くん……」
チャンネルを閉じて呟いたこの声が聞こえることはないだろう。
でも、声に出してしまいたかった。胸の内に溜め込んでいたくなかった。
「私のことを守りたくて……、私のことを拒絶したんだね……」
私のために孤独を選んで、独りで戦う道を選んだんだね。
翔くんに立ちはだかる障害は余りにも大きくて、私がいると戦えな

い。だから、巻き込みたくないから、初めから拒絶したんだ。
そんなことを露程も知らず、知ろうともせずに、私は擦り寄って彼を不安にさせて。
何も考慮していない浅はかな人間だ。
その結果がこの現状に繋がっているのでは？
翔くん一人なら何の問題もなく逃げ出して、こんな命の危険に遭うことはなかっんだろう。
私がこの事態を招いたんだ……。
私は居ても立ってもいられなかった。
この事態を解決するのは、自分の責任を果たすことなんだ。そう感じてしまって。
自分が蒔いた種を自分で回収しなきゃダメなんだ。
そう自分に強く言い聞かせた。
「翔くん！」
「大丈夫、絶対大丈夫だから」
「違うの。聞いて」
「僕が必ず無事に帰らせるから！」
「聞いて！私が今から離れるから。そうしたら私は出来るだけ時間を稼ぐ。だから、そのうちに救援を呼んで来て！桜花の速さなら大丈夫！」
「!?無茶だ！確かにそうかもしれないけど、失敗したらきっと殺されるんだよ!?そんなことを……！」
「大丈夫。きっと3人を分断できる。それで一人だけこっちに来るだけなら、私は大丈夫だよ。信じて！」
「でも……！」
「このままじゃ何の解決も出来ないの。だから、私にもやらせて。二人ならきっと出来る！」
「そんなこと……！」
私は翔くんの言葉を最後まで聞かずに背中から手を離した。

「ありがとね、翔くん」
「明菜っ!!」

翔くんが見せた顔は悲痛に歪んでいた。とても悲しそうな顔。
だけど私の心は揺るがない。
何とかして見せる。ここで何とかして見せて、乗り越えて見せて。
そして必ず翔くんの隣に戻ってくるから。
翔くんのお荷物なんかじゃない、一緒に進んで行ける人になって見せるから。

◇

明菜は手を離して行ってしまった。
確かに明菜が残した言葉と作戦、大博打だが今あるものでの勝機はそれしかないかもしれない。
でも、僕はこれまでにない程の不安と絶望を感じていた。
明菜が死ぬ？誰のせいだ。
僕が世界で二人しかいない男でＩＳが使える存在だから？桜花を操るパイロットだから？
僕のせいで明菜が死ぬのか？
死ぬのか？
死んでしまうのか……？
「面白れぇことしてくれたなあの和製ビッチ！おめぇらビッチはビッチ同士で遊んでやれ！」
「ズリーッスなぁガストだけ」
「男を選んどいて誰がビッチだって！」
読みは完全に外れて、ガスト以外の二人が明菜の方へ向かって行った。
こんな絶望的な状況……！
僕の心臓が高鳴る。警鐘をこれでもかと打ち鳴らす。全身の筋肉

が強張って仕方がない。
明菜……！
「色男、その顔だ！その顔が見たかったんだ！愉快だ！愉悦だ！最高だ！もっと見してくれ！私に活力をくれぇ!!」

やるしかないんだ！

一刻も早く援護を呼ばなくてはならない。明菜のことは信じるしかないんだ！
だから、今は全速力で逃げ出す。
重量が軽くなったから速度もさっきの比ではない。瞬間的にマッハ５まで出ている。
「ガスト様とこの『悪魔の暴風雨（ディアブロ・ウルカーン）』から逃げられると思うなよ！」
無数の機雷が僕の目の前に出て迫りくる。
そして背後からブレードを振り下ろさんと距離を詰めてくるガスト。
機雷はこのＩＳの操作によるものだったのか！
けれども何の問題もない。
「おおおおおっ!!」
「んなぁっ!?無茶苦茶をぉ！」
全身の筋肉、骨が軋み、目と鼻からは血が漏れ出してくる。
僕がやったこと、それは初速マッハ５での多段瞬（マルチ・イグニッション・ブースト）時加速でこの無数の機雷群を突破することだ。
そして、この何時間にも感じる一瞬が終わり、ハリケーンを抜け出した。
『こちらハワイ観測所！応答を願う！』
交信が入った！
これで助かったと安堵の息が漏れる。
『こちら桜花！ＥＭＧ！テロリズムにあった！なおも交戦中、秋桜は交信妨害で不通！』

『了解！現在当空域に米軍ＩＳ部隊を向かわせている。座標より計算し、あと１０分程度で安全は確保される。それまでの辛抱を！」
それも本当に束の間だった。
１０分？その間に明菜はどうなる!?秋桜の性能ではそんなに耐えてなんかいられない！
戻らなきゃ……！明菜を助けないとダメだ！
そんな折に、一通のメールが届いた。
差出人は父さんだ。
交信妨害で受信できなかったらしい。
『リミッター解除コードが書かれたファイルが入っている。それを入力して１分だけ待てば解除される』
簡素だが非常にわかりやすい内容だった。
「……ありがとう、父さん！」
僕は迷うことなく１００文字近いコードを入力して、解除を承認した。
「随分と驚かせて貰ったぜぇ色男。さあ！これから死合おう！命のやり取りという愉悦を分かち合いたい！」
ガストが追い付いて来た。
どこで補給したのか機雷の数は増えていて、完全に球体の牢のように自分と僕を囲んだ。
多段瞬時加速をしようとも、当たらずに抜けることは不可能なように並んでいる。
けれども今の僕にとっては、そんなの些細な問題ですらない。
「この檻から無事に抜け出せるかなぁ？ほら、ほらほらほらほらほらっ！」
「……３０秒だ」
「はあ？」
残り４０秒でリミッターが外れる。
ガストに挑発するように宣言する。
「３０以内にお前を倒す。確実に」
「ふざけたことをほざきやがるジャップッ！」

あと３０秒。
確実に倒し、明菜を助け出すまでの時間だ。
ガストは瞬時加速で肉薄し、ブレードを何度も振りかざす。
僕はナノマシンの効力を最大にして動体視力と肉体の俊敏性を限界まで引き出し、そのすべてを紙一重の最小限の動きで避ける。
避け切ったところで、ガストの腹部に全力で拳を叩き込む。
その衝撃で後ずさったガストはディアブロ・ウルカーンの腹部から荷電粒子砲から拡散弾が飛び出してくる。いわゆる隠し武装だ。
範囲攻撃は避け辛いという強みがあるが、桜花の速さの前には意味をなさない。多段瞬時加速で避けながら背後をとる。
「まだまだ楽しもうぜぇ！３０秒なんてつれないなぁ！」
あと２０秒。
背後に回ることは読まれていた。ガストは振り向き様にブレードを振って切りかかる。
切りかかりながら機雷を僕の予測進路に配置して動きを封じる。
それが見えていたから、ディアブロ・ウルカーンの手首をがっちりと掴み、そのまま体を捻って僕を狙っていた機雷にぶつけてやる。
「ぐうぅぅぅぅぅッッッ!!まだだぁ！まだ終わらんぞぉ！このまま終われるかよぉ！」
あと１０秒。
ガストはブレードを離して手首を返し、そのまま腕拉ぎのように関節を取りに来る。
けれどもそれは無駄な足掻きだ。元々１トンの積載量を誇る桜花が関節を極められたところで、他のＩＳでは簡単に振りほどける。
同じように、ディアブロ・ウルカーンも簡単に振りほどいて蹴飛ばしてやった。
ガストは僕を指差して叫んだ。
「覚えた！テメェの顔は完全に覚えたぞクソ野郎！お前だけは絶対にあたしがぶち殺してやるからな！これは始まりなんだ！一時間でも寝られる日が来ると思うなよビチグソ野郎がぁ!!」
０。

リミッターが解除され、背中についていた5枚の花弁のような形をしたジェネレーターは立つようにして中央により、さらに大型のものが何重にも重なって現れる。一見すると、それは八重咲きの桜のようだ。
ジェネレーターの名前は『ヤエ』。見た目通りの名前だ。
僕はヤエの持てる出力全てを出し切って加速した。
秒速8キロメートルの瞬間加速。
自分にかかる負荷なんて考えず、これが今の僕が使える最大火力の攻撃だ。
その勢いを使い、張り手を打ち込んだままガストの顔面を捕らえた。
そのままガストを叩き付けるようにして機雷の牢を壊し、一目散に明菜がまだ戦っているだろうハリケーンの中に飛び込んだ。
そして僕は秋桜とのチャンネルを開いて大きく叫んだ。
「明菜!・返事をしてくれ!・頼む!・聞こえていたら返事をしてくれ!明菜ッ!!」
焦る気持ちを抑えきれない。
返事は一向に帰ってこない。
ハイパーセンサーをフルに活用して、可能な限り最大速度を出して探す。
「見付けたッ!」
そして宙に浮く人影を見つけ出した。
きっと秋桜だ!・きっと大丈夫だ!・これで助かったんだ!・さあ、ここから抜け出そう!
僕が手を伸ばしながら近づいた影は。
秋桜は――――。

下へ下へと落ちていった。

嵐は止み　前編

「やっぱり珍しいよね。翔くんが風邪を引くなんて」
ガンガンと痛む頭を押さえて僕はベッドにぐったりと体を沈める。
瞼がカイロの様に熱くなり、目を開けているのも辛い。いや、瞼だけじゃなくて耳、鼻、頬、おでこ、顔全体から体に至るまで、まるで自分がストーブになったかの様に感じる。
「まだ五月になってないからさ、ちょっと寒かったんだね……」
ゴホゴホと咳込みながら僕は応えた。
丁度昨日、学校の帰りに雨が降り出した。
明菜は置き傘をしていたから大丈夫だったけれど、僕は特にそういった準備もなかった。だから雨の中を走って帰った。
桜も散って五月のすぐ手前。そんな時期でも雨は冷たく、三寒四温が続いた後というのもあって体調が崩しやすくなっていたのだろう。
「私の傘に一緒に入ろうって言ったのになぁ」
「つい一昨日に、黒板にでっかく相合傘を書かれて泣き顔になってたのは誰？」
「いひゃいよぉ」
ぐにーっと頬を引っ張る。痛くなんかないくせに。
熱で弱った僕には痛い思いをさせるほどの力なんてない。あってもそこまではしないけれど。
わざわざ痛いなんて言って僕をからかう算段は見え見えだ。
「またクラスのやつらにからかわれる口実を作りたくなかったんだよ。誰かさんがまた泣いちゃうでしょ？クラス会議なんてやだよ僕は」
「えへへ……」
明菜が舌を出してペロリと笑う。
この悪戯そうな顔をして実際に悪戯をする明菜は質が悪い。よっぽどのことじゃなきゃ僕は許してしまうからだ。本気になって怒ったことはあんまりない。
ふうと溜め息を吐いてまた咳込む。

僕の咳と一緒に『一緒の傘に入りたくなかった理由』が出てしまわないように用心した。
「別に傘に入ったっていいじゃん。通学路、私たちと同じ道の人いないよ？」
「……」
目を瞑って寝返りをうち、明菜に背を向ける。
風邪とは別に真っ赤になっている顔を見せたくなかった。そうした理由は、『一緒の傘に入りたくなかった理由』と同じだ。
「……移るかも知れないから家に帰りなよ」
「やーだよ。だってこんな機会、次は何時だか分からないもん。私が風邪引く度に翔くんからからかわれた分、今日できっちり返すんだから」
そういうと明菜はリンゴと包丁を取り出して、手際よく皮を剥き出した。
「明菜って料理出来たっけ？」
「結構得意なんだから」
そういいながら真剣に包丁を操って、デザインカットでウサギを作って見せた。
「はい、ウサギさん！」
「……。普通に向くより、作り方分かってればウサギの方が簡単って知ってた？」
「もうっ！」
「ムガッ!?」
思い切りウサギを口の中に突っ込まれた。
ビックリしたけれど、リンゴの冷たさと酸味が熱を出している僕には心地よかった。
「今日は私がからかう番なの！」
「看病してよ……」
頬をぷくっと膨らませて怒る明菜を見ていると、何だか元気が出て来た。
本当ならこうやって喋るのも辛いはずなのに、そんなの気にならな

い程に。
看病してよ、なんて言ったけど、明菜が側にいるだけで風邪なんてすぐに治ってしまいそうだ。側にいるだけで僕にとっての看病なんだな、きっと。
そんな僕の表情を察したのか、膨らんだ頬は萎んで、その代わりに小さなえくぼが出来ていた。
「お母さんがいたら、こんな風にリンゴとか剥いて看病してくれるのかな……」
「お母さんなんだから当然だよっ」
「なんでそんなことが分かるの？」
「優しそうな人だったし、私も同じ女の子だから分かるよ」
「どうかな。仕事とはいえ、僕をおいて冥王星まで行っちゃう人だよ？」
「ボイジャー計画……だっけ？」
「うん。お父さんがそう言ってた。あ、他の人にはこのこと言ってないよね？」
「極秘任務なんでしょ？勿論誰にも言ってないよっ」
お母さんは僕が４歳の頃、ＩＳＳで仕事をしていて、その過程でボイジャー計画、太陽系外縁への調査飛行の為に、宇宙の向こう側へ行ってしまった。
それは長い長い旅路で、片道で９年もかかる旅らしい。
帰ってくる頃には僕はもう大人で、その成長を見られないのは悲しいと言っていたらしい。
「そんな大変な仕事をしてるお母さんだから、翔くんも憧れてるんでしょ？宇宙飛行士に」
憧れている。お母さんみたいなかっこいい宇宙飛行士に憧れた。けれど、僕の本当の気持ちは違うんだ。
そんな風に頑張るお母さんを助けて上げたい。迎えに行くには、きっと宇宙に出た方が手っ取り早いと考えたから。
そんな純粋な気持ちだ。
でもマザコンなんて思われたくなかったから隠している。３年生

にもなってお母さんお母さんと言うのは、なんだか気が引けた。
「そうだ！お粥作って上げるよ。きっと翔くんのお父さん帰ってくるの遅いでしょ？」
ベッドの脇に置いた椅子から立ち上がり、明菜は部屋を後にしようとした。
体が無意識に動いた。
気づけば明菜のスカートの裾を掴んでいた。
「大丈夫だよ。今日は食欲ないから、リンゴ食べたら薬飲んで寝るよ。だからさ、その……」
明菜は僕の顔を見ると、意地悪そうな笑みを浮かべた。
「えへへ、どうしたの翔くん。ここにいて欲しいの？さっきは帰れって言ったじゃん」
「うっ……」
こうやって弱ってベッドに伏してると、どうして本心を隠せないのだろうか。
明菜は体が弱くて病気がちだからここにいるのはよくない。移してしまったら、多分僕より酷い病状になる。だからさっき言った帰れというのは本心に違いはない。
でももう一つの心は違うんだ。
一人でいるのが心細かった。
「大丈夫だよ。私も家に帰ったら手洗いうがいして薬を飲むよ。だから今日はゆっくり眠って、明日一緒に学校に行こうよ。ね？」
スカートを掴んだ僕の手を優しく両手で包んでまた咳に座る。
明菜の手が冷たくて気持ちがいい。
また明日ね、と明菜の口元が動くのを最後に、僕は夢もない眠りに落ちた。
目が覚めたら、きっと明菜はいないだろうけど、また会えるからそれでいいんだ。
楽になった心も、ゆったりとベッドに沈めた。

◇

翔くんから離れてすぐ、フォグとヘイルと呼ばれた二人がこっちに来た。
早速私の目論みは外れてしまった。
翔くんと桜花ならきっと一人を相手にするくらいならどうってことはないだろうと考えて、今は自分がどうするべきか考えることにした。
今の自分に何ができる？
武器なんて持ってない。戦闘技術だって、ＩＳ学園に入学してから競技用として学ぶつもりだったものだから、てんでなっていない。本当に私ってダメなんだな……。
いや、ダメなのは諦めることだ。頭をもっと回しなさい明菜！
「そんなバカでかいもの背負って戦うとか舐めてるんッスか？」
「私らは楽勝だって!?」
「上等！ボコボコのボコにしてやるッスよぉ！」
無数のミサイルと粒子弾が飛んでくる。
肝を冷やすなんてものじゃない！ミサイルはまだいいとして、粒子弾は当たれば絶対防御を抜いてダメージを受ける！
「イチかバチか！三橋のみんな、ごめんなさい！」
「あっぶねぇ！」
「あーもう滅茶苦茶だって！」
もう無我夢中だった。
拡張領域内に入っていた機材を手当たり次第に投げつける。ＩＳの膂力で投げつけられるそれは、火器に及ばずとも並大抵の威力ではないはずだ。
こうやって牽制しながら時間を出来る限り稼ぐしかなかった。
けれども段々と速度が低下していく。桜花から降りたことで既存の秋桜の速度まで落ちてきているからだ。
このままじゃ本当にマズい……！
まだ２分と経ってないのに、万策尽きちゃうの？
「フォグ！私のグレーレちゃんの邪魔をしないでって！フォグのそれ

のせいで当たらないって！」
「正確無比な死神の声（モルチェ・ボース）の射線に飛び込んでくるグレーレちゃんってのが悪いッス！むしろ邪魔してるのはヘイルっす！」
　ってあれ？仲間割れ？
「私の『残酷な雹（グレーレ・クレール）』にイチャモンつけるって!?」
「私の『霧の亡霊（スペクテル・ネーヴォア）』にイチャモンつけたのはそっちが先っすよ！」
　私がバレルロールや捻り込みなどの不規則な動きで撹乱しながら逃げてると、オープンチャンネルで喧嘩をしているのが聞こえる。
　これってもしかして、チャンス？もしかして翔くんの方に向かったガストって呼ばれるテロリストがいないと連携が成り立たないのかな……？
　でもチャンスと言っても、もう拡張領域に投げつけるものはないし……。
　いや、まだ一つだけ残ってる。それに向こうは今油断してる。
　今ならやれる！
　そう踏み切って、一気に秋桜を急降下させる。テロリスト二人は私の行動に一瞬だけ反応が遅れた。
「待て！逃がすものかッス！」
　テロリストの、フォグの方が私に向かってほぼ直角に瞬時加速をして追いかけてきた。
　よし、今だっ！
「っっせいっ！」
「グエッ!?」
「フォグ!?」
　急降下を止め、フォグに向かって瞬時加速をする。
　フォグのＩＳ、確か『スペクテル・ネーヴォア』って言ったっけ。あれは私を背負った桜花の速度、マッハ２について来れていた。つまり、軍用ＩＳ並の機動性を持っている。だから瞬時加速すればマッハ３近い速度が出るはずだ。
　秋桜はＩＳとしては機動力が低いが、それでも瞬時加速でギリギリ音速に到達する。

つまり相対速度だとマッハ４の速度で重さ5トンの『ビッグディッパー』をフォグにぶつけた。
スペースダストの衝突にもある程度耐える、この頑丈宇宙探査機に衝突するのだ。いくらＩＳといえども、このダメージはバカにならないはず……！
そして見事に作戦が成功し、打ち所が悪く気絶したのかフォグが衝撃でバラバラになった『ビッグディッパー』と一緒に海へ落ちていく。
「よし……！」
私もやればできるものだ！
あとは目の前のもう1人のテロリスト、ヘイルだ。
私は自分で責任を果たしかけている。このままもう1人も……。
「……油断したとはいえ、フォグを落としたって。そっか、もう遊んでられそうにないって」
はっとして、ヘイルの方を見やる。
「ーーーーーっ!?」
一瞬、自分の喉元に冷たい手が触れるような感覚に陥った。
今までとは全く違う。ゲラゲラ笑いながら、よく分からない口喧嘩をしながらとか、そういう雰囲気は完全に霧散していた。
「女の方は生死を問わないって言われてたな。ＩＳコアと集積情報さえ手に入ればいいんだっけ？」
「あー。目がチカチカする。寸でのところで持ち直したッス。本当に気絶するところだったッスよ」
心の中で恐怖心がけたたましい警鐘を打ち鳴らす。
私の考えが甘かった！
それに海に落ちたはずのフォグが帰って来た。フォグを戦闘不能にすら出来ていない。
私の見せた意地の抵抗は、ただ単にテロリストを本気にさせるだけのものでしかなかった。
「結構痛かったッスよ。左腕が折れちまったッスよ。わかるッスか？

この痛さ」
逃げなきゃ。
とにかく逃げなきゃいけない！
瞬時加速でまた逃げようとする。けれど既に私の退路は塞がれていた。
「きゃぁっ!?」
私が向かった先からミサイルが飛んでくる。それを避けることが出来ずに被弾してしまう。
そして爆風で吹き飛ばされた方向からもミサイルが飛んでくる。私はお手玉をされるように何度も被弾した。
「な、何……これ……！」
「冥土の土産だ。グレーレはＰＩＣを搭載した小型ミサイル。イメージ・インターフェースによってミサイルの機動を自在に帰ることが出来るんだよ。だからほら！」
またミサイルを無数に飛ばしてくる。
それらは空中で停止したり、直角に曲がったり、後進したりと本当に自由な機動を描いている。
そしてそれが正確無比に私へ向かってくる。
「こういうことができるんだよ！」
その殆どが私を射抜き、もう既に秋桜のシールドエネルギーは２割しか残っていない。
なんとかこのお手玉状態を脱しようと試みて、スラスターを全力で吹かした。
「うわぁぁっ!!」
私の横を粒子弾が掠めて行った。
掠めて行ったのは私の左腕。そこは既にミサイルで装甲がなくなっていた。
そんなところを掠めて行ったのだから、絶対防御が発動した。
そして粒子弾の熱量が絶対防御を超えて肉体にダメージが入った。
「ぁぁぁぁぁぁ!!」
痛い！痛い！痛い！

左腕は大火傷をして皮膚が爛れている。
ここまで酷いと本当は痛みなんてないはずが、視界からの情報がそれを補ってしまっている。
首の皮一枚で何とか意識は保っている。でも、それはもう限界。
どうして私たちなの？どうしてこんな目に合わなきゃいけないの？
どうして……？
「左腕をやれたッスか？狙い通りッスね。目には目を、歯には歯を、左腕には左腕ッスからね」
シールドエネルギーはさっきの粒子弾の被弾でゼロになった。
もう秋桜には空を飛ぶちからも残っていない。
私は重力に任せて落下していくしかないんだ。
このあとどうなっちゃうんだろ？
死んじゃうのかな？
自分の責任も果たせないで？
そんなのヤダよ……。
翔くん、ごめんね。私、何もできなかったよ。
もう一度会いたいよ……。
私は逆らうことなく、自分の意識を手放した。

◇

風が吹き荒れ雨が降り、波がうねる海を一人の女が浮いていた。
ボディースーツに包まれた褐色の肌に長身長髪。スタイルは抜群なのではないだろうか。
だが、顔は非常に不細工なことになっている。いや、それだけ怪我が酷いのだろう。
鼻は折れ、右目は溢れて歯はすべて無くなっている。頭から多量の血も漏れ出しているから、頭蓋骨も割れているだろう。
ガストと呼ばれるこの女は、桜花を駆る翔に負けたのだ。
秒速８キロメートルの速さで張り手を顔に受けたのだ。生きてい

るのが幸いである。
いや、ＩＳの絶対防御によって寸でのところで命が繋ぎ止められているのだ。
今もＩＳを展開しているのだが、装甲という装甲すべてが剥がれ落ち、展開していない時と変わらない姿になってしまっている。
それだけ衝撃が強かったのだろう。
「見つけたッスよガスト。帰投するッス」
ＩＳが海中から姿を表した。フォグだ。
フォグの肩には外傷は見当たらないが、意識のないヘイルが担がれている。
「……」
「その顔、あいつにやられたんッスね」
歯を全て失っているせいで話せないでいるガストの状況を察したフォグは、一言口にするとガストをもう片方の肩に担いで飛び出した。
「任務は失敗。原因は我々の油断と、目標の持つ戦闘能力が想定外であったこと。こう報告するしかないッス」
真面目な表情でそう告げた。
「ヘイルもこの通り、完全に伸びちまってるッス。間が悪かったんッスよ、あたしら」
肩に担いだヘイルをぶらぶらと揺すってガストに見せる。
「もうナノマシンの残量がないッスから、ステルスも交信妨害もできなくなるッス。米軍に捕捉される前にとっととずらかるッスから、ちっと歯を食い縛っといて欲しいッス」
まあその歯じゃ食い縛れないッスけどね、と余計な一言を付け加えるフォグを完全に無視して、ガストは空の一点を睨み付ける。
その眼は何処までも鈍く暗く、呪い殺さんとするものである。
「そーんな睨んでも何もならねぇッスよ。今は回復を優先するッス。はぁー……。あんなのの情報ゲットしたところで、どうしろって言うんッスかね、うちらのボスは」
フォグは空を仰ぎながら、そうぼやいた。

嵐の中からはもう抜けていて、空には青空が広がっている。

嵐は止み　後編

「『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』、帰投しました」
「ああ、お疲れ様。報告書は送られたデータからこっちで作成する。君は休息を取りたまえ」
　ロサンゼルス近郊にある基地に帰投して報告を済ませ、司令室を後にする。
　今まで溜め込んでいた溜め息が一度に全てでた。
　銀の福音の初起動は非常に過酷なものと言うしかなかった。
　ロサンゼルス沖の海域で稼働試験をしていると、本部から緊急伝達が入った。
　内容は、『ＩＳＤＡから救援要請を受けた。試験用ＩＳがハワイ東北東１８００ｋｍ付近で交信不通に陥った。テロの可能性が示唆されている』というものだった。
　米軍が所有するＩＳの中で最速のＩＳはこの銀の福音であり、現場に一番近いこともあって、私が向かうことになった。
「ナタル、お疲れさん。そら、コーヒーだ」
「イーリ、ありがとね」
　イーリが入れてくれるコーヒーはバカみたいに苦いけど、今の私にはこのくらいが丁度いいかもしれな。
「珍しいじゃん。アタシのコーヒーを飲むなんて」
「なによ嫌がらせのつもりで入れたの？残念でした。今日は飲むわよ」
　マグカップ並々に注がれたエスプレッソより苦いこれを、砂糖もミルクも入れずに一気に胃へと流し込む。
「おー……。やっぱり苦いわね」
「当たり前だろ？にしたって、本当に今日は疲れてるんだな」
「そうね。大統領の護衛任務より何千倍も疲れたわ」
「そんなこと言ってもいいのかよ愛国者（パトリオット）？」
「本当のことを言う自由もこの自由の国（アメリカ）にはないのかしら？秘匿する情報でもなんでもないじゃない」

現場はハリケーンの中で、随伴していた高機動パックを積んだ第２世代機はその暴風の中を飛ぶのには苦労していた。
だから私が先行して尖兵となり、他は後方支援に徹して貰うことになった。銀の福音の稼働状況は予想値より遥かに良好だったからそうした。
「本部に送られてきたガンカメラの映像には目を通したさ」
「あら？ならもう少し私を労ってもいいんじゃないかしら？」
該当空域に入ると、前情報の通りに交信が出来なくなった。
付近のＩＳ間でのチャンネルを用いた通信は可能であったが、司令本部から送られてくる通信は不通になり、レーダーを確認しても何も映らない。揚げ句、ハイパーセンサーの視認距離も大きく短縮してしまっている。
けれどその状況も長く続かなかった。突然光が溢れ出て、交信も視界もレーダーも直ぐに回復したのだ。
明らかに異常現象だ。
何か嫌な予感がすると思って光の中心に向かうと、そこにテロリストの姿なんて影も形も残っていなかった。
そこには、人を抱えるＩＳの姿があった。
そしてそれが交信を絶たれた桜花と秋桜であることにすぐ気付いた。
「人って、あんな目を出来るものなのかしらね……」
「……」
バイザー越しに見えた桜花の操縦者の目は、私には筆舌出来ない容貌をしていた。私が溢した独り言のような問いにイーリは答えなかった。
辺りは桜色の光が満ちていた。桜花の背部が最も濃くなっているところから、きっと背部のあの独特なジェネレーターが放出しているものだと判断した。
桜色に光はハリケーンの中で吹雪のように舞い上がり、桜花自身を包み込んだ。自分のみを守るように。
私はその光景に息を飲んで動けなくなっていたけれど、それは正解

だった。
あの光は特殊な粒子だった。粒子の一つ一つがプラズマ化した物質で、ＩＳを展開してようとその中の入って進むのは、裸でマグマに飛び込むようなものだ。
１０分くらいだろうか。後発部隊も到着して時間が経つと、光の粒子は消えた。それとともに桜花も落下していった。
直ぐに落下する二人を回収し、ロサンゼルスの軍病院施設に送って今に至る。
イーリがタバコを取り出して口に加えた。
私はすぐさまイーリの左手にあるライターを取り上げる。
「なんだ？自由の国（アメリカ）ではタバコを吸う自由もないのか？」
「自由って言うのは、民主主義的に決められたルールを守った者だけが勝ち取れる特権なの。喫煙所でもないのに周りに構わず吹かす人に自由なんてないわ」
「つれねぇこと言うなよなぁ。染みっ垂れた空気を打ち消す特効薬なんだよ、それ」
「じゃあ、こんなところじゃなくて喫煙所に行きましょうね、国家代表（パトリオット）さん」
「うへぇ。あそこはむさっ苦しくて敵わないんだよな」
もらった桜花のデータではあんな姿をしていなかった。
もっと儚げで、強風に吹かれて枯れてしまうような、そんな印象を抱かせる桜。来年にはきっと花を付けない、そんな印象だった。
けれども私が見た桜花は爛漫に咲き乱れていて、何千年経とうとも枯れることのない力強い大樹のようだった。
「……ねえイーリ」
「なんだよナタル」
もしかして、あの子（桜花）は二人を守るために姿を……。
「いえ、何でもないわ」
「なーにお前までセンチメンタリズムなんだ。全くナタルらしくねぇな」
「もう。だから退勤したら一杯付き合いなさいってことよ」

「ほお、ナタルの懐は温いと見たり」
「ないわよそんなもの」
辞めておこう。憶測で語るものではない。
でも、そう考えてしまうわよ。私もこの子が好きだから。
もし同じようなことになったら、この子（シルバリオ・ゴスペル）も私を守ろうとしてくれるのかしら……。

◇

気が付くと私はロサンゼルスの米軍病院施設で眠っていた。
ヒューストンは？桜花の打ち上げは？二つの探査機は？三人のテロリストは？翔くんは？
頭で色々なことが一度に巡り回って、頭痛を起こす。
私はそう、フォグとヘイルに撃墜されて、それで……。
それでどうなった？
全く分からない。
だけど、私がこうやって施設に入っていられるんだから、きっと米軍の救援部隊に助けられたんだ。
私の左腕を見てみると、ぐるぐるに巻かれた包帯がある。粒子弾が掠めてこうなったんだっけ……？
頭の中にあの光景がフラッシュバックした。
「うっ……。うぅぅ……、おえっ……」
自分の焼け爛れた腕を思い出して逆流してしまった。
胃の中には何も入っていなかったから、喘いで胃酸をはき出すだけだった。
何もないって、私はどれだけ眠ってたんだろ……。
「目が覚めたね」
一人の壮年の男性が入ってきた。
男性は黒人で、スキンヘッドの頭からは顔にかかるまでの大きな縫い跡がある。背も2メートル近くあって筋肉もモリモリだった。声色はそんな見た目とは裏腹に心地の良い重低音で、流暢な日本語を話

してくれる。
「あ、その……。えっと……」
「おっと、これは失礼。レディの部屋にノックもせずに。家でもよく怒られているんだがな、これが中々直せないんだ」
「えと、大丈夫です」
「それはよかった。私はジョン・ロウズ。ＩＳＤＡの長官をしているものだ。お嬢さんは三橋重工のいわゆるワーカーＩＳ部門顧問操縦者の、牧瀬明菜さんでよかったかな」
「は、はい。牧瀬です。今回は輸送試験失敗してしまって申し訳ないです……」
「いいや、我々研究者にとってあの二つはデータがあれば復活なんて容易なんでね。君はデータで復活したりはしないだろう？翔君も同じなのさ。命を繋ぎ止めることが出来てよかった」
ロウズ長官は仰々しい手振りで無事を喜んだ。やっぱり外国の人ってこういうイメージがあるなぁ……。
ってそうじゃない！
ハッとして今までの会話の過程を無視して訪ねてしまった。
「翔君は!?翔君は無事なんですか!?」
私はそれだけ知れればいいんだ。教えてほしい。
「……彼は命に別状はない。ただ……」
ただ……？
その先にはいったいどんな言葉が続くの？
い、イヤ！聞きたくない！
心の奥底でそういう叫び声をあげる。でも、そういうわけにはいかないんだ。
だって、今回のこのテロは私の無力が招いた結果で、私じゃなければ誰も傷つかず終わっていたんだ。そうに違いない。
私が、あのテロを呼び起こしてしまったんだ……。
だから、私はこの話を受け止めなきゃいけない責任があるんだ。
だから、きっと泣き出しちゃうかもしれないけど聞かなきゃ、聞かなきゃいけないんだ……。

「全身の骨と内臓、そして精神的面から一週間は絶対安静。こちらの病院を退院後、ＩＳ学園でリハビリ生活になるだろう。桜花は再びリミッターが施され、しばらくは競技用第三世代機程度の機動性能に引き下ろされるだろう。彼自身に施されているナノマシンの性能も５０パーセント程度しか発揮されないようにリミッターを施す。翔君の体はそれほどまでに消耗しきっていたのだ。肉体面、精神面含めて、我々は実験にかまけて彼のメディカルチェックを疎かにしていたのかもしれない。今までのツケが回ってきたのだ」

頭の中が真っ白になった。

途中からロウズ長官の声なんて聞こえなかった。

居ても立ってもいられなくなって、私はベッドを飛び出した。

「彼は１０２３号室で安静にしている。それで落ち着くなら私は止めない」

私はありがとうも言わずに、心の中では言いながら駆け出した。

◇

僕は夢を見ていた。

夢の中で夢だと気付いていることにちょっとした違和感を感じた。これが明晰夢ってやつなのか。

夢の中の僕は布団に寝っ転がって、何をするわけでもなく、ただひたすらに蹲っている。

何かに怯えるように。

そんな姿に昔の自分を思い出した。

僕は辛いことがあると、無意識のうちに体を丸めて何かに縋るように顔を何かに埋めるらしい。

唯一僕にとって思い出があった母方のお祖母さんがなくなった時、その時は母さんに。

父さんが単身アメリカへ赴任した時も枕に埋めて泣いていた。

１３歳になって、母さんが死んだと知った時も。

あの時は悲しかった。

よくよく考えれば、分かることじゃないか。
冥王星まで行くだなんて、物質的にあり得ないんだ。あれは母さんの死を幼い俺に言えなかった父さんの方便だ。
だから、今まで自分が憧れていたものが崩れた気がした。気高い高尚な憧れが、窮屈で孤独で危険な何かに変わった瞬間だったと思う。
ＩＳは僕の何から何まで変えてしまった。
僕が持つ思想。僕が持つ肉体。僕が持つ使命。僕が持つ責任。
唯一持っていた純粋な心でさえ、もうどこに行ってしまったのか、分からなくなっていた。
それが堪らなく怖くて、夢の中でさえも体を丸めてしまう。
ふと気が付いた。
僕の脇に誰かの腕がある。
なんでもよかった。いや、その腕がよかった。
その腕を自分に引き寄せて、夢の中の僕はひたすら咽び泣いている。
僕の涙は枯れたと思っていたのだけれど、それを絞り出すように泣いた。
自分の泣く姿を夢でこうして眺めているのは酷く滑稽で、何より恥ずかしかった。見っとも無いと思ってしまう。
でも僕には意識が存在するだけで、夢の中の僕の動きを支配することは出来ない。
だから同調して一緒に咽び泣く形になった。
まるで僕の本心を曝け出すかのような夢は、僕に確かな安寧をもたらした。

◇

「やっぱり珍しいよね。翔くんの方がベッドで寝てることって」
呼吸器具を口に着けられ、全身に何本も針を入れられている翔くんの姿は痛ましかった。
前は確か翔くんが珍しく風邪を引いた時のことだ。それ以来、翔く

んがこうやってベッドに付しているところって見たことないな。
ベッドの脇に腰をかけて翔くんの顔を見る。
外傷は目立たないけど、あちこちに包帯やメスの跡があって、本当に大変だったんだなと言葉が出てこなかった。
「翔くん……」
翔くんがこうやって傷ついて、一生懸命になって、死んでしまいそうになって。
こんなになって初めて、翔くんの心の在り処が分かった。
「私のことを守りたかったんだね……」
唯一地球を脱出できるＩＳに乗る、世界に二人しかいないＩＳに乗れる男のうち一人。
きっと、翔くんの存在や桜花を狙う人はテロリストだけじゃないはずだ。そんな中に私を巻き込みたくなかったんだよね？
だって、独りなら乗り越えられるものなんだもんね、翔くんにとっては。
でも、私は戦闘も出来ないただのＩＳ学園に通う企業勤めのＩＳ操縦者。本当にお荷物でしかない。
そんなお荷物を守りながら戦うのは無理なんだ。だから翔くんは連絡を完全に経ったんだ。傍受されないように。
再開の時も私を全力で拒絶して、初対面を装っていたのかもしれない。私との過去を漏らさないように。
でも私はまだ翔くんが好き。こんなお荷物でどうしようもない人間なのに、好きで好きで堪らない。
私はいつまで偽ったままのあなたと会わなきゃいけないの？私はいつまで本当の翔くんに会えないの？どうして私たちだけこんな悲惨な関係になってしまったの？
私は腕に後遺症が残るほどの火傷を負った。翔くんは目を覚まさない程体と心を擦り減らした。
それでも世界は、私たち本当の再開をさせてはくれない。
どれほどの痛みを負えば、もう一度本当の翔くんに会えるの？
分かってる。

拒んでいる翔くんを追いかけてしまった私がいけないんだ。
でも、でもね。
「それも……、今日までだよ」
私はまだ翔くんのことが好き。これはどれだけ時間が経っても、遠い日の記憶になっても変わらない。
でも、今の私が翔くんの隣に経って一緒に歩くことは出来ない。
だから、翔くんが待っていられるなら、私のことを待っててね。
不意に体を引っ張られた。
翔くんが私の手を引っ張った。
自分の頬が緩むのがわかった。
私はそっと翔くんの頬に手を添えてあげる。
そういえば前もこんなことあったっけ。
それもあの時、翔くんが風邪を引いた時だった。多分翔くんは覚えていない、私だけが知る彼の過去。
私が帰るのを引き留めた後に、翔くんはすぐに眠ってしまった。そうしたらすぐにうなされて、体を丸めて私の手に顔を埋めた。
それが気持ちよかったのか、翔くんのお父さんが帰ってくるまで離してくれなかったね。
あの時、私の気持ちは固まったんだよ。
「……」
もう一度、一緒に歩くために私は戻ってくるから。
だからそれまでは。
「さようなら。またね、翔くん」
渡良瀬くんの頬から私は手を離した。
翔くんの頬を涙が伝って行ったような、そんな気がした。

学園への帰還

二週間の公欠を申請してその間に様々な実験、作業をする予定が、あの事件をきっかけに頓挫してしまった。

僕は病院に搬送されてから目を覚ますまでに一週間かかり、その三日後には退院してロサンゼルスからＩＳ学園に戻った。

明菜や友人のアレックスも僕の見舞いに来たらしいけど、その時は昏睡状態だったから全く身に覚えがない。

みんなが僕を心配していてくれたらしい。それだけで僕の心は大分楽になった。僕みたいな人を危険に巻き込んでしまう存在でも、そうやって思われるんだと安心できた。

あのテロリスト、ガストたちの襲撃はＩＳＤＡと三橋重工による実験の失敗として報道され、ＩＳ登場以来最も大きな事故とされた。連日ニュースではロウズ長官がワイドショーに顔を出し、三橋重工社長の三橋氏は謝罪する光景が報道された。

テロと報道されない理由は分かる。

ＩＳは数に限りがあり、それらはＩＳ委員会が管理し分配されているはずなのだ。それなにのテロが起きたとなると、国家、大企業、それらに準ずるＩＳに関わる組織全てがテロに関与した疑いを持たれるどころか、ＩＳの在処を委員会が完全に把握できていないことに繋がる。そうなってしまうと世界中は大混乱だ。

繁華街に戦車が突然出現するよりも危険なのだ。いつ隣の人間がＩＳを展開させて銃口を向けてくるか分からない、そんな恐慌状態に陥ることは必至だ。

現在公安やＣＩＡなどを筆頭に、各国暗部組織は躍起になってテロリストの所在をさがしているだろう。必要ならば軍が動く。ただ、いつまで民衆に隠していられるだろうかと心配になってしまった。いつか民間に被害が出てしまうと暗い感情が僕を包んだ。

僕の帰国はメディアに囲まれてしまわないように、着陸してからそのまま救急車で病院へ。病院から学園へ運ばれた。

久しぶりの登校だが、周りがなんだかよそよそしく感じる。遠巻きにして避けているような、そんな感じ。
それも仕方がないか。
今僕は車椅子を使って登校をしている。
なんでも全身の骨がイカれてしまい、上手く立つことも儘ならないらしい。実際に、今日だけで何度か転んだ。
医者も僕の体の状況を理解できていない。ただ、肉体へのストレスはとんでもなく高かったものの、折れている、砕けている、断裂している、破裂しているという目に見える損害はどこにもなかったらしい。
「「渡良瀬君大丈夫!?」」
教室に入ると何名かのクラスメイトが僕に寄って声をかけた。ニュースに出てるんだからまあこうなるのは仕方がないよね。
それに、今まで休んでたクラスメイトが車椅子で来たら、そりゃビックリするよ。
「大丈夫だよ。一，二週間もすればみんなと変わらない生活に戻れるから」
そうやって話して自分の席に向かおうとすると、後ろから声をかけられた。
「久しぶりだな翔」
「ああ、織斑か。おはよう」
「事故で大変だったらしいな。何か困ったことがあったら俺を存分に頼ってくれよ。男にしか頼めないこともあるだろうし、何より友達だからな!」
「うん、ありがとな織斑」
気持ちのいい爽やかな態度で接してくれる織斑はやっぱりいいやつなんだろうな。そう思う。
でも何か自分の心にある引っ掛かりを感じていた。
なんだろう、この違和感は。
今日は野外での実習が行われた。

全員がＩＳスーツに着替えて校庭に出て、ＩＳを操縦するのを見学するというものだ。
ＩＳを操縦するのは専用機持ちだけで、見学するのはそれ以外。そんな授業。
僕は見学側だ。こんな体じゃ操縦なんて出来ないし、あの一件以来桜花の防衛能力強化とリミッター作成で、今は父さんの手元にある。
「いいか、ＩＳは既存の兵器を凌駕するコストと機動性、火力を有するものだ。今でこそ競技として普及したが、本質が兵器であることを、諸君らの頭の中に叩き込んでおけ」
織斑先生がそう言って聞かせると、専用機持ちである織斑とオルコットさんにＩＳの展開を求めた。
二人はすぐさま展開させて宙に浮いた。
「遅い。展開に1秒以上かかっていてどうするんだ織斑。せめてコンマ８秒を切れ」
酷いスパルタ具合な織斑先生に苦い顔を向ける織斑。オルコットさんはそんな様子を見て笑顔を見せている。
次に武装の展開を求めた。
織斑は手に雪片弐型を、オルコットさんはスターライトを展開した。
オルコットさんはいいとして、織斑は経験に比べて呼び出すのが速い。やっぱりセンスというか才能というか、そういったものが備わっているんだろう。
「オルコット、展開速度に関しては流石だ。だがお前は銃口を何処に向けている？何処を撃つつもりだ。そのポーズはなんだ？無駄なことをするな」
「これは私のイメージをまとめるのに必要なーーーーーー」
「不要なものにしろ。次は近接武器を出してみろ」
「はっ、はい！……っと、～っ！もう！インターセプター！」
仮にも代表候補生であるオルコットさんを織斑先生はなんの躊躇もなく指摘する。
「ＩＳはこのように、基本操作や展開など全てがイメージだ。慣れな

い内は、イメージしやすい格好をとったり名前を呼んだりすれば簡単だ。まあ、そんなのが許されるのは半年までだな」
「うっ……」
近接戦闘を苦手とし射撃戦一辺倒のオルコットさんは、今まで近接武器を呼び出したりしなくても勝ち上がってきたんだろう。
代表候補生である自分が名前を呼んで武器を呼び出すのは、きっと屈辱だったのだろう。顔を真っ赤にして俯いてしまった。
「次だ。上空２００メートルまで上昇し、指示があるまで待機せよ」
合図がされ、二機が一気に飛び立つ。
先に上空で停止したのは青い方、つまりオルコットさんだ。後を追うように織斑が停止する。
二人の様子を見るに、何か談笑しているようだ。
あの二人ってあんなに仲良かったっけ？僕が最後に見た時は罵倒し合ってたような気がするんだけど……。
ちくりと胸の奥が傷んだ。
朝も感じたこの違和感は何なんだろう？
「おい織斑、カタログでは貴様の白式の方が機動性は高いはずだ。なぜ貴様の方が遅い？」
織斑に先生から檄が飛ぶ。
織斑先生の言っていることは最もだけど、初めからこうではドロップアウトする人も出るのではないか？
いや、それは関係ないな。
織斑先生の言葉で言えば、「世界各国から集まる人間より勝ち残った者しかこの学園にはいない。それを自覚し責任を果たせ。さもなくば去れ」だろうか？
そのまま織斑先生は二人に急降下からの急制動を命じた。
先にオルコットさんが降りてきて、見事に急制動もクリアした。流石は代表候補生だ。
「ふむ、よしいいだろう。このように知識と鍛練を備えればＩＳ操縦は出来るようになる。今オルコットがやって見せた操縦は、代表候補生らしいレベルの高いものだ。私が目標に定めてある１０センチ丁

度の高さに停まっている。諸君らもこれを目指し日々精進するように」
「「はい!!」」
「では織斑、お前も降りてこい。さっき話した通り目標は地表から10センチだ」
「はい！」
白式が加速をつけて降りてくる……、というよりは落ちてくる。あ、これは。
ーーーーーズガァァァンッ!!!
轟音を響かせて白式は地面にめり込んだ。
そりゃああれだけ加速をつけていれば、滅多なことでは停まれないだろう……。
「誰に校庭へ穴を開けろと指示された？言ってみろ織斑」
「……俺のミスです」
「そうか、よく分かってるな。では今日はここで授業を終わる。織斑、穴は埋めておけよ」
「はい……」
クラスメイトは織斑の失敗を無邪気にクスクスと笑いながら、続々と教室へ帰っていった。彼女たちに悪気はないのだろうが、男の織斑からすると恥ずかしいことこの上ないんだろう。
手伝わなくて薄情者だと織斑は思っているかも知れないけど、穴埋め作業の指示を出したのは織斑先生だ。手伝いを申し出たらなんて言われるかも察しているのだろう。
コレが終わればもう放課だし、なんだか可哀想だから織斑が作業を終えるのを待つことにした。
話し相手でもいた方が、本人も気が紛れるだろうと思って。

「なあ翔……」
「どうした織斑？」
「なんで猫車とスコップしか使えなかったの俺……？」
「……筋トレだと思って」

「思えねぇよ！なんでクレーターを人力でやるの!?せめて白式展開してやってもよかったよね!?」
「大型機械を扱う免許持ってるのか？ないだろ。ＩＳを授業学校行事外で使用する許可証は？ないだろ。そういうことだ」
「理不尽だ……」
「まあまあ。もう作業も終わるだろ？今晩は食堂で織斑のクラス代表就任式をやるらしいし、お腹を空かせてた方がご飯は旨いよきっと」
「それは労働してないから言える言葉なんだよ」
　織斑はブチブチと小言を言いながら作業を進め、もうすぐそれも終わりに差し掛かっていた。
　埋める作業はやけくそになった織斑の手で予想よりも遥かに速く終わりそうだ。
「こんな体でなきゃ手伝ったんだけどな。悪いね」
「いやいいよ。自分の尻は自分で拭いたいからな」
　よし、と声をあげて織斑が屈めていた腰を上げる。
　校庭に空いていた穴はしっかりと塞がっていた。あとは業者の人とかが整備してくれるだろう。
　スコップを猫車に積んで用具室へ向かう。僕もそれについて車輪を回した。
「その体じゃ動きづらいだろ？俺のことなんて気にしないでいいんだぞ」
「リハビリなんだから少しは動かないと」
「気にしないでいいのにな」
　本心で心配しているのだろう、織斑は申し訳なさそうな顔色を浮かべていた。
「そういえばさ、ＩＳって元々は宇宙空間での運用を想定して作られてるんだろ？実際のところ、宇宙に行った翔から色々聞きたくてさ」
　この微妙な雰囲気を紛らわそうと質問をしてきた。
「今日さ、白式で２００メートルくらい上まで上がったろ。あの時ハイパーセンサーの倍率を上げたら、箒のまつ毛までくっきり見えたんだよ。でもリミッターがかけられてるんだろ？だから宇宙だとどう

なのかなって思ってさ」
「なるほどね。確かにＩＳは宇宙作業用のパワードスーツとして開発されたのが始まりだよ。ただね、開発思想と実質効用ではかなりギャップがあったよ」
「それって宇宙じゃ使えないってことか？」
「いや、そういう訳じゃないよ」
　すごくいい食い付きっぷりだ。興味本意なんだとは思うけれど、宇宙や自分のしていることに関心を持ってくれるのは嬉しい。
「絶対防御は既存の宇宙服やパワードスーツを凌駕する安全性を確立したし、ＰＩＣのおかげで命綱も不要になった。酸素を通すチューブも要らないから、命綱やチューブでごちゃごちゃになることもない」
「じゃあ、宇宙で活動できる場所やできる作業が増えたってことか？」
「その通り！やっぱり織斑は優秀だな」
「誉めてもなにもでないぞー」
　問答は用具を返しても続いた。
　織斑は全てを片付けると僕の車椅子を押そうかと尋ねて来た。丁度腕が疲れてきていたので頼むことにした。
「まあメリットの話ししかしてないんだけど、実はこれＩＳにデメリットがあるわけじゃないんだよ」
「どういうことだ？」
「人間がＩＳの性能に着いていけないんだ」
「え？」
「スペースデブリやメテオロイドって知ってる？」
「宇宙のゴミとかそういうのだろ。関係あるのか？」
「スペースデブリは宇宙のゴミであってるよ。大小含めて何十億、何百億って数のゴミが地球軌道上にあるんだ。メテオロイドっていうのは、地球に落ちずに軌道上を回ってる隕石だね」
「へー。で、どういう関係があるのか？」
「単純に言えば、これらが無秩序に秒速２キロメートルから１０キロメートルの早さで飛んでいる。アサルトライフルの弾速が秒速２．５キロメートルくらいだから、どれだけ過酷な状況かわかるでしょ

？」
「げ、それヤバイな」
ＩＳのリミッターが外れた状態なら、それらのデブリなんて避けるのは雑作でもない。速さを捉えることもできるから。でも人間の脳みそが送られてくる情報に反応できない。それ以前に、ハイパーセンサーを通じてそんな情報が制限なく流れ込んできたら、常人なら脳みそが処理落ちして廃人になってしまう。
そう付け加えて説明すると織斑は顔を真っ青にしてブルブルと震えた。
「あっ。でも翔はなんでそんなところで作業が出来てたんだ？」
「人体改造してるからね」
「は？」
「ナノマシンを投与して動体視力や反射神経を鋭敏化して、投薬して肉体も耐えられるようにして、桜花自体にも補助ＯＳを入れて……。そうして漸く宇宙で活動できるんだよ」
「お前それって！」
押している車椅子を停めて僕の目の前に乗り出す織斑。
目と目を合わせて両肩をがっしりと掴んだ。目には怒りを浮かべ、僕のために憤慨してくれている。
「同情してくれなくていいんだ。気持ちはありがたいけど、僕には桜花を操縦する責務があるんだ。唯一桜花を操縦できる人間としての」
「翔……」
まただ。
また僕の心にチクチクとした感覚が現れた。僕は本心を言っているだけなのに。
「それに、僕の夢は宇宙飛行士だったんだ。夢が叶ってよかったって思ってるよ」
織斑に笑って見せた。
それからこのことについて織斑は聞き返すこともなく、他愛ない世間話に花を咲かせた。
それから別れて、僕は一足先に食堂に向かった。織斑は篠ノ之さん

と稽古をしてから参加するらしい。
一人で食堂にいる時間は緩やかに過ぎて、気が付いたら眠っていた。

◇

アメリカから帰国すると大変なことになっていた。
帰りの機内で見た日本のニュースでは、『ＩＳＤＡの桜花、三橋重工の秋桜、大事故であわや死者が』と大々的に操作された情報が報じられていた。
原因不明の爆発事故で私は腕を大火傷、世界に二人だけのＩＳを操縦できる男である翔くんは意識不明の重体。
それが報道内容だった。
ワイドショーでは専門家が好き放題語っているらしい。
例えば桜花に積んであるジェネレーターの欠陥だとか、私の操作ミスによって秋桜のスラスターが暴走したとか。揚げ句の果てには某国の陰謀だとも言い始める始末。
ＩＳにおいて、操縦者が死亡する話は一度も上がらず安全神話が出来上がっていた昨今で今回の事故が起きた。その上、日本を出発した時はメディアを撒くために窓から飛び出したりもした。だから私たちのメディアからの注目度は非常に高かった。
日本に着いてからは専用車が駐機場まで乗り付けてそこから直ぐにＩＳ学園に送られた。
車の外から何回も何回もシャッターを切られて光に照らされる度に、私は何か得体の知れない怖さを感じた。
学園に戻ればメディアに囲まれるとかそんなことはなく、解放された気持ちになった。
「んん～っ！」
「大きな伸びだね。あんだけ写真を撮られればうんざりもするね。その気持ちは分かるよ」
「今回は本当にすみませんでした」

「あんなこと誰も想像してなかったよ。まあ、色々潰えちゃったけどね……」
　車を出て大きく伸びをした私に、三島さんが同情を示した。あれだけ大勢の人に好奇の目で見られるのを、気持ちがいいって感じる人はいるのかな？少なくとも私は嫌だなぁ……。
「今回の件はこちらこそごめんなさいだね。しばらく牧瀬さんはＩＳ学園からの外出は制限されるけど、我慢してね」
「いえ、それは大丈夫です」
「親御さんには私と社長から直々に頭を下げに行くから、そこのところも」
「あ、はい……」
　つい声が暗くなってしまった。
　私の両親は共働きで、小さい頃から私は家では独りでいることがほとんどだった。
　朝起きる頃にはお父さんもお母さんも家を出ていて、帰ってくるのは私が寝てからだった。お父さんは単身赴任ばかりで家にいない。
　翔くんと出会ったあの町を離れた理由はお母さんが本社へ移動することになったからだ。お父さんは月に一度しか家に帰って来ないから、住む場所はお母さんが決めることになっていたらしい。
　思えば私は寂しかったんだと思う。だから、翔くんと一緒に居たんだ。一緒に居れば寂しくなかったから。
　きっと私が今こうしてＩＳを操縦していることにも関心はなくて、火傷をしていることにも心配こそすれど、私のために憤慨することはないのだろう。今までがそうであったように。
「それから、ＩＳの私たちの部門は他の部門と統合することになるよ。まあ、テロ対策のために兵器運用も視野に入れて開発することになったんだ。チームはそのままだから安心してね」
　やっぱりそうなるよね……。
　今回のテロで部門として兵器運用の度外視は見直され、私は競技、兵器の運用もしなくてはならなくなった。
　これは、ＩＳを所持しているだけでテロの標的になるということな

んだろう。
でも私は覚悟を既に決めていた。
お荷物にはならない。翔くんの隣を歩ける力を手に入れる。そのためだったらなんだってする。
そう心に決めたんだ。
「はい。これからも一生懸命頑張ります！」
「気合が入ってるね。じゃあ、私は秋桜のことについて会社と協議があるからこれで行くね。一週間後には届けに来るから」
「よろしくお願いします！」
そう返事をすると、三島さんは一礼して車を出させた。

次の日久しぶりに教室に入ると、私にとって意外なことが起きた。
「牧瀬さん大丈夫だった!?」
「有史以来の大事故だったんでしょ？」
「その左腕、やっぱり怪我してたんだ……」
「えと、あのその……」
クラスメイトが何人も駆け寄って私のことを心配していたと話した。
私にとってこんなことは初めてで、今までこうやって心配してくれた人は片手で数えられるくらいしかいなかったから。
「ま、待ってみんな。どうして私のことを心配してくれるの？」
「へ？」
「心配しないほうがおかしいよ！クラスメイトなんだよ」
私はクラスの人と話したことなんてなかった。寮も転校生が来たときはいれるようにしてある二人部屋を一人で使っているから、本当に話したことなんてなかった。
「え、イヤ……。だってねぇ……」
「入学してすぐに唯一二人の男子の一人に抱き着いちゃう子だからね」
「しかもその後教室じゃず～～～～～ッと暗い顔してるし……」
「やるなぁ！なんて思ってたけど、なんだか振られた感じしてたし話

しかけられなかったの」
「でもね！牧瀬さん一年じゃ有名人だよ？あの光景見ちゃった子が結構いてね。もう上の学年にも広がっているんじゃない？」
え？
え!?
私聞いてないよそんなこと！
顔がみるみる真っ赤になっていくのが自分でも分かる。
「しかも！ニュースで二人が一緒にアメリカまで飛んでいくって出ちゃってさ！」
「仲良く東に向かって飛んでいくのが夕方のニュースに映像で上がった時には！」
「「ロマンチックだなぁ～～！」」
「なんて、全国の女子が羨んだんだから！」
「す、ストップ！やめて！やめてよぉ！」
一緒に何時間も話して、会えなかった時間を埋めるように話したハワイまでの幸せな時間を思い出す。
きっと今の私は耳まで郵便ポストみたいに真っ赤なんだろう。
クラスのみんなにやめてと懇願してみるが、みんなお構いなしだ。
「全然しゃべれないしあんな顔してたから分かんなかったけど」
「牧瀬さんかわいいなぁ！」
「うりっ！くすぐってやれ！」
「あ、あはは！ちょっと本当に……ヒャンっ！」
「う～ん……。C！」
みんなにくすぐられて息が苦しい……！
ってどこ触ってるの!?
「みんな牧瀬さんのこと気にしてたし、事故のことも渡良瀬くんのことも心配してるんだよ」
「え……」
みんなはくすぐる手を止めて私に向き直った。
「せっかく同じクラスなんだから。もっと私たちと仲良くしてね」
「いっぱい頼ってね！」

「私たち応援してあげるんだから！」
みんなが笑いながらそう言ってくれた。
抱き着いてくれる人もいる。
熱いものが込み上げてきた。
今までのと違う。嬉しくて込み上げて来ているんだ。こんなのいつ以来だろう？
「「牧瀬さん！一年二組にようこそ！」」
「……みんなっ。よろしくね！」
私の本当の学園生活は、今日始まったんだ。

力を欲する二人と新しい影

帰国から三日経って三島さんからメールが届いた。
なんでも他部門と合併した先ですごく意気投合したらしく、二晩寝ないで秋桜戦力強化プランを構想したらしい。
あの人は本当に仕事人間なんだなぁ……。
『こんにちは、三島です。今回兵器開発部門と協力して３つのプランを組みました。どれが自分に合ったものかを選んで要請してください。要請されたものに至急換装致します。また、プランごとにパックとしてデータを送りますので、使いたいパックは自分で換装してください。では以下にプラン概要説明ファイルを添付します』
社交辞令的な言葉遣いで書かれたメールから、目に隈のある疲労と笑いを浮かべた三島さんの顔が思い浮かんだ。
苦笑いしながらファイルを開いてプランを確認する。
「えー……。
Ａプラン強襲型、高出力スラスターを増設し機動力を向上。既存の第三世代ＩＳと同等の機動を可能に。旋回性能は実技で補う。ショットガンや無反動砲など多彩な高威力の実弾兵装を拡張領域に備え、接近からの一撃離脱を機体コンセプトに据える。
Ｂプラン重装甲高火力型、ＦＣＡ（火器複合装甲）を秋桜の積載重量限界まで多用し、アンロック・ユニットに荷電粒子砲とミサイルポットを備え付ける。これらをイメージ・インターフェースで射撃管制する。コンセプトは空飛ぶ要塞。
Ｃプラン超高機動型、桜花のジェネレーター『ヤエ』の廉価コピー『シダレ』を搭載することで、既存のＩＳをはるかに凌ぐ機動性を得る。代わりに積載重量は５００キログラム以下、拡張領域の使用が制限されて、兵装はガトリング砲一門、背部ランチアーム、ワイヤーアンカー、近接ブレードのみとなる。
っと……」
正直な話、私にはチンプンカンプンだった。こういう戦闘系に関する兵装なんかの知識は空っきしだ。

一番堅実に見えるのはきっとＡプランなんだろう。特に見た目もすっきりスマートで、背部のスラスターが小さいのが二つ追加されて四つになっている。腕部に追加の装甲と大きな盾が取り付けられ脚部も桜花や秋桜なんかのとは違い、スラスターが備えられて既存のＩＳのような形状をしている。

Ｂプランは何というか……。ノリと勢いで作ったようなプランだ。映し出される参考画像は、文字通り空飛ぶ要塞で、本当にこれが他のＩＳみたいにちゃんと浮いてくれるのか心配になってしまう見た目だ。

私の目を引いたのは勿論Ｃプランだった。

背部の大きなスラスターと可変翼はなくなり、桜花みたいなジェネレーターが取り付けてある。肩部に稼動して脇に取り付けるタイプのバレルドラム付きのガトリング砲と左腕部にアンカー状の有線ミサイルがついている。

桜花の本当の速さには敵わないだろうけど、リミッターの掛かってる桜花となら同程度の機動性能があるんじゃないかな？

私の目標は翔くんの隣を歩ける人になることだ。だからそれを意識しちゃったのか、同じくらいの速さで飛べることにちょっと憧れているんだろう。

「うーん……。私にはどれがいいんだろう？」

でも、人には適性ってものがあって、射撃戦の上手い人がいれば接近戦の上手い人、特殊な戦い方が得意な人もいる。

自分に合った適性でスタイルを確立しないと、器用貧乏で終わってしまうからそれを探せって話を、授業で先生がしてたっけ。

「……」

悩んでも仕方がない気がするけど、どうすればいいのか私にはわからない。

そもそもＩＳでの戦闘なんて、入試試験とあの襲撃事件の二回しか経験していない。それで判断するのは些かどうかと思うし……。

「あーーもうっ！」

考えていても仕方がない！

そう考えた私は寮を出て散歩することにした。
多分、これできっと気は晴れるし何かいいことが思いつくかもしれない。

◇

夕暮れ時、一人の少女がボストンバッグを片手にＩＳ学園付近を歩いている。
ポケットからクシャクシャの紙を取り出して位置を確認しているが、またクシャクシャにしてポケットに戻した。
「なんで今のご時世に紙媒体の案内しか寄越さないのよ……。事務室ってどこよ……」
少女は心底イライラしている様子だった。乱暴にバッグを振り回しながら、事務室の宛ても知らずに自分の感覚に任せて歩き回る。
「案内はないから気を付けろって言われてたから分かってたけど、こんなだだっ広いところを歩かされるなんて……。それに明菜よ明菜！なーんであたしに電話の一つもしないのよ！あれから何回こっちが連絡寄越したと思ってるのよっ！」
持っていたボストンバッグを地面に叩き付けて自分に溜まっている鬱憤を晴らす。バッグは衣類しか入っていなかったのか、ポスンと軽い音を立てて萎むだけだった。
フーッフーッと猫が威嚇するような息を漏らしていると、目の前に見たことのある人物を見かけた。
その瞬間に少女の顔は晴れやかなものに変わって見せた。
そしてその人物に気付いて貰おうと声を張り上げようとした。
「おーい！いち――――――――」
「お前の説明は分かりにくいって」
「だからな一夏、こう『クイッ』とすれば『ズバンッ』とブレードが出るんだって何度言えば分かるんだ！」
「箒、その擬音を使わないで説明してみ」
「……『クイッ』だ」

「ダメじゃねーか！」
誰かと話している。
この学園には男は二人しかしないのだから、シルエットだけで女だって分かる。ただ二人は親し気に下の名前で呼び合いながら話している。
少女の知らない女と親し気に……。
「……」
イライラが何乗にもなって増していった。
叩きつけたバッグを乱暴に蹴り上げてキャッチし、歩き出す。
そしてやっとのことで事務室に辿り着いた。
「転校生の凰鈴音さんだね。はいこれが寮室の鍵だよ」
「ありがとうございます」
少女、鈴音は事務室のおばさんに少々ぶっきらぼうに挨拶をし、鍵を手に取る。
そして質問をした。
「すみません、織斑一夏と渡良瀬翔、それから牧瀬明菜ってどこのクラスですか？」
「ええ、噂の二人と……お友達かしら？織斑くんと渡良瀬君は一組だから、隣のクラスね。あなたは二組だから。牧瀬さんはっと……、あなたと同じ二組ね。あら、今日から同じ部屋じゃない。友達と一緒の部屋になれてよかったわね」
「はい、ありがとうございました」
鈴音は薄っすらと笑顔を浮かべると、礼を言って事務室を後にした。

◇

「おい翔、起きろよ」
体を軽く揺さぶられた。
重い瞼が少しずつ上がると、クラスのみんなが既に集まっていた。

そっか。そういえば織斑のクラス代表就任パーティーがあるんだっけ。それで先にここに来てそのまま寝ちゃったんだな。
周りを見渡すと貸切った食堂は軽く飾り付けられ、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と達筆な字の垂れ幕が掲げてある。
「いやぁ、渡良瀬くんよく寝てるから起こし辛くてさぁ」
「織斑くんが来てくれてたすかったよ！」
「そこ、嘘吐かない！翔の寝顔パシャパシャスマホで撮ってただろ！」
「だって～！」
「可愛かったしイケメンだしいいよね？」
「いや、あの……。何でもない……」
こういう時どういう反応をすればいいのか分からない。
ここ四年間こういう会話や人付き合いはなかったし、それ以前も仲がよかったのは明菜だけだった。つくづく自分がどれだけ依存していたかを思い知らされて自己嫌悪に陥る。
「あー……。ごめんね、後でちゃんと消すからさ」
「うん。ゴールデンウィークに学外の友達に見せたら消すよ！ホントだよ？」
「あ、うん。それなら全然構わないんだ。僕なんかの顔を見て喜ぶ人がいればいいんだけどね」
「絶対需要あるって！」
「あの皆さん！本題に進みましょう！」
やんややんやとしていると、オルコットさんが咳ばらいをしながら声を上げた。
「それもそうだね」
「それじゃ！」
と、声を張り上げる幹事と思われる二人。
すると僕の手にクラッカーが回って来た。
「「織斑くんクラス代表就任おめでとー！」」
そう言うと、一斉に織斑に向けてクラッカーをパン！と弾かせた。
意図することが最初は読めずワンテンポ遅れてしまったが、僕も織斑に向けてクラッカーを弾かせる。

織斑は心底微妙な表情を浮かべるが、それも一瞬で気持ちを切り替えていた。
「クラス代表って結局織斑に決まったのか」
僕は織斑が代表になったことだけしか知らず、ことの成り行きを知らない。
そう呟くと、オルコットさんが教えてくれた。
「私も油断していたとは言いましても、国家の代表候補性ですの。それを引き分けにまで持ち込むほどのポテンシャルをお持ちの方、それも男の人となっては、私もまだまだ成長しなくてはならないと思いましたの。そういった訳で、一から勉強し直すために自推を取り下げて一夏さんを推薦いたしましたのよ！」
「後は候補者が織斑くんしかいないから決定～って訳よ！」
ああ、合点がいった。
「まあ男で実力も伴えばクラスの目玉にもなるし、いいんじゃないかな？あとはみんなで織斑をサポートする感じだね」
「そうですの！私のような優雅でエレガントなＩＳ操縦者が教育すればすぐにでも学年トップ、いえ国家代表候補まで上り詰めますのよ！」
「まて、一夏の教育は私が担当するとあれほど……」
僕の言葉を拾ったオルコットさんと、織斑の横に控えていた篠ノ之さんで喧嘩が始まった。織斑はそんな二人から目を反らしていると、二人に怒られた。
これが世に言う修羅場なのかな……。
「はいはーい。話題沸騰中の一年生、織斑一夏君を取材に来ました新聞部でーす」
オルコットさんと篠ノ之さんの喧嘩を切っ掛けに騒がしくなったクラスへ来訪者が訪ねてきた。
クラスはその新聞部の人を通すためにモーゼの奇跡のように道を開けた。
やっぱりこのクラスの人たちは団結力と統率力に優れているんだな、と変なところで感心してしまった。

「あ、私は二年の黛薫子。新聞部の副部長をやってるよ。はいこれ、お近付きの印に。別件で話題沸騰中の渡良瀬君も後で取材させて貰うから」
お～！と湧き上がるクラス。これは湧き上がるところなのだろうか？
そういって名刺を取り出し織斑に渡す。僕まで貰ってしまった。
「では早速。クラス代表になった意気込みをどうぞ！」
そういって黛さんはボイスレコーダーを突き出して、織斑に詰め寄った。
織斑は若干たじろきながらもそれに答えた。
「えっと、不本意ながらクラス代表になりましたが、やるからには全力で頑張ってみんなの期待に応えたいと思います」
「ふむふむ、姉の意思は俺が継ぐ。俺こそが二代目ブリュンヒルデっと……」
「あの、ナチュラルに捏造するのやめてくれません？」
織斑が真面目な返答をすると、それは捏造された。
本人目の前に捏造宣言するのか……。
まあジョークの一種なんだろうけど、織斑は割りと本気な顔で受け答えた。
次にオルコットさんにレコーダー
「では今回織斑君と引き分けて、クラス代表の座を譲るような形になったセシリアちゃん、どうぞ」
「私は国家代表候補の座に胡座をかいて、驕り高ぶり油断して引き分けに持ち込まれてしまいました。ですから自分を省みて身を引きましたの。これからは一から学び直し私直々に一夏さんをサポート致しますので、一組に敗北なんてありませんわ！」
「おぉ～！不敗宣言とは大きく出たねぇ！そんで織斑君に惚れちゃったと」
「な、ななっ！」
「そんなことないですって」
「そんなことってなんですの!?」

「え、こっちを怒るの!?」
オルコットさんは代表候補生だし、やっぱりこういうインタビューにはなれているようだ。
マイクを向けられると慣れていない人はどうしても上がってしまうものだし、相当こういう経験をしているんだろう。
まあ、惚れた腫れたというのには触れないで置こう。
今度は僕にマイクを向けてきた。
「では、今度は渡良瀬君の番ね」
「お手柔らかに」
「今まで宇宙での作業は何してたの？」
「あ、そういう質問ですか」
織斑のような学園でのことについて質問されると思っていたけれど、そうでもなかった。
ってよくよく考えてみれば、僕ってあんまり学園行事との関わりが今のところ全くないし、過去の経歴があるからそうなるよね。
「主にスペースデブリの除去と、人工衛星やＩＳＳの傷の修復、メンテナンスですね。あとは今までロボットアームでやってた作業をしてます」
「なるほど。今まで手の届かなかった痒いところを掻いて上げるような感じ？」
「そう言っても差し支えないです」
「じゃあ、ＩＳを操縦できるようになってから世の中に公表されるまで、どんな生活してたの？」
「ＩＳの訓練と体作りですね。他はＩＳＤＡなんかが公表してる内容です」
「面白味に欠けるわねぇ……」
「捏造すると黒服に連れて行かれるかも知れませんよ？」
「あっはい、肝に命じます」
簡単に機密以外の情報を公開する。
織斑の顔がピクリと反応するけど、この場では深く言って来なかったみたいだ。人前だしそれでいいんだ。こういう楽しい席で話すよ

うな内容じゃない。
それに僕の中には、あの頃の話はあまり他の人に詮索されたくないという気持ちもある。
「では最後に」
はいと言って答える体制を作った。
「二組の牧瀬さんとはどういった関係で？」
その言葉に僕は凍り付いた。
クラスの女子はキャー、と黄色い声を上げた。
僕にとって、一番踏み込まれたくない領域だった。
完全に固まった顔を少しずつ柔らかくほぐし、笑顔を見せながら出来るだけ優しい声色で言った。
「仕事仲間ですよ。女の子が好きそうな色っぽい話題なんてこれっぽっちも有りはしませんね」
えーっという残念そうな声が複数重なり、食堂を響かせる。
僕は極力笑顔でこう答えるしかないのだ。
ズキリと心の軋む音が聞こえた。
「そっかー……。これは牧瀬さんにもインタビューするしかないかもしれないわね」
「辞めておいた方がいいですよ。牧瀬さん、あの事故以来こういったことに苦手意識があるかもしれませんし、そこまでして調べたいとも思わないでしょう？」
「あー、それもそうね。ワイドショーで囲まれてるの見たけど言う通りかも知れない。それじゃ仕方ないわ。今回は諦めましょ」
嘘を吐いた。
自分の保身の為だろうか。きっとそうだ。
でも明菜は取材を拒否する確証はなかったし、本当のことを話すことは危険であることも、今回のテロで分かっているはずだ。
僕は状況を自己中心的に利用しているのだ。
自分がどうしようもないクズ人間であることを改めて自覚し、それ

でもこの嘘を突き通すしか僕には考え付かなかった。
「じゃ、専用機持ちの三人で写真を撮らせてもらうわね」
と言って織斑を中心にカメラから見て右側にオルコットさん、右側に僕といった構図で黛さんはカメラを構えた。
「撮るよー。６３×１４÷４８は？」
「は、え？」
「正解は１８．３７５でした」
なんでそんな普通じゃ即答できないような問題を出すのだろう……？
黛さんがシャッターを切る瞬間、クラス全員が飛び込んできた。
そしてパシャリとシャッターを切る音が聞こえた。

自分の部屋に戻った。
あの部屋は僕にとって明るすぎたのかも知れない。僕だけがあそこに馴染めずにいるように感じてしまった。
それは少し悲しいけど、こんな僕なんだ。仕方がないことだと諦めた。
やっとの思いで車いすから腰を上げて立ち上がる。僕は軽く歩行練習をしてからシャワーを浴びてから布団に入るという日課を決めていた。
「くっ……うう……」
立てないわけでも歩けないわけでも痛いわけでもないけれど、気持ちや自分の意思とは裏腹に上手いこと体は動いてくれない。
物理的に体が壊れているのではなくて、体内ナノマシンフルスペック利用の副作用と精神的な問題だと医者から言われた。
精神的問題……？
それは僕にとって聞きたくない診断結果だし、ただの逃げに感じてしまった。僕のどこに精神異常がある？そんなことで宇宙飛行士が務まるわけないじゃないか。
明菜のことを考えると胸は痛む。これは紛れもない事実だ。けれども、それを言い訳に出来る立場に僕はいないのだ。だから、もっと

強くならなくてはいけない。そうじゃなきゃいけないんだ。
そう躍起になって、足で何度も地面を踏みしめる。
強くならなきゃいけないんだ。
僕は心も体も強くなきゃいけないんだ。
もう二度と、あんな事件が起きないためにも。

追いかける人、振り返る人

散歩をして私は少し冷静になれた。
別にどれが自分に合ってるとか、そんなことは今決めることじゃなくて、自分が使っていていいなと思うものを使えばいいんだ。
データパックも一緒に送られてくるはずだから、ローテーションしながら使って見てもいいと思う。
寮周辺のビオトープをぐるっと巡り、三十分ほど歩いてこの結論に行き着いた。
ケータイを開けてメールを打った。
『特にどれとかはまだ決められません。取り敢えずＡから順番に使って見て、自分にどれが合ってるかを判断します。ですからＡを換装して他プランデータも一緒に送ってください』
『分かりました。明日の放課後にはそちらへ運び込めるように手配します』
「わっ、返信速い」
三島さんに宛てたメールはほんの数十秒で返信が帰って来た。ずっと待機してたのかな……？
この返信が本当なら、明日の放課後は練習が出来る。それが待ち遠しい。
誰か練習に付き合ってくれる相手を探さないと、と考えながら軽い足取りで部屋に帰った。
そうして鼻唄混じりに私が部屋に帰ってくると、鍵が空いていた。
「あ、あれ？おかしいなぁ～？」
鍵は今私の手の中にあるし、ルームメイトはいない。
寮母さんから部屋の点検か何かがあれば、一報連絡があって返信を送らなければこういうことにはならない。
そういうものは一切無い。
ならば強盗……。って考えてみても、ＩＳ学園のセキュリティからしてそんなことはあり得ない。
じゃあなんだろう？

気になるけど危険なことは無いだろうから、何の警戒もなく扉を開ける。
「あっ！」
開けた先には見たことのある人がいた。
昔と変わらない背とツインテールで、キリッと釣り上がった目が猫を思わせる。
「鈴ちゃんっ！」
「久しぶりね、明菜……」
私の親友がそこにいた。
私は衝動的に鈴ちゃんに抱き着いてしまった。
「会いたかったよ鈴ちゃん！来るなら来るって連絡してくれればよかったのに！」
「したわよ。何回も」
私よりも拳一つ分くらい背が低い友人の顔はこうやって抱き着いてるから見えないけど、今何を考えてどんな顔をしているかは手に取るように分かった。
鈴ちゃんは織斑君のこと以外、みんな直情的で分かり易いから。
私の顔から血の気がサーッと引くのが良く分かった。
今、鈴ちゃんの顔を見たくない……。
「えっと……、怒ってる……？」
「なんでそう思うの？思い当たる節でも？」
きっと阿修羅みたいな顔をしてるであろう親友は、抱き着いた私の背中に手を回してガッチリと極めた。
「あんたに何っ回連絡入れたと思ってるのよ！このお惚け純情バカ娘が！」
「痛だだだだだだ!!痛い痛い！軋んでる！背骨とあばらぁあだだだだ!!」
「鼻唄混じりに帰って来て何なの!?どれだけこっちが心配したと思ってるのよこのぉ！」
散々鈴ちゃんに締め上げられた末に私は解放された。
あちこちの関節が今もなお悲鳴を上げている。

「鈴ちゃん酷い……」
「メール来てるの無視したり返信忘れるあんたが悪い。三週間も音沙汰なしとか信じらんない！」
「それは本当にごめんねって謝ったじゃん」
「はいはいそーでしたねー」
すごい見下してくるこの視線……。
私に一方的に非があるから何も言い返せない。
ベッドでこういったやり取りをしているとふと解せないことが思いついた。
「鈴ちゃんこっちに来るって聞いてたけど、いつ来るとか私のルームメイトになるとか全く聞いてないんだけど」
「あーそれね。あんたがアメリカに行ってる間に全部決まって連絡も回されたのよ。明菜に回ってないの、あたしも今知ったわよ」
「えー、何それ……」
一個理解できたけどまた解せないことが。ＩＳ学園ってそんなに連絡伝達緩いの……？
「そんなことこの際どーだっていいのよ。あんた、上手くいってないんでしょ」
「な、何のこと？」
「何のことじゃないわよ。わかってるわよ。あんなに嬉しそうに電話してたあんたが、全く連絡つかなくなるなんて、そうとしか考えられないもの」
虚を突かれた。
意識の外へ外へと追いやった事実をこうして面とぶつけて来るのは、きっと私の周りにはこの親友しかいない。
知りたいことは知りたい、物事ははっきりと言う。例外を一つ置いておくと、ここまで真っ直ぐな言葉を言える鈴ちゃんに会えばきっとこうなるだろうとは分かっていた。だから私は鈴ちゃんだけにはこのことについて言いたくなかった。
でもこうして会ってしまうと、嫌でも心の底を見抜かれるような気がしてしまう。実際にそうなんだろう。

「話して御覧なさい」
「嫌」
「話しなさい。私が何とかしてあげるわ」
「織斑くんのことも何にもできてない鈴ちゃんに、どうにかできることじゃないもん」
「……へぇ、言うじゃない」
「嫌なの」
ここは譲れなかった。
翔くんは私との繋がりを無かったことにしようとしている。私はそれを認めたくはなかった。でも、どうしてそうしたいのかを理解してしまったし、同じ立場なら私もきっと繋がりを絶とうとする。
一番傷ついて欲しくない人だから。巻き込んでしまいたくない人だから。
だから、私は翔くんに追いつくまでこのことを隠しておきたい。翔くんに不安な思いをして欲しくないから。
鈴りゃんはきっと睨み付ける様な表情を解いて、無機質な表情を見せた。

「……ハワイ東北東沖ハリケーンの中でのＩＳ事故、あれは事故なんかじゃない」
「!?」

何で、それを知ってるの？
「原因不明の爆発で、二人の搭乗者に負傷を負わせた事故。一人は大火傷、一人は意識不明。そこまでなら謎の事故で終わりだわ。でもそれで終わってないのよ」
「えっ？それってどういう……」
「中国じゃ事件があったとしか報道されてないわ。それも新聞の端っこに本当に小さく」
鈴ちゃんが一体何を言いたいのか私には全く理解できなかった。
「あんた全くニュースを見てないのね。日本じゃもう事故についての

報道はないわ。今は日本の外務大臣秘書が企業に口利きしたことが発覚して、そのニュースで持ち切りよ」
「意味、分かんない」
「アメリカじゃ野党上院議員が麻薬ブローカーであることが発覚。イギリスやフランスじゃ議員の汚職事件。ドイツとロシアじゃデモ隊と警察が衝突してそれどころじゃない。中国でも国家主席の側近が脱税して粛清されたから報道されても小さいのよ。この意味分かるでしょ？」
「……」
　世界中であの事故から目を反らさせるようなことが起きている……？
「あの時あの場所で起きたことを話しなさい。ここまで来てただの事故でしたっていうのは虚しい嘘でしかないのよ」
「……」
　私は、素直に話すしかなかった。

「ＩＳを使ったテロ、ね」
「うん……」
「それで、その左腕の包帯は火傷跡を隠すために巻いてるのね」
「うん、そうだよ」
「色々辛かったのね」
「うん……」
　鈴ちゃんが私の肩を抱きながら声をかけた。
　私はこの三週間半に私の周りで起きたことを全て話した。
　翔くんが私のことを拒絶したこと。専用のＩＳを手に入れたこと。ＩＳを使ったテロに遭ったこと。そして翔くんが考えているであろうことを。
　話していて辛かった。涙が少し浮かん来そうになったし、この左腕にあの時の痛みが蘇ったような錯覚にも陥りかけた。
　でも、鈴ちゃんが寄り添っていてくれるお陰で幾分楽だった。

「何よ。その渡良瀬翔ってやつ、いい奴じゃない。ただ振ったって言うんだったらぶん殴ってやるつもりだったのに」
「え、だめだよ！そんなことしたら許さないよ!?」
「だから殴らないって言ってるでしょ！そいつなりにあんたに危ないことがないようにしてるのね」
「ふふん。だって翔くん優しいもん」
「すっごいムカつく笑顔ね……」
翔くんが褒められて、認められて嬉しくない訳ないよ。
きっと鈴ちゃんだって織斑くんが褒められてたりしたら嬉しいはずだ。
「好きな人が他の人にも認められるのって嬉しいと思わない？織斑くんだってほら、確か同じクラスのイギリス代表候補生の人に引き分けたんだって。しかも剣一本で」
「ふん！どうせまぐれかその候補生が雑魚なだけよ。だってあのバカのことだもの」
鈴ちゃんは織斑くんのことになると、持ち前の直情さがへそを曲げて素直じゃなくなってしまう。恥ずかしいというかそういう気持ちが強いのか、織斑くんにだけ特別に素直じゃなくなる。私はそれがとても不思議だけど、きっとそれだけ鈴ちゃんの中で織斑くんは特別なんだろう。
「……!?あ、あああのバカのことは今はいいの！あんたはそれで諦めるの？どうするの？」
鈴ちゃんは段々顔を赤くしていくと必死になって話題を反らすように叫んだ。
私の返答は決まっている。
「諦めるわけ、ないでしょ。だって私、翔くんのこと大好きだもん。こんなことで諦められるほど私のこの気持ちは弱くない！」
腰をかけていたベッドから立ち上がってそう宣言した。
そうだ。絶対に翔くんに追いついて見せるんだ。そのために強くなるんだ！
「よく言ったわ！あたしはこれからも明菜のことを応援するわ。一緒

に頑張っていきましょ！」
「うん！織斑くんは別の意味で大変だもんね！」
「そういう余計なことはいいのよ！」
「わぷっ!?」
同調する鈴ちゃんに声をかけて上げると、声の代わりに枕が顔に帰って来た。

◇

朝、いつものように起床して洗面台に向かうと、呼び鈴が鳴った。
取り付けられた手すりに体重を預けながらのたのたと玄関へ向かう。
玄関を開けると織斑が立っていた。
「おはよう翔」
「おはよう織斑。こんな朝に何か用かい？」
「寝起きですぐだよな、悪いな」
「いいよ構わない」
僕の頭の見てそう思ったのだろう。若白髪と黒髪が混ざって灰色に見える僕の髪はまさしく爆発している。
「いやさ、そうやって不自由な体だと助けが欲しい時って多いだろ？だから手伝えないかと思ってさ」
「なるほど、それは助かるよ。男は二人しかいないからな」
何でもかんでもこの体でこなすには正直辛いところがあった。だから織斑からの申し出を快諾した。
そうして織斑を部屋に上げた。
「お邪魔しますっと。来て早々だけど、何かして欲しいことってあるか？」
「そうだなぁ……。じゃあ、朝食を作って欲しいかな。冷蔵庫のものはなんでも使っていいよ」
「了解したぜ」
織斑はそのまま真っ直ぐ進んだところにあるキッチンに向かい、僕

は洗面台に戻る。
お湯を張った洗面桶に頭を突っ込んで寝癖を直していると、キッチンから叫び声が聞こえた。
「おい翔！この冷蔵庫、ハムと栄養ドリンクと携帯食しか入ってないじゃないか！いつも何食ってるんだ!?」
あ。アメリカへ行くのに在庫を使い切って余ったのしかなかったか
と言っても、僕が作る朝食なんて目玉焼きとシリアル、焼いたハムだけだったな。
頭を吹いてドライヤーで軽く乾かしながらキッチンに向かう。
「アメリカ行くから空にしてたの忘れてたよ。そもそも僕朝食そこにシリアルと目玉焼きが加わるだけだったよ」
「よくこの朝食で体が持つな……。不健康だぞ。もっとちゃんとしたもの食わなきゃ」
「だって料理できないしさ。シリアル好きなんだよね。……楽で」
「最後に何かぼそっと言ったよな？」
そんな漫才じみたことをしながら、たどたどしい動きで制服に着替えて車椅子に腰を掛け息を吐く。
朝起きて洗面台に向かって着替える。たったこれしきりの行動で僕の膝は半笑いしている。全く自分が情けない。
「まあ今日はいいよ。着替えも終わったし、食堂で朝食にしよう」
「なんか納得いかねー」
「じゃあ食堂まで頼むよ働き屋さん」
「おっしゃ」
疲れてしまった僕の代わりに織斑が車椅子を動かして食堂まで運んでくれた。
食堂では好奇な目に当てられながらシリアルを口に運ぶ。
トレーの端にはキャベツとリンゴのヨーグルトサラダが乗っていた。織斑が勝手に乗せたのだ。
別にこのサラダが嫌いとかこういう行動が嫌いとか、そういうんじゃないけれど、行動が一々女の子よりも女らしい。

本人はこれを自覚してるんだろうか？
「織斑ってなんか、母さんみたいなことするな」
「サラダのことか？バランスのいい食事した方が体の治りも速いだろうと思ってさ。男ならつべこべ言わないで平らげろよな」
「そういう意味じゃないんだけどさ」
ふと織斑の皿に目を向けると、そこには信じられないほどの量の米とおかずがあった。僕だったら確実に胃もたれしている量だ。
「よく食べられるね、そんな量」
「いや、男子だったら普通じゃないか？むしろ翔の方は絶対足りないだろ」
「朝は弱くてね。昼は倍くらい食べるかも」
「そうか？」
「そんな心配そうな顔をしないでくれよ」
僕がトレーのものを全て食べ終わった頃に、同じくして織斑も食べ終わった。
早食いの方が体に毒なんじゃないのか？
そんなことはどうでもいいことだな。
トレーなどを返却場所に戻して教室へ向かう。途中、オルコットさんと篠ノ之さんが合流してきた。二人とも部活の朝練に出ていたらしい。
朝に会って早々、オルコットさんと篠ノ之さんで織斑を取り合い修羅場と化す。
背後でこういうことを行われるのは、正直な話居心地が悪いというレベルではない……。
織斑は相変わらず僕の車椅子を押しながら、つまり僕はこの空間に入り込めないままクラスの前までやって来た。
するとそこには明菜とツインテールの女の子がいた。
明菜は僕に向けてどこか困ったように笑いかけた。
「久しぶりね、一夏」
「おお！鈴か久しぶりだな！何時こっちに来たんだ？おばさんは元気か？」

「あーもう一度に色々聞かないでよこのおバカ！」
「いやー、懐かしくってさ。それに鈴と明菜はいつも一緒にいたしなぁ。これに弾と数馬が加わればいつものメンバーだな！」
明奈が小学校の頃、織斑と一緒にいじめから助けてくれた女の子っていうのはこの子のことなのか。
名前と会話からきっとそうなんだと思うし、人見知りな明奈が自然体で一緒にいるのが物珍しく見えた。
僕が知っているのは、いつもの僕の隣にいて、色んなところに引っ張って行ってくれた明菜だから。
そんな明菜の隣にいられる彼女に嫉妬してしまった。
「一夏！この二人は誰なんだ!?幼馴染は私じゃないのか!?」
「どなたですの!?このお二方は！納得のいく説明を求めますのよ！」
「どうどう落ち着け二人とも。や、本当に落ち着いてくれ。鈴は箒が引っ越して入れ違いで越してきて、明菜はその一年後に越してきたんだ。鈴とは中一まで、明菜とは今までの付き合いだ」
「付き合いだとぉ!?どういうことだ！」
「こここここんなこと落ち着いていられません！」
そうか、織斑とはそのくらい長い付き合いなのか、明菜は。織斑が羨ましい。
何の気もなく明菜と一緒にいられたのだろう。楽しい学校生活を送っていたのだろう。
そしてこうやって幼馴染と普通に再開している。聞けば篠ノ之さんも織斑とは幼馴染だって言うじゃないか。
なんで織斑は普通に再会できているんだ？
瞬間、僕の中に暗い影が差した。
なんだろう、この感覚……。
いや違う。今のではっきりと理解していた。僕が今まで織斑に感じていたチクチクとした感覚その答えだ。
織斑に対する嫉妬だ。
この上なく下劣な考えを僕はしてしまった。
なんで織斑は旧知の仲の人と易々と再開して、昔の通りに過ごせて

いるんだ？僕はこんなに苦しい思いをしてるというのに。
僕は二回もテロにあった。そのうち一度は、絶対に巻き込みたくない人を巻き込んで、一生ものの怪我を負わせてしまった。
織斑はどうだ？そんなこと全くないじゃないか！
どうしてこんなに差が出るんだ！等しくないんだ！
いっそのこと、織斑も――――――。
「おいどうした翔？具合でも悪いのか？」
「あ、いや。なんでもない……」
しまった。
周りへの意識が疎かになってしまった。
ブルブルと頭を振って醜い心を追いやる。一呼吸して自分の感情を何とか押さえ込む。
大丈夫だ。僕は大丈夫。
そうやって俯いていると、鈴と呼ばれた女の子が僕の前に立った。
「あんたが渡良瀬翔ね。あたしは凰鈴音よ」
「合ってるよファンさん。これからよろしくね」
「ええ。よろしく！」
そういうとファンさんは手を差し出して握手を求めた。
僕もその握手に応じて手を取る。
「事故、大変だったわね。あんたもそんなになっちゃってさ。でも、あたしの親友を助けてくれてありがとね」
「咄嗟に体が動いたんだ。例を言われることじゃないよ」
「そう。それでも感謝の言葉を言いたかったの」
「いや、こちらこそありがとうね」
「問題はこっから先よ」
えっ――――――。
僕は繋いだ手を引かれ、車椅子から無理矢理立たされた。
パシンと乾いた音が廊下に響いた

心の奥底

今何が起きたの？
私には翔くんと鈴ちゃんが握手をしたように見えた。
いや確かにしていた。だけどその後何が起きたの？
翔くんは鈴ちゃんに引っ張られるようにして立ち上がり、そのまま右の頬にビンタを受けて崩れ落ちた。
今は床に座り込んで呆気にとられた顔をしながら頬を抑えている。何も理解出来ていない顔だ。ただ虚ろな瞳で鈴ちゃんをじっと見つめている。
そんな翔くんの姿に鈴ちゃんは後退るのが分かった。でもそんなこと今は関係ない。
私の目にまじまじと映ったのは、翔くんの頬を伝う水。それがポロポロと落ちていくのが鮮明に脳内に焼き付いた。
瞬間、私の中の何かが弾けた。
「翔くん！」
私は翔くんに寄って介抱した。持っていたハンカチで涙を拭いてあげて、体に腕を回して車椅子に座らせてあげる。
私がそうしてる間に、翔くんの口からは何度も何度も同じ言葉が零れ落ちた。
――――――なんで僕なんだ。
頭の中に焼き付いた翔くんの姿に、声までもが焼き付いた。
私には同じようにごめんねと何度も呟くことしか出来なかった。
翔くんの中の何かが切れてしまった。
「鈴！お前っ！」
「ち、ちがっ！」
翔くんが車椅子に座り直せた頃に我に返った織斑くんが怒気を孕んだ声を上げた。
そのまま鈴ちゃんに詰め寄ろうとしたところを私が制止した。
パシン！
そのまま思い切り鈴ちゃんの頬を叩く。

鈴ちゃんが自分の頬を抑えながら私に見せた顔は、後悔の色に染まり切っていた。
「何も違わない」
私は鈴ちゃんにそう一言告げ、黙りこくる鈴ちゃんの腕を引っ張って逃げ込むように二組の教室へと入った。
「明菜!わ、私そんなつもりじゃ……」
「何も違わない」
鈴ちゃんは私に涙目になりながら釈明してきた。
私はそんな言い訳を聞く耳なんて持ち合わせていない。
「何を考えてたとかそんなことは聞かないよ。そんな下らないこと。それよりも、どうしてぶったの?翔くん怪我人なんだよ?」
「だ、だってどんな理由であれあんたを泣かせたんじゃない!それにやり方だって他に色々あったはずよ!?なんで黙って辛そうな顔してるだけで何とかしようってしないの!?やっぱりそんなのって……!」
何にも考えなしで行動するのは昔からの鈴ちゃんの性質だって知っていた。だから衝動的に叩いたのも理解できる。
けれども私には全く許せることじゃなかった。
自分の中で感情がどんどんと湧き上がって止まらなくなった。
「何も考えずに織斑くんと再開できる鈴ちゃんに何が分かるのよ?何で間違ってるって否定することが出来るのよ!」
「分からないわよそんなこと!なんで乗り越えようとせず遠ざけるのよ!全く理解できないわよ!」
「じゃあ叩くの?理解できないから叩くの!?鈴ちゃんに翔くんの何が分かるのよ!何も分らないくせに口出しして引っ掻き回して翔くんのことを傷つけて!ごめんって言うまで絶対許さない、許さないんだから!」
私が思い切りさっきとは反対の頬を引っ叩く。
それを切っ掛けに鈴ちゃんも私の頬を叩いた。
そのままつかみ合いの喧嘩になって、クラスのみんなが仲裁に入るまで埃まみれになりながら罵倒しあって叩きあった。

「……あたしが悪いなんてのは分かってるのよ。それでも納得できないし理解出来ないから、いつもみたいに手を出しちゃって……」
「……鈴ちゃんはいつもそうやって後悔してる。もっと考えてから色々すべきだよ。ちゃんと素直にはなれるんだから」
取り押さえられて身動きが完全に固まった鈴ちゃんは、ボロボロに泣きながら私にそう言ってきた。
このころには私の中で渦巻いていた怒りの感情は形を潜めて、今は穏やかな感情になっていた。
「ごめんなさい……」
「それ、私に言う言葉？」
「ううん。でも、こうやって謝って置きたいの。本当にごめんなさい」
「私は本当にいいの。翔くんにしっかり謝ってね」
「うん……」
鈴ちゃんは直情ですぐに手が出る足が出る過激な私の親友なんだ。
意地っ張りで素直になれないことも多いけど、本当は優しい子だから。私が一番それを理解している。
「何か私たちのためにしたくて、それでカッとなっちゃったんでしょ？分かってる。しっかり謝れば翔くんも許してくれるよ」
「うん……」
クラスのみんなももう大丈夫だと思ったのか、私たちから手を離した。
鈴ちゃんはよたよた歩きながら私に抱き着いて胸に顔を埋めた。
私も頭を抱いてあげる。
「これからそういう意地っ張りなところ直していこうね。大丈夫。鈴ちゃんなら絶対大丈夫だから。織斑くんにもちゃんと言いたいことを言えるようになるから」
「ほんと……？」
「絶対大丈夫だよ」
「ありがと……」
「一緒に頑張ろうね」

「うん……」
鈴ちゃんは顔を埋め嗚咽を漏らしながら、力強く私に抱き着いて自分を落ち着けようとした。
私は鈴ちゃんが落ち着くまでこうしといてあげようと決めた。
「……昔よりもおっきい」
「もう大分落ち着いたんだね」
なんだか間の抜けたやり取りになってしまった。
でも鈴ちゃんと私の関係はこれでいいのかも。お互いに間の抜けた冗談めかしてふざけられる関係。
それが一番心地良い。

昼、鈴ちゃんとご飯を食べに食堂へ向かうと織斑くんたちがやって来た。翔くんは来ていないみたいだ。
鈴ちゃんの姿を見るなり織斑くんは心底不機嫌な顔を見せて怒りを露にした。鈴ちゃんもその顔にちょっと表情を歪めた。
「二人とも。今はそんなことしてないでご飯を食べようよ。もう席も残ってないんだしさ」
「……そうしよう」
私がそういうと織斑くんはそう言って列に並んだ。
私たちは既にご飯を受け取っていたから先に席を取るようにして、織斑くんたちを待った。
食堂は混んでいると言っても、人が溢れるほどではない。混雑具合が分かって昼食をお弁当に変えた人が出て来て、丁度満席になるような人数しか食堂に来なくなっていた。
丁度隅っこの六人がけの席が空いたのでそこに座っていると織斑くんたちもご飯を持ってきた。そのまま席についてみんなでご飯となった。
相変わらず空気は重い。理由はハッキリしている。
「鈴、なんで翔のことを叩いたんだ？」
「そ、それは今ここでは言えない。けど私ちゃんとに反省してるの。直接人目の多いところだと私も渡良瀬も気まずいだろうし、放課後に

ちゃんと謝るわ」
織斑くんの隣に座るオルコットさんと篠ノ之さんはこの空気に付いていけてない。
ただ言えることは、鈴ちゃんに対する第一印象は悪いことは確実だ。
「一夏、こいつは誰なんだ？」
「そうですわ。いきなり初対面の人に手をあげるなんて、非常識極まりないですのよ」
「お前がそれを言うか？」
「だから言い争いはやめてくれって。昔からこいつは口より先に手が出るバカなんだよ」
「うっ……」
織斑くんに痛いところを突かれた鈴ちゃんは呻き声を上げた。自業自得だよこれは。
「じゃあ俺もその場に行くよ。ちゃんとに謝るのはいいとして、叩いた理由も納得いかねーし、何よりまた手を出しかねん」
「何度も叩くほど人間腐ってないわよ！」
「ほらまたそういう態度！だから俺も居合わせるって言ってんだよ」
二人で言い合いを始めてしまった。こうなるといつ戻ってくるかはわからない。
「えっと、牧瀬明菜さんでしたかしら？一夏さんとはどういったご関係で？」
「私もそれが気になっているんだ。一夏とあんなに親しげだったしな」
二人が言い争っている間、手の空いた二人が私に尋ねてきた。
この二人もやっぱり織斑くんのことが好きなのかな……？
「私は小学生の高学年から今までの付き合いがあるだけの、ただの友人だよ。この言い争ってる二人はいじめられてる私を助けてくれたんだ。だから恩人であって友人なんだ」
「なるほど。別にその、なんていうか、一夏に好意があったりはしないよな？」

「これ以上ライバルが増え、オッホン！親しくしているので勘違いがないようにお伺いしたいだけですわ」
「私はないよ。まあこっちの鈴ちゃんはあるけどね」
「やっぱりか！」
「まって。織斑くんの朴念仁具合は知ってるでしょ？今のところ本当に何もないよ」
「そ、そうでしたの」
やっぱり思った通りだった。
この二人は織斑くんに惚れている。何というか、目が中学生の頃の織斑くんに惚れていた子と同じだ。
篠ノ之さんは立ち上がって織斑くんに掴みかかろうとしたけど、私はそれを止めた。
なんで私の周りの恋する女の子はこうも手が出やすいのかな……？
「それにしても、牧瀬。お前は渡良瀬と何か関係でもあるのか？」
「私も思いましたの。何やら只ならぬ思いがあるのでは？」
二人が目を輝かせて私を見てきた。
こういう人たちの嗅覚の良さは一体なんだろう。あまり踏み込んで欲しくない領域だったから、この話は流すことにした。
「特に何でもないって。ほら、渡良瀬くんとは同じ仕事をした中で、同じ事故に巻き込まれちゃったから。爆発から私を庇って車椅子生活になっちゃったから、その恩人が暴力を振るわれてるの見て怒っちゃっただけだよ」
「そ、そうなのか」
「事故、ですか……」
篠ノ之さんは何とか誤魔化せたけど、オルコットさんは反応が違った。やっぱり国家代表候補までなると情報が回ってくるんだろう。鈴ちゃんだって、昨日私に披露した推理は自分で調べた知識だけじゃないだろう。
取り合えず、もうこの話は終わらせたかった。
幸いなことに、後十分足らずで午後の時間割が始まる。

ここぞとばかりにみんなを急かした。
「ほら！そんなことはいいから早く片づけた方がいいよ。５限目始まっちゃう！」
言い合いをする二人も私の言葉に気が付いてご飯を掻き込む。
こうして私のお昼は過ぎていった。

私は三島さんから秋桜を受け取るためにアリーナのピットまで来ていた。
放課後一目散に向かったのだけど、既に三島さんは到着していて空中ディスプレイを展開して最終調整を行っていた。
「やあ。四日ぶりくらいかな？前見た時より顔だけ太ったみたいだけど、青春でもしていたのかい？」
「ちょっと喧嘩しちゃっただけですよ」
「そうだね。女の子じゃこういうことは青春とも何とも言わないからね」
三島さんはカラカラと笑って私のことをからかった。
大変だったんだから……。
あれからクラスのみんなは、事情を察した訳じゃないけど鈴ちゃんがどんな人間かを理解した。だから朝のＳＨＲで鈴ちゃんが挨拶すると、そのままクラスに迎え入れて既に溶け込んでしまっている。
私はというと、鈴ちゃんを抱き締めていた姿が印象に残った人が多いらしく、地母神様と呼んだりママと呼んだりしてからかってきた。中には実際に胸に顔を埋めて来て、落ち着くという人もいた。
一体何がそんなにいいのだろう？
三島さんが声をあげた。
「よし、調整は終わったよ牧瀬さん。カタログは展開時にいつでも確認できるからそこでしてね。とりあえずはＡプランを実装しておいたから、後ははいこのメモリー。ここにＢプランとＣプランのデータが入ってるから、好きな時に換装すればいいさ」
「はい、ありがとうございます！」
三島さんは私にメモリーを手渡すと、ふらふらとした足取りで秋桜

を運んできたであろう、ピット搬入口に停めてあったトラックの助手席に乗ると、すぐに行ってしまった。
目の下には墨で塗ったのでは?と言いたくなるくらい大きくて色の濃い隈を作っていた。あれ絶対今まで寝てないよ……。
三島さんの健康状態を心配しつつ、更衣室へ向かう。ＩＳスーツに着替えなきゃならないし、メモリーもここなら鍵付きなので盗られたりすることなく置いておける。
秋桜は着替えている間ピットに置きっぱなしだけど、許可はとってあるし最適化されてるから誰かに弄られることもない。
ちゃっちゃと着替えて秋桜のもとに向かう。
改めてＡプラン『秋風』の秋桜を見る。機能送られてきたデータとはちょっと違うみたいだ。
まず一番目立つのは背中の２メートル近い大きなハンマー。片っ方にはブースターが付いていて、これで振り回す威力や速度を増加している。
他に、細部まで良く見ると、脚部にはスラスター以外にも可変翼が追加されていて、これで旋回性能を高めているらしい。
早速自分の身に合わせて確認をする。
……。
あまり変わらない気もするけど、やっぱり脚部が肥大化しているのが気になってしまう。
今までと比較すると二倍近い長さに変わっているからやっぱり違和感がある。
次に拡張領域内の武装を確認する。
「えっと……。ボルトアクションのショットガン１丁に弾は３０発、サブマシンガンが２丁にマガジンは１０個、無反動砲が２本に専用ロケット弾が２０発、グレネードランチャー付きアサルトライフルが１丁でマガジン１０個にグレネードが１０個……。きゅ、吸着地雷？これが３０個。対物ライフルが１丁で１２発分の弾……と」
実際にいくつか取り出して確かめてみる。
こうやって武器を手に持つのは試験以来で、それ以前も三橋重工の

競技部門の人へ運んだり片付けたりするときにさわる程度だった。
だから、安全面だけはしっかり教育されてきた。
射撃訓練は全くしてないか使えないけど、これからみっちり練習するから問題はない。
「と、思うんだけど……」
ピットから出て射撃訓練用の的に向けてみる。
手はぶれて上手く照準は定まらない。ターゲットリングの真ん中に当たることはなかった。
あの日のことを思い出す。
向かってくる二人のテロリスト。私はろくな武器もなく闇雲に喧嘩のような戦い方をした。
その時私がこの銃を持っていたらどうだろう。この引き金をちゃんとに引けただろうか。
「……」
人に向けると考えた途端、私の指は曲がらなくなった。
これを人に向けるの……？
ＩＳを展開してる人なら死ぬことはないと分かっている。分かっているけど、理性に感情が追い付いて来ない。
でもこれを私は乗り越えなきゃ翔くんに近付くことは出来ない。隣に立つことは出来ない。
心に強い気持ちを持たせて、人を撃つように想定して、震える手を無理矢理押さえて引き金を引いた。
その瞬間、私は目を瞑って弾道を直視できなかった。
ちらっと目を開けると、的に穴は空いていなかった。
「……はぁ」
緊張の糸がほどけて一息吐く。
全然ダメだ。沸き上がる恐怖心を抑えられない。
でも今はこの自分の状況を知れただけで良かったのかもしれない。
＋に考えよう。今までの私なら引き金を引くことも出来なかったと思う。それなら、私は引き金を引くことが出来たんだ。
少し、ほんの少しだけ翔くんの側に近付けた。

ちょっとずつでいいんだ。
それこそ、桜の花びらが落ちる速度でもいい。近付いていけるんだ。
秒速５センチメートルでも一分すれば３メートル、一時間で１８０メートル、一日すれば４キロメートルも近付ける。
長い長い道のりかもしれないけど、私は翔くんの側にいられるなら頑張って見せるんだから。
だから、
「待っててね、翔くん」

◇

「みっともない姿を晒しちゃったな」
「いや、いいんだよ。気にするなって」
織斑に車椅子を押されて校舎の屋上へ向かう。
織斑達が昼食に食堂へ向かったときに凰さんと会って、そこで僕に謝りたいと申し出たらしい。僕のもとに直接来てそう言わなかったのは、あんなことをした手前、一組で僕が悪目立ちしてしまうんじゃないか、拒絶されてしまうんじゃないかと思ったからだそうだ。
織斑はまた凰さんが何かしても止められるように着いてくることにしたらしい。
昼にそんなことがあったのか。僕はこんななりだから食堂へ行くのは億劫で、昼食は教室で持ってきたカロリーメイトを食べた。
黙々とカロリーメイトを食べていたら、弁当組のクラスメイトからおかずをいくつか貰った。
「きっちり聞いてやらないとな……」
「ん？何を？」
織斑がぽつりと呟いた。
「え、いや。だって怪我してる友人叩くとか、今まで付き合いのあったやつだし理由なくそんなことしないとは思うんだけどさ。なんにし

ても、今回の件は鈴が全部悪いだろ。初対面の奴に手ぇ出したりはしないやつなんだけどな、普通は」
「別に僕は凰さんのこと怒ってないよ。なんで叩いて来たのかは分からないけど」
「いや、怒った方がいいって」
「本当に怒ってないんだ」
そう。怒ってなんかいない。
あの時僕に湧いていた感情はそんな純粋な感情じゃなく、もっと醜いものだ。
そうこうしていると屋上に着いた。
凰さんは既にいて、しっかりと僕の目を見た。
「朝はビンタしたりしてごめんなさい。分かってはいたんだけど、手を出しちゃった」
「別に僕は気にしてないよ。頭を上げてよ」
そういって深々と僕に頭を下げた。
待てよ。「分かってはいた」ってなんだ？
「なあ鈴。なんで翔を叩いたのか教えてくれよ。理由もなく叩いたとは思えないんだ」
「あたしも渡良瀬に聞きたいことがあるから、それを聞き終わったら話すわ。手を出すんじゃなくて、はなっからこうするべきだったって後悔してるの」
この子は僕に何を聞く気なんだ……？
まさか!?
「ねえ。明菜とのこと。他のやり方はなかったの？」
言われたくない、聞かれたくない問いだった。
僕は意味もないシラを切った。
「何のこと？牧瀬さんとことってどういう？」
「恍けないで！なんであんな、今までの関係や思い全てを否定するようなことをしたの!?」
「お、おい鈴！落ち着けって！」
僕の後ろに控えていた織斑が前に出て凰さんを抑えた。

それでも凰さんの口は止まらない。そこから聞こえる言葉は全て友人、いや親友の明菜を心配する言葉だ。
この人は本当に優しい人なんだろう。
「あんたからの連絡がなくなって、明菜がどれだけ苦しんでいたか分かる!?どれだけあんたのことを思っていたか分かる!?分かるでしょあんたなら！」
僕の心にどんどん釘が撃ち込まれる。
分かっているよそんなこと。明菜が何を考えていたかなんて、入学したその日、嘆願していた再開を果たして、手に取るように分かったよ。
「あんたも辛かったんでしょ!?一人で、独りで、孤独で！それなのに、せっかく再開できたのにこんなのって！」
そうだ。
こんなのってあんまりだ。その通りなんだ。
「あたしに何か出来ることはないの？何かあんたたちを助けられることはないの!?」
彼女の本質はよく理解できた。僕を殴ったことも理解できた。目を見れば人は本当に理解できるんだね。覚悟が出来ている。
こんな宙ぶらりんな関係で、拒絶しててもしきれていない僕に激しい怒りと、そうなってしまった状況に嘆いているのだ。この少女は。
明菜はいい友だちを作れたんだね。
「なあ、どういうことなんだ？さっぱりわからない。翔と明菜はやっぱり接点を持っていたんじゃないのか？そんな鈴が泣いて、翔も泣きそうな顔をして、そんなんじゃわかんねぇよ！俺にも何か出来ることはないのか？友人の為ならなんだってやるぜ？」
この男……！
織斑は何も悪くない。無知なだけだ。何もわからない真っ白なやつなんだ。
けど、だからこそ僕の気持ちを、感情をこんなにも逆撫でてしまうんだ。
僕の中で沸き上がるドス黒い感情は、遂に堰を切って噴出した。

「織斑に僕の気持ちが分かるものか」
「へっ？」
織斑の呆気にとられた顔が視界に入るが、そんなのお構いなしだ。
「何が分かる。当たり前のように毎日を過ごしてきて、ポッとＩＳを使えるようになっただけのお前に何が分かる！力になりたい？出来ることなんて一つだってあるものか！」
「か、翔……」
「僕がどれだけの思いを重ねて孤独な三年間を過ごしたと思っている？会いたい人に何年も会えない苦しみがどれだけ辛いと思っている？自分の存在そのものが大切な人に一生残る傷を負わせてしまった気持ちがどれだけ辛いか分かるのか!?分からないか？分からないだろうな！世界をひっくり返した人間が、何の自意識も持ち合わせていないのだからな！なんでお前は軽々しく再開が出来る？人を死地へ追い込むことが出来るんだ！」
「そ、それどういう意味だよ!?」
「僕は二回もテロの対象になった。二回死にかけた。一度目はいいさ。誰も僕を知らないんだ。隠蔽された存在が消えただけに過ぎない。でも二回目は違う！僕が……、僕がいたせいで明菜を巻き込んでしまったんだ！」
「!?」
「こうなるって分かってたから拒絶したのに……。明菜を近くに留めて置くことも出来なくて……。守ってあげられる力も持ってなくて……。愛してる人を突き放さなきゃならなかったのに……。なんでお前は突き放さなくていい？なんでお前はこうも簡単に受け入れる!?なんでだよ！」
涙が溢れてきた。止めようもない涙が、溢れてきた。
声も枯れてしまい、喉でひくひくと息を吸い上げた。
「なんで……僕だけなんだ……。織斑には何ともない。僕だけがなんでこんな目に合うんだ……。同じ男のはずなのに……」
僕の中のドス黒い醜い感情は勢いを失い、もう口から出ることはなかった。

昂った感情は静かに息を止めた。
周りに音は何もなくって、ただ僕の上ずった声が虚しく響くだけだった。
「……こんなこと織斑に言っても仕方がないことだってわかってるよ。織斑は何も悪くないって。言いたいこと好き勝手言ったりしてごめんね」
一言そう言い残して屋上を後にした。
結局僕には、感情を叫んだところで遺恨しか残さないんだから

未だ幼い力

翔が行ってしまった後をじっと見つめる。
翔のことは同じＩＳを使える男同士の仲間で、友人だと思っていた。同じ環境に放り込まれた者としてのシンパシーを感じていた。
こんな異性に溢れて何が何だか分からない世界に放り込まれても、同じ気持ちを共有できる奴がいれば、何でも一緒に乗り越えられると思っていた。
けど翔が叫んだ心の奥底は何だ？俺に翔の何が分かっていた？
今になって思う。翔は周りよりも数段大人びてて、いつも落ち着いた態度で淡々と物事をこなす。云わば俺にとって、理想のスマートな大人の姿そのものだった。千冬姉みたいな強くて、翔みたいにスマートな大人。それに憧れていたのかも知れない。
結局、翔の本質的なものなんて見えていなかった。分かってなんかいなかった。
翔が何を思ってこれまでの日々を過ごしていたのか。そんなのに目もくれないかった。
「翔は俺とは、違うんだな」
そんな当たり前のことが口から出た。
三年間関係者以外とは交流せずに過ごして、訓練に明け暮れたって言ってたな。昔馴染の人とも交流を絶たれて孤独に延々と。
関係者の人と交流を深めていたかも知れないけど、本質的にはきっと全くの孤独だったんだろう。
俺はどうだ？
ＩＳが使えると分かった途端にあれよあれよという間に学園に入学して、専用機を「仕方がない」と言いながら操縦して、何の苦心もなく二人の幼馴染と再開して。
翔とは全く違うじゃないか。
「そうよ……。渡良瀬はあんたとは全く違うわよ」
鈴が俺の背中に声をかけてきた。
「あいつはね、二回もテロリズムに晒されてるわ。一回目はハッキン

グによる桜花の暴走。二回目は先月の事故」
先月の事故がテロ？どういうことだ？
「所属不明なＩＳに襲撃されたのよ。事故って言うのは、多分国連とＩＳ委員会が混乱を避けるためにやった隠蔽の結果よ。ＩＳを使ったテロなんて、世界がひっくり返る出来事よ？その情報だけで死者が出ると思うわ」
「じゃあ翔が言ってた大切な人って！」
「明菜よ」
そうか、やっと分かった。
自分の存在の危うさと、それで苦しんでいた翔について、今更のように理解できた。
事の重大さにやっと気づいた。
「……俺と関わることで、誰かがテロや事件に巻き込まれる可能性が出てくるってことか……」
何も考えてなかった。及びもしなかった。
男でＩＳが使えるってだけで、色んな利用価値が出てくるじゃないか。それこそ過激な行動なら、箒や鈴だけじゃなく、全くＩＳとは無関係な弾や数馬だって標的になりかねない。
だから翔は明菜を知らない人だと突き放して、自分の周りで起こるテロや事件から遠ざけようとした。
本当に大切な人だから、拒絶して遠ざけたんだ。
俺にそんな覚悟は出来るか？責任は負えるか？
頭が痛くなってきた。そして無自覚だった今までの自分を蹴り飛ばしたい衝動に駆られた。
その時、手放したくない友達が、俺のもとから去るのでは？と考えてしまった。
それは嫌だ。そんなの悲しいだけじゃないか。
そう思った俺は鈴に尋ねた。
「鈴、鈴はどうなんだ？俺はお前たちを事件に巻き込んじまうかもしれないんだぞ……」
「知ってるわよ、そんなこと」

目元の涙をグッと袖で拭った鈴は、目に強い力を宿して俺を見据えて啖呵を切った。
「あたしを誰だと思ってるの？中国国家代表候補生の一人、凰鈴音よ！代表候補になった時にその程度の覚悟は出来てるわ。あたしたちはね、国旗を背負ってここにいるの。そんじょそこらのやつらとは違うのよ！」
「り、鈴……」
「テロや戦争が怖くないって言ったら嘘よ。けどね、それを乗り切る力を持って、与えられてるあたしたちは恐れないのよ！」
その言葉に俺は救われた。
俺が誘拐された時に、助け出してくれた最高の姉。千冬姉の姿に今の鈴を重ねていた。
そうだ。弱気になってどうする。俺は強くなって千冬姉みたいになって、みんなを守れるような存在になるんだ！
俺は俺の気持ちを通す。それで離れていくなら仕方がない。けど、一緒に居てくれる仲間は何があっても守り通す。
その気持ちだけは絶対に変わらないんだ！
「顔色が変わったわね一夏」
「ああ」
「ＧＷ前にクラス代表戦があるのを覚えてる？」
そういえばそんなのがあったことを記憶の片隅から引っ張り出した。
「あたしね、二組のクラス代表に変わってもらったのよ。元々は違う意味だったんだけど、その時に渡良瀬が見たと思う光景を見せてあげるわ」
「それ、どういう意味だよ」
「あんたを殺すつもりで戦ってあげるって意味よ」

◇

翌日、織斑が昨日と同じように寮室にやって来た。
手にはたくさんの荷物を持っていて、僕の冷蔵庫に入れるものらしい。
順調に進んだリハビリのおかげで、部屋の中では手すりに掴まらなくても移動できるようになった僕だけど、一日の学園生活を車椅子なしでというのはまだ厳しかった。だからこうして織斑が来てくれるのは嬉しい。けど。
「てっきり嫌われたかと思ったよ。昨日あんなこと言っちゃってさ」
フライパンを片手に腕を振るう背中に話しかけた。
「何も知らない織斑にあの話は意味が分からなかったでしょ。あんな意味の分からないこと叫んだりしてごめんな。織斑は何も悪くないよ」
そう。何も悪くないんだ。悪いのは自分の中の激しい心を抑えきれなかった僕の方だ。
ただの僻みで八つ当たりなんだ。
「俺はさ、なんて言えばいいのか分からないけどさ」
サッと作った金平牛蒡が皿に盛られ、二つ分のレトルトご飯をレンジに入れて温めつつ、卵焼きを作り始める織斑が僕に背を向けたまま話した。
「翔にああ言われて、自分がどれだけ何も考えてないバカなんだって思い知った気がするよ」
「……」
「翔はそうやって俺は悪くないって言うけど、それは全然違う。無知は罪っていうだろ？調べることも考えることもせず、ただ状況に流されて自分の好き勝手をやってさ。そんなことしてたら、今まで色々周りのことを考えて行動して、辛い目に遭って、全然自分の気持ち通りに行動出来なかった翔だって、そりゃあんな気持ちも湧いてくるよ。これは俺がいけないんだ。自分を責めないでくれよ」
調理を終えて食卓に料理が並んだ。
ご飯に卵焼き、金平牛蒡とインスタント味噌汁。たったそれだけの

簡素な食事だ。
たったと言うが、僕にはこれっぽっちも作れたりはしない。
織斑が席について手を合わせた。僕も手を合わせて朝食を頂く。
こんなに美味しい朝食は久しぶりだ。
「翔と明菜の間にどんなことがあったのかっていうのは、鈴からみんな聞いたよ。何でもかんでも自分で背負い込んで、自分が悪いって思ってたら壊れちまうよ。前に翔が俺に似たようなこと言ってたじゃないか」
「でも！……僕にはどうすればいいのか分からない。僕には人を守ると豪語する強さもない。何とかするといって明菜の左腕に傷を負わせてしまった。自分一人を守るだけで精いっぱいなんだ……」
僕が吐露した言葉が自分を蝕んでいくのがよく分かる。
でもこうしなくちゃ他に道がないと信じて疑わないで来たんだ。ＩＳが使えるというのは、僕の問題であり僕の責任なんだ。だからそれによって生まれた影響は、可能な限り僕自身が解決しなくちゃならないと考えていたから。
「なんで何でも一人でやろうとするんだよ。みんなで助け合えばいいじゃないかって俺は思うんだ。一人で出来ないことも、二人や三人なら何とか出来るはずだぜ？だからさ、俺や鈴を頼ってくれよ」
「そ、それは……」
考えなかったわけじゃない。
明菜と僕は、今まで二人でいたときはそうやっていたから。でも今僕の前にそびえ立つ問題は、人の悪意が入り乱れてて、命の危険も伴う。だから一人でやろうと決めたんだ。
「命の危険を伴うけど一緒になれて良かった」なんて、僕は口が裂けても言えない。
……明菜がそう言って来たらどうだろうか？
なんて、最低な考えが頭に浮かんだので頭を振って抹消する。
これだけは考えちゃだめだ。僕は明菜には平和に暮らしていて欲しいんだ。
例え明菜が望んでも……。望んでも拒絶しなくちゃいけない……。

「やばい、もう時間が押してきたな。早いとこ教室に行こうぜ」
ハッとして現実に戻る。
時計の針は八時を回っている。
これから食器を洗って着替えて校舎まで行くことを考えると、結構ギリギリかもしれない。
こうして何の変りもないはずの一日がスタートを切った。

◇

「鈴ちゃんは私のことを鍛えてくれるって言ったんだよね？」
「そうね」
「私射撃訓練したいっていったよね。鈴ちゃん分かったって言ったよね？」
「言ったわよ」
「なんで実戦形式なの」
「手っ取り早いじゃない」
「いやおかしいでしょ！」
私は鈴ちゃん相手にここ一時間ずっと実戦練習をしている。
鈴ちゃんが持つ近接武器、双天牙月を振り回しながら迫ってくる。それを躱しながら。
「私まだ人に向かって撃てないよ！怖いよ！」
「死にゃしないんだから撃ちなさい！もう慣れしかないのよ！」
「慣れたくないよそんなこと！」
「ＶＲゲームだと思って、フンっ！撃つのよ！せやぁ！」
「ヒッ！私やったことっ！ないもん！」
間一髪紙一重で鈴ちゃんの攻撃を避ける。やっぱり怖い！よくあの時は一瞬でもフォグ？だったか、テロリストに一矢報いたと思うよ。
「そんなんじゃ、いつまで経ってもッ！渡良瀬の隣なんかにっ！立てないわよぉッ！」

ガイン！
「うぐっ！」
フェイントを織り交ぜた攻撃に見事に嵌り、でっかい一撃を貰った私はアリーナの地面に叩き付けられた。
もう秋桜のエネルギー残量は一割を切っていた。
この一時間、私は一回も攻撃を出来ないでいた。
「はぁ。一回休憩しましょ。その間にエネルギーは回復させとけばいいわ」
「……うん」
鈴ちゃんが私のところに降りて来てそういった。
「鈴ちゃんごめんね、こんな我儘言っちゃって」
「ほんとよほんと。ＩＳの特訓手伝ってっていうから来てるのに、逃げるだけでこっちを攻撃しないじゃない」
「それについては鈴ちゃんに非があるよね？」
「最初に言ったじゃない。脇を絞めて相手に向けて撃つ。あとは感覚よ感覚」
「やっぱごめん、鈴ちゃんにこういうの聞くことが間違ってたんだと理解したよ」
「どういう意味よ!?」
キィーッ！と鈴ちゃんご自慢のツインテールを逆立てて怒り出した。
マニュアル以上のコツとかを、感覚だとか精神論とか出してきてもらっても、こっちはそれをどう扱えばいいか分からないよ。
「……Ｂｅ　Ｃｏｏｌよあたし…。よし、落ち着いた」
「鈴ちゃんお帰り」
鈴ちゃんと一緒にピットに戻り、そこてこの一時間のことを話す。
「大体ね、　あんたは人に向けて撃てないんだから、何説明しても無駄よ無駄。気持ちの問題でしかないのよ」
「そんなこと言われても……」
「人に向けてトリガー引くだけなら、ちょっとの握力さえあれば生身でも出来ることよ。ＩＳ使ってればなおさら撃ちやすいわ。それを

撃てないのは、あんたの精神面が弱いのが原因としか言いようがないわ」
私はそうは思わない。いや、似ているけどちょっと違う。
きっと授業で訓練を始めて、それからこういう風に練習へ挑んでいれば違ったと思う。
そうじゃない。
フォグに撃たれて大火傷をしたこの左腕。これが私の心の中で楔になって、怖がらせている。
人に向かって引き金を引くという、本来の意味を理解してしまったからだ。
これはゲームじゃなくて現実だと理解したからだ。
鈴ちゃんもきっとこういうことは理解してるはずだ。それを私は聞きたかった。
「だって、ＩＳを展開していても人は人なんだよ？私の左腕みたいに殺してしまうかもしれないって考えると、やっぱり怖くて堪らない」
「あぁ……」
「鈴ちゃんはどうして強いの？人に向かって撃ったとき、死んじゃうかもしれないって考えないの？」
私が真剣に問いただした。
鈴ちゃんは溜め息を吐きながら答えた。
「考えない時なんてないわ」
「え？でも、だって」
「まずは聞いて。国家代表候補って言うのはね、殆ど軍属みたいなものなの。代表、代表候補みんなに言えるけど、確実に軍事訓練をしてる。テロ対策訓練もしてる。専用機を持っててそういうことをしてきてないあんたら二人の方がよっぽど珍しいの」
初耳だった。国家代表は普通に国際試合に出たりするスポーツ選手と変わらないと思っていたから。
それに……。
「でもアラスカ条約で軍事利用は禁止されてるんじゃないの？なんで世界の国々がそんな……」

「大昔にあった核抑止力って知ってる？それと同じよ。戦争が仮に起こったとして、アラスカ条約を破ってＩＳを利用して攻撃してくる国があるかもしれない。だから、それに備えるように各国で訓練しているの。この言い方が正しいのかは分からないけど、今はＩＳ開発による冷戦が起きていると言っても過言ではないと思うわ」
冷戦？そんな恐ろしいことが起きているなんて、考えもしなかった。
ニュースなんかでもおくびにさえ出さないことだ。
「表面上はそんな様子ないわよ。スポーツなんだもの。過去の経験が生きていて、この微妙な均衡を保っているのよ」
「……鈴ちゃんが何を言いたいのか分からないよ」
「話が逸れたわね。あたしたち代表候補はね、みんな殺す覚悟や技術を持っているの。だから躊躇わずに撃てる」
「鈴ちゃん……」
「それ以上にね、あたしたちはＩＳを信頼してるのよ」
暗い顔をして話していた鈴ちゃんの顔に、笑顔が戻った。
「何年も一緒に練習してるＩＳだもの。こいつなら人を殺させないし殺さないって分かるのよ」
からからと笑いながらブレスレット、正しくは鈴ちゃんの専用機『甲龍』を叩いた。
「どうしても撃てないなら、撃てる理由を作りなさい。あたしはどうせこのまま軍にはいるだろうし、在り来たりな言葉だけど守るべき人民のためって考えてるわ。貴方はどう？そうやって自分を奮い立たせる気持ちでやってみたら」
私を奮い立たせるもの……。
翔くんのことしか思いつかない。私はやっぱり色惚けてるのかなんて自覚出来るくらいには、それしか思いつかなかった。
そして鈴ちゃんがやったみたいにロケットペンダントの姿をしている、待機状態の秋桜を叩いてみる。
コンコンと独特の響かせて、なんとなく温かい感じがした。
するとなんだか自分の中で勇気、みたいなものが出てきた。

そんな一口で説明できるものではないんだけど、そうとしか言えない自分の中でも不思議な感覚。
これを翔くんへの強い思いだとはっきり言えるなら、私はそれが一番自分の中で正解に近いものだと信じて疑わない。
殺す覚悟とか、そういう仰々しいものなんて今の私に持ち合わせることは出来ないけど、一歩踏み出す覚悟はできた。また翔くんの横に近づいたんだ……！
グッと歯を噛みしめて、秋桜を胸の前で握りしめる。
「まあ、国家代表候補でも軍人でもなんでもない明菜に、それを求めるのはやっぱり酷だったかしら？」
「ううん、ありがとね。それともう一回だけ付き合って」
「へ？それって！」
「私、次は絶対撃てる気がする」
「ははっ！いいじゃない、やってあげるわ！」
私がそうやって言うと、鈴ちゃんは心底楽しそうに笑って見せた。

秋桜と甲龍のエネルギーが回復し、もう一度ピットから出て構える。
五百メートルくらい離れたところで甲龍と向き合う。
十七時になるチャイムの音で戦闘は開始するように二人で決めた。その時間まであと三十秒もない。
「明菜、最初のやつとは雰囲気が違うわね」
「まあね。私だってやるときはやるって見せてやるもん」
「へえ。じゃ、私もちょっと本気でやるわよ」
鈴ちゃんはそう言って手に握った双天牙月を構えて見せた。
本気というのは、きっと今まであれを振り回すことしかしてなかったことから思うに、何か射撃武器を使うってことだろう。
私は一層気を引き締めて、あの時の情景を思い出した。フォグとヘイルが私を追いかけてきた時の情景だ。
私は二人を一人で相手にするほど強くなかったし、まず武器すら持っていなかった。

今私の手には武器がある。そして一対一だ。だから、自分にどこまでのことが出来るかは分からないけど、精いっぱいのことをする。
目の前の鈴ちゃんを鈴ちゃんとして見ないで、テロリストの凰鈴音として見ることに徹した。
慢心はない。ましてや油断もない。ただあの凰鈴音に対して引き金を引くんだ。
そう強く思って、秋桜を信じてアサルトライフルを取り出した。
その瞬間、チャイムが鳴り響いた。
甲龍はその見た目からはおおよそ想像できないようなスピードで真っ直ぐ瞬間加速で突進してきた。
私は後方へ飛び退きながら牽制のつもりで、まずは凰の予測進路にグレネードを置き撃ちした。
私の意図を察したのか凰はにやりと笑った。
その瞬間、甲龍の周りがほんの一瞬だけ歪んで見えたと思ったら、急にグレネードが爆発した。
あのグレネードは時限性と近接信管の二つがあるものだった筈……!?
「明菜、あんた撃てるようになったじゃない！」
「まだ近接信管が働く距離じゃないのになんで……？」
私が状況整理をしようとしているのに、その余裕は与えてくれそうにない。
私に肉薄した凰が双天牙月を振りかぶる。
私は下方に瞬間加速で離脱して、自分のいた場所にリロードされたグレネードと銃弾をフルオートで１０発ほど撃ち込む。
「ちっ！」
凰は体を捻りながらそのまま加速して突き抜け、何とかグレネードだけは避けた。
アサルトライフルの銃弾を何発かもらったみたいだけど、全部装甲に阻まれて効力射は一つもなかった。
でもそれで充分。もう一度グレネードを再装填しやがらアリーナの端まで行って、距離を取って様子を見る。

甲龍は装甲が意外と堅牢、近接格闘型、機動力は全般的に高い、それから何かよく分からない攻撃をしてくる。
これが前の一時間と今回の戦闘から分かったこと。
「きゃぁっ！」
突然背中に衝撃を感じた。
私を撃ち下ろすように来た衝撃で吹き飛ばされて、そのまま地面に叩き付けられる。
また甲龍の周りの空間が歪んでいるのを確認できた。
叩き付けられた勢いを殺さず、そのまま飛んで回避運動をする。
私がいたところに何個も何個も地面が抉られるように穴が開いた。
穴が開くほんの一瞬前には必ず甲龍の周りの空間が歪んでいるのは確認できた。
原理は分からないけど、甲龍の空間が歪むと見えない砲弾が飛んでくる、とだけは分かった。
向こうの攻撃も止み、また武器を構えようとする。
「え、あれ？」
手にアサルトライフルがない？なんで……？あっ！
アサルトライフルは地面に転がっていた。さっき砲弾に当たった時に取り落としたらしい。
でも一々それを拾いに行く余裕はなかった。また凰が肉薄してきているからだ。
拡張領域から無反動砲を左手に、サブマシンガンを右手に展開し、下方から捻り込む様な機動をとりながら、サブマシンガンを置き撃ちして本命の無反動砲のロケット弾を撃ち込む。
それに対して、凰は接近するのに見えない砲弾を織り混ぜてくる。
見えない砲弾は私が撃つ銃弾やロケット弾を吹き飛ばして無効化するから、それを考慮しながら撃ち込まないと意味がない。
やりにくい……！
「捕まえたわよっ！」
「!!」
ギンッ！という大きな金属音が上がった。

凰が振りかざした双天牙月を無反動砲の砲身で無理矢理柄の部分を受け止め、大きく砲身が凹んだ。
パワーは秋桜の方が上だったからよかったものの、反応が遅れたりパワー負けしたりしたら、確実に袈裟斬りにされて絶対防御が発動し、大きくエネルギーが削られていた……。
そのまま押し返して、無反動砲の装填部分目掛けてサブマシンガンをたっぷり撃ち込む。
意図したことがばれて凰は飛び退き、私も腕に取り付けられた大型の盾を前に出しながら飛び退く。
無反動砲が大きな爆発を起こし、完全に逃げ切れなかった甲龍はそれなりのダメージを受けた。私は盾のお陰で殆ど無傷だったが、これで一矢報いれた……！
「やるわね明菜、見直したわ！その調子なら愛しの渡良瀬の横まで一っ飛びね！」
「なっ、なぁ!?」
私は不意打ちを受けた。
私にとって、翔くんとの関係を冷やかす様に言われるのは、一番動揺させるのに効果的な行動だった。
どうしてもあの頃を思い出してしまうし、やっぱり冷やかされることに慣れていないからどうしても意識してしまうんだ。
凰はこの一瞬の隙を見逃さなかった。
一気に私の懐に飛び込んで、この至近距離で見えない砲弾を撃ち込んだ。
「くっ、ぐぅ！」
「復帰が遅いっ！」
吹き飛ばされた私を追いかけて、そのまま双天牙月ど撫で切りに袈裟斬りにし、最後には地面に叩き付けられて、私は喉元に双天牙月を突き付けた。
「良く粘ったわね。戦闘素人のあんたがここまでやるとは思わなかった。でもこれでおしまい。今回はあんたの負け」
「……」

なんだかとても悔しかった。
こんなことで負けたくなかった。私の中の闘争心がここまで強いものだとは思わなかったし、こんなに悔しがりだとも初めて気付いた。
だから、このまま負けたくなかった。
その時私はあることに気がついた。
後ろ手に回してある右手にサブマシンガンを気づかれないように展開して、隙を伺う。
「しっかしねぇ、あんたも渡良瀬の話題を出すとこんなに動揺するなんて思わなかったわ。熱くなって挑発みたいなこと言っちゃってさ、不意打ちみたいになっちゃって悪かったわ。そんなつもりはこれっぽっちもなかったとだけ言うわ。次は私も気を付けるから」
「……織斑くんのことになると同じ様な反応する癖に」
「あ、あのバカは今関係ないでしょ!?」
一つ仕返しが出来た。
それにここで大きな隙が出来た！
今だ！
「それにまだ私は負けてない！」
「あっ!?」
サブマシンガンを甲龍の股を抜くようにして、後方へ撃ち込む。
そう。凰のすぐ後ろには、さっき取り落としたグレネードが再装填されたアサルトライフルが転がっている！
マシンガンが打ち込まれたことで、アサルトライフルと中のグレネードが爆発する。
その爆風を甲龍はもろに受け、吹き飛ばされる。
私は咄嗟に盾を構えて爆風を凌ぐ。
「あんた、ほんとに良いセンスしてるわね」
「!?」
私の後方に飛んでいく凰がすれ違い様にそう言った。
私は方の部分に大きな衝撃を受けたと同時に意識を手放した。

◇

親友を担いでピットに戻る。
さっきの戦闘であたしの最後の一撃で意識を刈り取った。
怪我も何もないけれど、きっと緊張の糸が切れたんだろう。対峙してみて、まるで人が変わったかのような目と顔つきをしていたし、戦い方も素人とは到底開け離れたものだった。
「全く、色々やらかしてくれちゃってさぁ」
あたしはとんでもないものを目覚めさせてしまったのかもしれない。
銃の照準はてんでバラバラ。近接信管やバラ撒きによる射撃だからこそそこのダメージを与えていたけれど、これが射撃実習ならギリギリ合格点といったところか。
本当に三十分くらい前は引き金が引けないとピーピー言っていた人間だとは思えない。
やること為すこと滅茶苦茶な奇襲攻撃。まさか自分のバズーカや取り落としたグレランを爆発というか暴発させて攻撃してくるなんて考えもしないわよ……。それにこんなに負けず嫌いだったっけ？
龍咆まで使っておきながら、あたしは甲龍のエネルギーを半分手前まで削られた。国家代表候補としては、このこと結構自信が揺らいだのよ？
「こーの色惚け娘め」
スースーと背中で寝息を立てるおバカの頬をツンツンとつつく。やめてよ翔くん、とか寝言で言い出す始末だ。
深く溜め息をついて、降ろして寝かせる。
しばらくしたら目を覚ますでしょ。
「ちゃんと謝って来たわよ。それで、あっちの気持ちも確認したわ」
改めて、この二人は幸せにならなきゃダメなんだって思えた。
ここまで想い合ってる二人が結ばれないなんて、世の中間違ってるわ。そんな運命の神様、あたしがぶん殴ってやりたい。
でもそんなことは出来ないから、あたしはあなたを鍛え上げる。そ

れで、強くなったあんたは渡良瀬の心の殻をぶち破るのよ。
あいつは心を固く閉ざして、みんな自分で背負い込んで、独りで泣いて苦しんでる。
あなたのことを守るべき存在だと思い込んでるわ。それで、自分には守る力がないって信じて疑わないのよ。
「ほんと、バカなやつなんだ」
あたしの知ってるもう一人のバカとは正反対だわ。
頭が良くて優しいから、色々考え込んで空回りしているみたいだけど、根っこはあんたが惚気てたまんまだわ。
だから、あんたが惚れる気持ちも少しは分かるよ。
それにね、あいつの隣は明菜しか立てそうにないわ。こういう時のあたしの勘が良く当たるの、あんたも知ってるでしょ？
あんたはもっと強くなれる。あたしが保証する。すぐにでもなれるわ。
「だから、これからもビシバシ行くわよ……！」
緩み切った顔をする友人のデコに、ビシンッ！とデコピンしながらそう言った。

為すべきこととは

僕が学園に帰って来てから一週間近く経った。

春の空気はなくなっていて、次第に近づく梅雨に向けて空が重くなっていくのが目に移り始めた。それでもたまに見せる五月晴れは、少しだけ心も晴れやかなものにしてくれて、そんな日の夜は寮室のベランダから夜空を眺めた。

時折速く動く星が見える。それがＩＳＳだと知っている人はどれだけいるかは分からない。でもその星はそんなに明るいものではなくて、何万光年と離れている星々の方が明るかったりして、そういうのが奇妙で面白く感じる。

僕のリハビリは順調に進み、今はもう車椅子がなくても問題なく生活できる。ただまだ激しい運動をするのには厳しいものがあって、少なくとも生身では飛んだり跳ねたりすることは出来ない。

もう人の手を煩わせるようなことはないのだけど、織斑はそうなってからも毎朝僕の部屋に来て朝食を作って一緒に教室へ向かう生活を辞めなかった。

別に何の問題もない。朝食を作ってくれるのは有り難かったから。強いて言えば、何か機密のメールでも届いた時には部屋を出て行ってもらう程度だ。

昼、織斑に誘われて食堂へ向かった。

僕が車椅子生活をしている間は、織斑と篠ノ之さん、オルコットさんの三人と、よく居合わせる凰さんと明菜の五人で食べていたらしい。

案の定、今回の昼食でも二組の二人と居合わせた。

明菜と顔を合わせるのは三日ぶりだ。凰さんに平手打ちを受けて以来あっていない。

でもあの時の記憶が微かに残っていて、その記憶では明菜が僕に謝っていた。ごめんねと。

あれから三日、僕の視線は気付けば明菜を探していた。

会おうと思えば隣のクラスにいるんだから簡単に会える。でもそ

れが僕には出来ず、通りかかった廊下や教室から見えるグラウンド。放課後にリハビリと称して散歩をして姿を探してしまったりしたけど、見付けることはなかった。
　こんなに近くにいるのに三日も顔を合わせていなかったというべきか、今までに比べて三日でこんなに心が揺さぶられるというべきか。どっちを言えばいいのかは分からない。
「そういやついに明日だな」
「明日って何があるの？」
「ええ、明日ね」
　織斑と凰さんが向き合うような形で座っていて、互いに鋭い眼光で睨み付け合って物々しい雰囲気を醸し出している。僕の問い掛けには気付いてもいないようだ。
「渡良瀬は知らなかったか？明日はクラス代表戦だから、一般の授業も休みだって」
「そうですわ。ですから今日は私がみっちりと訓練のお手伝いをいたしまして、一夏さん、ひいては一組に勝利をもたらすのですわ！」
「む、その役割は私一人で十分だと言ってるだろうが！」
　初耳ではないけれど、そんなことに意識が向いていなかったので、今やっと思い出せた。
　というか、この二人はなんでこういつも言い争っているのだろうか。
「牧瀬さん。この二人はいつもこんな感じなの？」
「あー……、そうだよかけ、んんっ！渡良瀬くん。いつもこんなだね。こうやって織斑くんのことを取り合ってる」
　明菜もこの光景には苦笑いを隠せないようだ。
　って織斑を取り合ってるって、やっぱり織斑に惚れてるのか。
　真っ直ぐで爽やかで、ウジウジしている僕とは大違いだ。男らしくて格好良いと思う。
「やっぱり織斑みたいなやつがモテるんだね。こんな綺麗な二人に愛されてるなんてね」
　僕が何気なく発した言葉に、ほんの僅かな時間だけ、空間が凍りつ

いた。
「なななな！何を言うんだ渡良瀬！」
「わ、私と一夏さんの関係だどうだとかそういうことをこんな人前で恥ずかしげもなく！」
「え？二人が俺になんだって？」
「わー！わー！何でもない！何でもないぞ一夏！」
「空耳ですわ！本当に何でもございませんの！」
「ちょっと一夏！こっちと話をしてたでしょ!?そっちは今関係ないでしょぉ!?」
「ちょつぁ!?いでででででっ！」
「関係ないとはなんだ！大有りだ！」
「そうですのよ！」
　そのまま織斑は耳を腕を頬を引っ張られて、四人で（なお一人は口を一切出していない）てんやわんやの言い争いは激化した。
　分かりやすいというかなんというか、もっとこう素直に気持ちを伝えればいいのに。
　なんて考えて、その思考を遠くへ放り投げた。僕にそんなこと言う資格も考える資格もないだろう。
　この中じゃ僕が一番素直になれていないから。
　え、素直になれていない？
　いや、そんなことはないはず。明菜を突き放しているのは、どんな形であれ本心であるはずだ。
　そうやって頭を振っていると、刺さるような視線を感じた。
「……」
「ま、牧瀬さん、どうしたの？」
　心底不機嫌な顔を見せてこっちを睨み付けていた。
　待って。顔に見覚えがある。
　確か最後の花見をする前の、四年生のホワイトデーに同じ顔を見た。
　僕はあの時、クラスの他の女の子から貰ったチョコのお返しをした。

若干煩わしさを感じていて、家で余っていた粗品の飴玉でお返しを済まそうとして、それを女の子の下駄箱にいれて置いたのだ。
勿論明菜と一緒に登校していたから、誰の下駄箱に何を入れたのか知られていた。
明菜は僕がポケットから取り出した飴玉を見て、心底不機嫌になった。
今の明菜の顔は、その時と同じだ。
余談だが、明菜へのお返しは父さんがアメリカ主張のお土産に買ってきた、カラフルで４メートルくらいある長いマシュマロだ。
見た目も面白いし味も良かったから、喜んで機嫌を直してくれるお返しになるだろうと思っていた。
明菜は大声で泣き出した。
その時僕は、ホワイトデーのお返しに渡すものに込められる意味を初めて知ったのだ。
「あー、んん！牧瀬さん、君を含めてここにいる女の子はみんな綺麗だと僕は思うよ」
「……６０点」
「翔、お前よくそんな歯の浮くようなセリフを人前で言えるな」
「一夏、お前はそれを本気で言っているのか？」
「どうせ無自覚ですわ」
「一夏だもの」
一応合格点、なのかな？
明菜ははぁと溜め息を吐くと、目の前に置いてあった蕎麦を一気に啜り込んで完食した。
少しは機嫌が直っただろうか？今の僕に出来ることはこんなことぐらいなんだ。
って、僕は何を考えているんだ？明菜を拒絶すると決めたじゃないか！
それを何たる体たらく。僕は本当に自分の立場を理解していないようだ。
なんで明菜を拒絶しているのかを思い出せ。

僕は強くなんかなくて、明菜のことを守れないんだ。そんな僕が明菜と一緒にいては、様々な凶事に巻き込んでしまう。それで明菜は左腕に大きな怪我を負ってるじゃないか。
僕が巻き込んだせいで、僕のせいで明菜は苦痛を味わった。
僕は独りでなけりゃいけない人間なんだ。もう誰も巻き込みたくないんだ。
でも、そう考えているのに何で僕はこんなに、必要以上に意識してしまう？
いやそんなはずはない。え、いやちょっと待て……。
何で僕はこんなに動揺しているんだ？
今までのひと月近い学園生活の中でも、こんなに自分の考えが揺らぐのは初めてだ。何でだ？
その時、僕の中で意識的に無かったことにしようとしていた言葉が頭の中で反響した。
『なんで何でも一人でやろうとするんだ？みんなで助け合えばいいじゃないか』
酷く甘美な言葉だ。理想的な言葉じゃないか。
でもそんな甘美な言葉を吐き出せるほど僕の心は強くないんだ。
自分一人を守るのに精一杯で、誰も助けることなんて出来ないんだ。
「というかさ、今日ってもう放課なのよね。明日が行事だから、それの準備とかで色々あるらしいし」
凰さんの言葉で思考の海から何とか這い上がり、ある用事を思い出した。
今日の放課後、父さんとが来て桜花の受け渡しがされるんだった。
桜花はリミッターが施され、少なくとも前期が終わるまでは宇宙事業は見送られるらしい。
それから、残った拡張領域を用いて対テロ武装が施されるらしいが、それがどれだけ効果的なものかなんてのは分からない。どちらにせよ、僕もこの学園で戦闘知識を学ぶ必要が出てきたのだ。
……僕が強くなったら、また明菜と一緒にいられるのだろうか？

まだそんな淡い幻想を抱いている自分に飽き飽きとしてきた。
そう自嘲すると、前に座っている明菜が悲しそうに僕を見つめてきた。
「じゃあ、僕は用事があるから先に行くね」
その視線から逃げるように立ち上がった。今の僕にはその視線を受け止めることが出来ないから。
「あっ、翔ってこの後桜花を受け取るんだっけ？」
「ああ、織斑には朝話したっけ。調整が終わったら試験飛行と武装の動作確認をするよ」
「そっか。じゃあさ、それが終わったら俺と勝負しないか？」
「えっ」
織斑にそういわれた僕は固まってしまった。
僕が織斑と戦う？そこに何の意味があるのだろうか？
「ちょっと一夏さん。明日あなたはクラス代表戦を控えてますのよ？これでもしも明日までに回復が不能なほど損害を受けてしまっては意味がありませんわ」
「ああ、それもそうだったな。いやさぁ、翔と男同士の拳の語り合いってのをしたかっただけなんだよ」
「拳の語り合いって……」
「まあ武道を修めているものなら向き合えば本質を窺うことが出来るからな。ボディランゲージというのは案外信憑に足るものだと私は思っているぞ」
篠ノ之さんまで何を言ってるんだか……。
オルコットさんがやんわりと織斑を抑えると、僕に向き直して言った。
「代わりに、私と一戦交えて頂きたいですの」
「へ？」
僕にとってはこっちの方が拍子抜けしてしまうことだ。
アリーナの中でも最も端っこにある第４アリーナ。そこの整備室に僕らが向かうと、既に父さんが準備していた。

その脇には二人の人が立っている。一人は背の高い金髪の女性。格好から察するに軍人だろう。
そしてもう一人も軍人だろうか……。いや、見覚えのある人だ。
その人は僕の鼻くらいまでの背がある女の子だ。
彼女は僕に気付くなり、小走りになってこっちへ向かって駆けて来た。
「カケルゥー！」
そのままの勢いで僕に抱き着いて頬に頬を左右順番にくっつけて来た。
「久しぶりだね、アレックス」
「もう！あの時は本当にこっちが死ぬかと思ったんだから！すっっっっっごく心配したんだから！」
僕の後ろにいた三人の内二人は唖然としていた。
「えっ翔、その子誰？」
「いや待て一夏そうじゃない！アレックスって男の名前じゃないか！」
まあ急にこうやって抱き着いてくるような光景見せられたらびっくりするよな。仕方がない。
オルコットさんはイギリス出身だし、こうして友人と会ったら頬を当て合うことくらいも、何のショックもなく受け入れられているんだろう。
それに別にアレックスは男の名前ではない。
「頬キスなんて私の家に戻れば親しい人はみんないたしますのよ？どうです一夏さん、私たちも毎朝いたしましょうか？」
「セシリア貴様ぁ！」
「で、その子は誰なんだ？」
織斑に催促されると、アレックスは僕から離れてアメリカ人独特のオーバーな動作をした。
思い切り肩を竦めて手を開き、呆れた顔で溜め息を吐いた。
「あなた中々礼儀知らずなのね。こういう時は先に自分から名乗るものよ？」

「あ、おう。そうだな、悪かった。俺は織斑一夏。ＩＳを使える二人目の男として、この学園に通ってる」
アレックスはじろじろと織斑を観察して匂いを嗅ぐ様な仕草をした。
その後くるりと回って真っ直ぐ織斑を見つめて挨拶をした。
「悪い奴じゃなさそうね……。私はアレクサンドラ・ロウズ！アメリカ国家代表候補として、Ｄｒ．渡良瀬を護衛するために来日したわ！」
「年は僕らのいっこ下だよ。まあ僕の妹分みたいなやつさ」
「む……」
「そうか。アレックスって男子女子関係なく使えるニックネームだったんだな。初めまして。私は篠ノ之箒だ」
「えぇ!?篠ノ之って、Ｄｒ．篠ノ之の家族か何か!?」
「あー、そうだ。あの人とはあまり仲が良くなかったが一応そうなるな」
「へぇ～！すごいわねこれって！何かの巡り合わせかしら！」
アレックスは持ち前の明るさですぐに溶け込んでいった。
思えば、僕が桜花に乗り始めた時、一番辛かった時にそばにいてくれたのは彼女だ。
ロウズ長官が同年代と何の接点もないのは、精神衛生上良くないといって引き合わせてくれたのだ。
この時アレックスは既にＩＳの英才教育を受けていて、中学生に上がる頃には国家代表候補の推薦が貰えるとさえ言われていた。だからこそ、事情を説明されたアレックスだから、僕は話せたのかもしれない。
別に何の取り留めもない会話をしながら、一緒にビスケットを頬張るだけのちょっとした時間だ。
けれど、僕はアレックスの明るさに半分近くは救われていた。
そしてもう半分はそれでは埋めることの出来ない寂しさと、未来への不安に包まれていた。
「お初にお目にかかります、天才操縦者さん。私はイギリス代表候補

生を務めています、セシリア・オルコットですの」
「よろしくねセシリー！あなたのことは良く知ってるわ」
「あら、それは先達として光栄ですわ！」
「あんな訳の分からないＢＴ兵器なんて良く使えるよね。動けないとはいえ４つも一度にさ」
「いいえ、私もまだ未熟者ですわ。そこのＩＳを動かしてまだ半年と経っていない殿方に、引き分けまで持ち込まれてしまいましたもの」
「へぇ～。イッチーってそんなに強いんだ。って、ブリュンヒルデの弟か！なんだか納得したよ」
「俺は強い姉を持ったお陰で、周りからの期待の眼差しが痛いぞ」
「一夏、それには私も同意せざるを得ない……」
　向こうは話で盛り上がってるみたいだし、今のうちに父さんの要件を済ませてしまおう。
「父さん、久しぶり」
「ああ、久しぶりだな。あの時は何もしてやれなくて悪かった」
「父さんが気にすることじゃないよ。桜花の武装を取りに行く途中だったんだ。間が悪かったんだよ」
「そうか。それならいいのだが」
「それに、父さんのあのメールのお陰で取り敢えず一人はテロリストを撃退できたんだ」
「そうか……」
　父さんはディスプレイからこっちへ顔を向けることなく受け答えをした。
　しばらく背後の喧騒な会話が聞こえる中、無言な時間が続いた。
　先に声を発したのは父さんだった。
「母さんが本当は死んでいること、お前は聡明だったからもう知ってるだろうな」
「ああ、知ってる。水も食料もなしに冥王星まで有人飛行する計画なんて、今考えれば無茶苦茶もいいところだ。父さんがなんでそんな嘘言ったのかも大方分かってるよ」
「そうか……」

父さんが吐いた嘘は、幼い僕の母親への感情と憧れを消さないためだったんだろう。小さかった僕が傷つかないために吐いた、不器用な父さんの優しい嘘だ。
「今頃、母さんは太陽系さえも離脱してるんじゃないかな……」
「母さんが？」
「あれは事故だったのか故意だったのかは、今となっては解明の使用がない」
ぽつりぽつりと父さんが話始めた。
「桜花というのはな、母さんが好きだった桜から名前を取ったんだ。それも元々ＩＳに付けた名前じゃない」
「それって」
「母さんはな、私が開発していた宇宙作業用パワードスーツ『桜花』の実験中に死んだんだ」
「……」
「途中までは完ぺきだった。私が開発したＰＩＣ制御技術の前進も好調に稼働していて、これで月や火星なんかでも人間が自由に活動できる世の中になると思われていた。そんなときに、何の以上も示していなかったパワードスーツのジェネレータが暴発。その勢いで母さんは宇宙に投げ出された。滑稽に思えるかもしれないが、その後は母さんの亡骸はスイング・バイのするようにして太陽系から飛び去った」
「それが本当の母さんの話、なんだね」
「ああ。母さんは有人で大気圏外に出ることが夢だと話していたよ。けどこんな形で夢が叶うなんてな。全く笑えない」
こっちからは父さんの顔が見えないけど、パネルをいじりプログラミングしていく速度はどんどん熱を帯びるように上がっていくのが分かった。
「最初の一年は失意の念に苛まれたさ。私が殺したんだって。そして一年が経ってお前が５歳になった時だ」
「ＩＳが発表された年だ……」
「そうだ。篠ノ之博士が初めて発表したデータには驚かされた。最初は中学程度の小娘に何が出来るか、と憤りすら感じたんだがね。気付

いたら私はプライドも醜聞も全て投げ捨てて彼女の前で膝をついて頭を垂れていた。私の研究には貴女が欠かせない、助けてくれと」
「父さん……」
「もう母さんみたいな犠牲者は出したくなかった……！私と彼女の技術で革命を起こせると確信していた！けれども彼女はそんな私を見て、にっこりと笑ったかと思えば、そのまま行ってしまった」
「……その一か月後には白騎士事件が起きたんだよね？」
「ああ。彼女は徹底した気分屋で愉快犯というのが本質だったのだろう」
　途端に父さんの背中が酷く弱々しく見えた。
　父さんも父さんで苦しんでいたんだ。
「それからは自分の技術とＩＳを如何に組み合わせるか、その実験に没頭し続けたのだ。これを組み合わせれば母さんの夢も無念も、私の悲願も！全て果たせるのだと……。今まで放ってしまって悪かったな、翔」
「いいんだ父さん。本当にいいんだ……」
　父さんも手一杯だったんだ。俺に構っていられるほど強い人じゃなかった。でもこうして『桜花』を完成させて、全てを果たしていた。
「桜花の暴走が起きた時に嫌な予感がしたんだ。また母さんみたいに俺は家族を失うのかと……。今まで感じていなかったお前への親心がこんな時に湧き出て来た。そして今回のテロ。本当に生きていてよかった……」
「……心配してくれてありがとう」
「今日ＩＳ学園に来て、お前に改良した桜花を届けると決まった時に、この話をしようと決めたんだ。お前はもう真実を受け止められる大人なんだと思って。この機会を逃したらもう言えないと思ってな」
「うん。しっかり受け止めたよ」
「『ヤエ』。その背中のドライブの名前だ」
「え？それが一体？」
「お前は母さんの名前も忘れてしまったのだな」
　そうだ。母さんの名前は『弥恵（やえ）』。

父さんは桜の名前ではなくて、母さんの名前を付けていたのか。
「桜花は、私の信念、母さんの夢と希望、そして息子のお前が合わさって初めて飛ぶ。そしてこれからはお前を守る盾にも鉾にもなるだろう。その力、場所を間違えないように、存分に振るってくれ」
全ての操作が終わり、父さんが僕に向いて頭に手を置き撫でて来た。
今まで我慢していたものが、抑えが効かなくなってしまった。
僕はその場でただ座り込み、赤子の様に泣き喚いた。

焦り、迷い、嫌う

調整の終わった桜花を僕は展開して、以前との違いを確かめていた。

正直なところ、違いと言う違いはない。

脚部に小さい可変翼と小型バーニアが加えられたのと、両手首の部分に小さな銃口が取り付けられた程度で、他は全く変わっていない。

『翔、聞こえるか？』

「ああ、聞こえるよ」

父さんが通信をしてきた。

変更点の説明をしてくれるのだろう。

『今までの桜花のデータから必要なものを加えた。まずは脚部の可変翼とバーニア。それで桜花の旋回能力と姿勢制御能力を向上して、より繊細な動きを出来るようにした。超高速時に急旋回をした時の衝撃や反動を軽減する効果もある。実際に動いてみろ』

言われた通りに動く。

急加速をして、いつも通りほんの1秒で音速を越える。

アリーナ内は広いと言っても、超音速で飛ぶには狭い。ここで行われる試合の殆どは時速４００キロメートルから７００キロメートルで、超音速に至ることなんて瞬間加速などで一気に距離を詰める時くらいだろう。

そうでもしないと、すぐにアリーナの壁にぶつかってしまう。

音速に達したのを確認して、少々強引に急旋回をする。脚部の翼が形を変え、バーニアが姿勢を制御するように少しずつ吹かしている。

これは凄い……！音速での急旋回でもジェットコースター程度のGしか感じられなかった。

『性能向上に成功したな。では次に武装の説明だ。両手首の銃口は確認できるな？』

手首の内側に、動脈の部分と言えばいいか、そこにあるのは確認している。

『それはリミッターがかかっている桜花に対して、過剰なエネルギー

を生産するヤエを用いた、小型の荷電粒子銃だ。単にビームガンと呼んでもいいだろう。射撃管制はイメージインターフェースを採用しているから、撃つイメージをすれば弾が飛び出す。今標的を射出するから撃ってみるといい』

バシュッ！という音がして、サークルの書かれたバルーンが十個くらい射出される。

それを停止状態から三個だけ狙い撃つ。そして四回撃ってやっと三個迎撃した。

ＩＳの補助があってこれでは、僕は射撃センスが余り無いらしい。

次に高速機動下での射撃をしてみる。

基礎的な回避運動の真似をしながら撃ってみると、これの命中率は五割程度だろうか。

僕の射撃センスは置いておくとして、射撃のレスポンスはまあまあだ。１分に三十発程度だろうか。

『……まあ訓練すれば上手くなるだろう』

「わざわざ声をかけなくてもいいでしょ……」

『次にいこう。チャージをして高威力のビームを出すことも出来る。これもイメージインターフェースによって管制されている』

チャージするイメージと言われても、急にそれは出来ない。どういった風にすればいいんだろうか……。

『出来ないか？』

「うん。イメージを掴めない」

『使えることだけ理解していればそれでいい。追い追い出来るようになるだろう。次にいこう。そのビームガンは銃身部分を取り外し出来る。取り外せば銃口から出たビームが刃を形成して剣になる』

言われた通りに取り外すと、剣を作り出した。

ビームソードってやつだ。

ＩＳの持つ膂力があるから重い武器を振り回しても、力はそこまで使わない。慣性を多少感じる程度だ。

けれどこのビームソードはそれを全く感じない

重さが柄の部分しかないからそれも当然か。

ビームソードを実際に振り回して標的を切ってみる。
粒子が高密度に圧縮されているからか、チリチリと独特の摩擦音がする。それによって産み出される刃は、物質に対して大きな威力を発揮することはすぐに理解できた。
「あれ？」
ビームソードを取り出して３０秒程度した時、独特の摩擦音は小さくなり、終には荷電粒子の刃も消えてしまった。
『取り外しているから、エネルギー供給が無くなる。現状その程度の時間しか形成していられないんだ。また取り付ければ元に戻るが、充填に1分ほど時間を取られる。それには注意するんだな』
「分かったよ」
『武装説明は以上だ。お前のメディカルチェックも含めて、桜花の動作データの確認をしたい。一度ピットに戻ってくれ』
「分かった。今戻る」
動作確認等は全て終了した。
こうして坦々と確認作業はしたものの、また自由に飛び回りたいと心を弾ませる。
きっと僕に犬の尻尾がついていたなら、バカみたいにブンブンと振り回していただろう。
やっと桜花が僕の手元に戻ってきてくれたんだ。そして桜花に乗せられた家族の想い。
僕は桜花に乗りながら、自分の存在価値を確かめていたのかもしれない。
そんな人に知られたら恥ずかしいと思ってしまう気持ちを隠しながら、悠々とピットに戻った。

◇

今俺達はピットからアリーナにいる二人に視線を送っていた。翔とセシリアが向かい合っている。
翔のメディカルチェックは何の異常も示さなかったし、桜花の方も

バッチリだった。
だから翔の親父さんもこの戦闘を許可した。本音のところでは、桜花の戦闘データも今後の研究のために欲しいらしい。
「翔のやつ、大丈夫なのか？」
今回のセシリアは、俺と最初に戦った時とは明らかに雰囲気が違う。慢心とか驕りとか、そういうものは一切なかった。
一番最初に俺がこのセシリアと戦っていたら、きっと一矢報いるまでもなく完敗していただろう。
翔の前にいるのは「慢心のセシリア」ではなく、「国家代表候補のセシリア・オルコット」なんだ。
「桜花の武装は白式程ではないにしても、圧倒的に手数は少ないんじゃないのか？」
「ホウキ、それは仕方ないのよ」
アレックスが横で声を上げた。
「桜花に積まれてる『ヤエ』が拡張領域の９割以上を占めてるの。だからあの二つの遠近複合武装は苦肉の試作品で、もうナイフ一本だって入らないのよ」
「そ、そうなのか」
「なあアレックス、『ヤエ』ってなんだ？」
俺がバカなんじゃなくて、これを知ってるやつの方が絶対に少ないだろう。
「『ヤエ』は、Ｄｒ．渡良瀬が生み出した既存のパワードスーツに備えられる予定だったジェネレータと、ＩＳに備えられたＰＩＣの融合発展させたジェネレータ。生み出したＤｒ．渡良瀬も詳しい原理が分かっていない、訳の分からない代物よ。桜花が最適化したことで完全にブラックボックスになってしまったから、現在研究中の云わばオーパーツ」
「すまない、意味が分からない」
「俺も全く分からない」
「その認識で良いんじゃない？誰も分かってないし。分かってるのは、重力場に介入することでＰＩＣと似たような効力を発揮してい

るってことだけよ」
「とりあえず、なんかすごい機械ってことでいいんだな？」
「……中学生にここまで言わせておいて恥ずかしくないの？」
痛いところを突くな。分からないものは分からないんだよ。
「とりあえず、今回は確実にカケルが負けるよ」
「そういうこと言うなよ。応援してやれよ。友達なんだろ？」
「友達じゃないし！……カケルには勝って欲しいとは思うけどさ、無理があるよ」
「なんでさ？」
「見てればわかるって」
「ほらお前たち、始まったぞ」
パッとモニターに向き直ると、丁度二人が飛び出した。
セシリアはセオリー通りにブルーティアーズを射出して距離を取る。翔はというと、猛スピードで肉薄していた。
さっきの動作確認でも見せていたけど、やっぱり恐ろしく速い。瞬間加速を使わないであんな速度を出せるだなんて。
「やはり桜花は速いんだな」
「ああ。射撃戦を主体としたセシリアにはこれ以上にやりにくい相手もいないんじゃないのか？」
「いや、今回の場合そういうわけにも行きそうにない」
「え？」
俺の考えていることとは裏腹に、箒の口振りだと翔の方が不利に聴こえる。なんでだ？
セシリアが牽制射撃をする。
翔はそれに反応してスピードを緩めて回避する。そうして回避した先でさらにブルーティアーズからの射撃が飛び交う。
あ、そうか！
「セシリアの牽制射撃で桜花の速度を活かせていないのか……！」
翔の動き方は基本的に単調で、武道経験者や訓練を受けていた人ならどこへどう動くかが分かりやすかった。
セシリアは牽制射撃で行動を封じ、鈍くなった動きに本命を的確に

撃ち込んでいる。
翔もビームガンでビットを狙うが、細長いビットに翔の射撃の腕では当てることは敵わなかった。
一つ一つをビームソードで壊しにかかるも、他の三つとセシリア本人の射撃で阻まれる。阻まれている内にビットは違う場所へと行ってしまうから壊せない。
完全にセシリアの独壇場だ。
翔が忌々しげに顔を歪ませて見せるが、それを嘲笑うかのように桜花のエネルギー残量が減るだけだった。
「今のコンディションのカケルと桜花じゃ、セシリー相手にすればこうなるのが関の山よ。今まで戦闘訓練なんて受けてこなかった人に銃と剣を渡して、国家のエリートと戦えなんて無茶なのよ。踏むステップを間違えてるわ」
アレックスがボロボロになっていく翔を見ながらそう呟いた。心の底から心配してるのだろう。
桜花のエネルギーはもう一割を切ったというその時、ことは起こった。
桜花が消えた。
その瞬間、ブザーが鳴り響いて試合は終了した。
アリーナを映すモニターに桜花の姿はなく、目で探してしまった。
モニターの向こう側のセシリアが急いでアリーナの端に向かう。そこに桜花が転がるようにして倒れ込んでいた。
アリーナの壁が大きく抉れてその下に倒れ込んでいるところから、壁に思い切り激突したらしい。
「い、今渡良瀬は何をしたんだ……？私の目には何も映らなかったぞ！」
「カケルはね、瞬間加速をしたんだよ。よっぽどあのまま負けるのが悔しかったんだ」
「はぁ!?あれが瞬間加速!?白式だってあれで滅茶苦茶速いはずだぞ！」
「当たり前じゃん。リミッターがかかっているとはいえ初速マッハ５

の瞬間加速なんて、肉眼で追うのは人間には不可能よ。じゃあ私は行ってくるから」
　そう口早に言うと、アレックスはモニタールームから飛び出していった。
「それにしても、翔のやつ大丈夫なのか？白式だって瞬間加速の衝撃は大きいのにさ、それよりもヤバいんだろ？」
「……」
「ん？どうした箒」
　箒がじっと黙ってアレックスの出て行った扉の方を見つめていた。何か思うところでもあるのだろうか？
「いや、あいつも色々と大変だろうなと思ってな」
「何が？」
「……何でもない！」
　時々こういう風に、箒のことが分からなくなる。やっぱり俺は察しの悪いバカなんだろうか。
「そんなことより、渡良瀬のところに行かなくてもいいのか？」
「本気で言ってるのか？箒は剣道の試合で負けた後に俺が来たらどう思う？」
「そうか、そうだったな」
　多分、あんな無茶な瞬間加速をしたのはアレックスの言った通り負けるのが悔しかったんだろう。どうしても勝ちたくて、躍起になってやっちまったことなんだ。
　だからきっと俺が今行くのは、翔の心を抉るだけなんだ。俺は曲がりなりにも引き分け持ち込んだ。けれど今回の翔は何もすることが出来ずに負けてしまった。相手の方が実力が上だと分かっていても、悔しいことに変わりはない。
　それに鈴から聞いた話だと、翔は強さへの執着が捩じれ捻くれてしまっているらしい。明菜との関係もある。
　どうすれば俺は翔の力になれるんだ？

◇

「ほら渡良瀬さん！しっかりなさいな！」
「は、はは。申し訳ないねオルコットさん。もう離してもらって大丈夫だよ」
「そんな訳には参りませんわ」
僕はオルコットさんの肩を借りてやっとピットに戻ることが出来た。
理由は簡単だ。僕が無茶なことをしたからだ。
負けたくなかったんだ。
あのまま何も出来ずに終わることを許せなかった。
もう僕一人じゃない。
僕の家族の想いを積んでいると知ってしまった今、僕は何も出来ずにはいられないんだ。
ピットのソファーに僕を座らせて、オルコットさんもＩＳを待機状態に戻した。
「あの超音速の瞬間加速、あなたみたいにＩＳに覚えのある方ならば後にどうなるか分かっていたはずですわ。何故あのような真似を？」
「織斑は君という大きな壁を乗り越えた。僕だって男なんだ。そんな姿に憧れたんだ」
嘘じゃない。
あの織斑に憧れたのは事実だ。無理だということを乗り越えて、自分の力で切り開いてみせた。
あんな姿を見せられて、憧れない男はいない。こんな世の中だから当然だ。
「一夏さんは箒さんのトレーニング、白式の性能、何よりあなたの情報を以て初めて慢心していた私に勝つことが出来たのです。今回のように本気の私では、一夏さんでもあの当時ならあなたと同じ末路を辿っていましたのよ？これは私の自尊心や一夏さんへの過小評価でもありません」
だが、結論として僕が弱いことに変わりはない。

僕がガストを倒せたのは、桜花の能力とナノマシンのお陰であって僕の実力なんかじゃない。圧倒的な性能でゴリ押しして、僕自身もそれに振り回されているだけだった。
「私が今日あなたと戦ったのは、あなたがどういう人なのか知りたかったからですの。あなたがテロリストを前にどう戦ったか知りたかったのです」
「……やっぱり分かってたんだ」
「国家の代表候補ともなれば、知らされるものですのよ。国の方針にもよりますが、我が祖国では積極的に情報公開を致しますから」
なら、僕が考えていることも分かるだろう？
僕みたいな弱い人間じゃあ、今ある現状を打開することは出来ない。人を巻き込んで不幸にするんだ。
そして僕は尻尾を巻いて逃げることしか出来ない。
孤独でいるしかないんだ。
「……私の祖国にこのような言葉がありますわ」
オルコットさんが柔らかい優しそうな顔を引き締めて、真剣な眼差しで僕を射抜いて言った。
「Ｎｏ ｍａｎ（人は） ｉｓ（孤島の） ａｎ（ように） ｉｓｌａｎｄ（はなれない）。首相や大統領、王様にだって妻と私的な友人がいるのでしてよ？あなたも一人でいることは出来ませんの」
「そんなこと言われたって、僕はその上げられた人たちみたいに強くないんだ」
「あなたを見ていると、私の過去を見ているようですわ」
オルコットさんはまた笑顔を見せて僕に語りかけた。
「お父様とお母様を亡くして以来、一人で何でもこなせる強い人になろうと精一杯努力しましたの。それで、国家代表候補まで上り詰めてこの学園にこうしています。だから一人で何でも出来ると舞い上がっていましたわ。そんな中、一夏さんとその下で協力をしていた箒さんと渡良瀬さんの三人の力によって、私は敗北を喫しました」
僕に諭すように語りかけるオルコットさんは、何かを懐かしむような顔をしていた。本人の言う通り僕を通して違う何かを見ているよ

うだ。
「そこで私は、自分を支えてくれた家の使用人や、幼い頃から親友として接してくれた人を思い出したのです。そして支えられてここに自分は立っているのだと分かったのです。だからあなたは一人でがむしゃらになっていた私のようですわ」
座り込む僕の頭と頬を撫でるオルコットさん。その手は懐かしい感覚に包まれていて、ひんやりとしたものだった。
自分の中で燻っていた火照りを冷ましてくれているようで、確かな安らぎを覚えた。
「一人で抱え込んでいても、結局誰かに支えられている。本当の孤独というのは有り得ませんの。だから、人を頼って下さいな」
そういうと手を離してピットから出ていった。
そしてオルコットさんは最後に振り向いてこう言った。
「一つ過去の私と違うとこがあるならば。……強くなることを諦めているところですわ。道というのは諦めない者の前に切り開かれましてよ？」
オルコットさんは僕に何を伝えたかったんだ？僕に強くなれと言うのだろうか？
強くなるって何だろう。
何もかもが弱い僕は何をすればいい？何から強くなればいい？どれ程強くなればいい？
いつから僕はこんなにウジウジとした人間になったのだろうか。
矛盾だらけの自分の気持ちが分からない。
もう僕には何も見えないんだ。
僕の先は真っ暗で、宇宙の深淵に向かって飛んでいくようだ。そんな暗闇に飛び込む勇気はなく、強くなることにも理解を示せていない。物怖じして一歩も前に踏み出せない。
なんでみんな前に踏み出せるんだ？どうして他の人も引っ張っていけるんだ？
全く分からないよ……。
「カケル……」

「アレックス……？」
座り込んで情けなく頭を押さえていると、アレックスがやって来た。
肩を上下に揺すり、蜂蜜色の長い三つ編みが首に絡まっているのを見て、相当激しく走ったんだろうことは用意に想像できる。
アレックスが近付いてくると、ハァハァと上がった息がよく聞こえた。
僕の横に腰を下ろし、手を僕の膝に乗せて乗り出して語りかけてきた。
「大丈夫？どこか痛いところはない？ナノマシンも強化薬も使わないであれは無茶に決まってるよ！バカッ！心配したんだから！」
そういって僕をひしと抱き締めてきた。
僕の心配をしてくれるのは嬉しい。けれど僕は心配されるに値する人間なのだろうか？
「心配させてごめんな。あのまま負けるのが悔しくてさ。やけくそになった訳じゃないけど、無我夢中だったんだよ」
「あぅ」
アレックスの頭に手を置いて、わしゃわしゃと撫でてやる。ついでに首に絡まってた三つ編みをほどいた。
自分の髪の状況に今気がついたのか、パッと少し飛び退いて、自分の手で確認した。
ホッと一息吐いて落ち着いたところ、僕を見て顔を真っ赤にして俯いた。
アレックスの一挙一動はまるで小動物のようで、見ていて心が和んだ。こんな彼女だからこそ、一番辛かった時の僕の心は癒されたのかもしれない。
人形のようだった僕に人としての格をもたらしたのかもしれない。
「ねえカケル」
「何？」
「ううん。カケルに怪我が無くて良かったって」
「そっか……」

そう言って屈託のない笑顔を見せた。
「カケルはもう十分頑張ってるんだから。私はカケルがどんだけ頑張って来たか知ってるもん。だから無理だけはしないで……」
「そういってもらえると楽になるよ」
結局僕は浮かれていたんだ。父さんから母さんのことと桜花の話を聞いて、また桜花が僕のもとに戻って来て。
僕に自由なんて元々ないというのに、浮かれて。敵うはずもない相手に無茶なことをして。こうやってアレックスを心配させている。
「カケルはこれ以上頑張らなくていいの。私がその分頑張るの。私にはそれしか出来ないから」
「アレック……!」

アレックスは身を乗り出して、そのまま僕に唇を重ねようとした。
けれど、重なることは無かった。

「何でもないっ!何でもないの!」
アレックスは僕の隣から飛び退くように立ち上がり、青ざめた顔で目に涙を浮かべながら走り去った。
僕はこの時、無言の圧力で彼女の希望を拒否した。気持ちを砕いた。覚悟も全て……。
立ち上がる気力もなかった。
ただ、僕が一体どれだけ醜悪な表情を彼女に晒していたのか。それをひと度想像して自己嫌悪に浸るだけだった。

試合の先の死合

俺の前には、一つの大きな壁がある。
翔に言わせれば俺はただの理想論者で、何も考えていない、知りもしてない子供だ。
翔の前に聳え立つ理想と現実を分ける壁。俺にはそれが見えないから、男でＩＳが使えるということの意味を理解出来ていない。
理解できるはずもない。
命の危機を自分の力で回避することなんて、経験していない。それどころかモンドグロッソの時には千冬姉に助けられて、そのせいで多方面に迷惑をかけた。
だから自分を守れる力、他人も守れる強い力を持った千冬姉に憧れて、自分もその力を求めている。
翔は人との間に壁を作って、自分の影響で他の人に迷惑をかけないようにしている。でもそれは寂しいだけじゃないか。だから俺には理解が出来ない。ＩＳっていう力を持ってしてもそうする理由が分からない。
たから友人として翔の気持ちを理解して、何があいつの助けになるのかを知りたい。
そう思ってこの場にいる。
「一夏、覚悟は出来てるわね」
「だからこうしてここにいる」
「ふん。あんたのそういうところ、ほんとに好きよ」
「へっ。こっちも鈴のそういうところは好きだな」
「っ!?……んんっ!!それじゃ、遠慮なく殺しにかかるわ！」
鈴は俺のそんな気持ちを汲み取って、翔があの時見た死の恐怖を再現すると進み出てくれた。
本当に良い友人を持ったよ、俺は。
そして俺は、翔のことを真の意味で理解できる、親友になりたいんだ。
そのための第一歩。

俺は今、踏み出すんだ……！
ビーッとブザーが鳴り響いて試合は始まった。
鈴は一気にこっちに肉薄してインファイトが始まる。
「へぇ、今のを防ぐんだ……！」
「そりゃどうもっ！」
鈴は連結式の鉈というか戟というか、それで肉薄した勢いを殺さずに脳天目掛けて思い切り兜割りをしてきた。その一撃に迷いはなく、殺気に溢れている。
俺はその一撃を雪片弐型で受け止めいなす。
ＩＳは絶対防御で操縦者の生命維持は確実に守られている。けれどそれを許容できる範囲を超えた攻撃は、死にこそしないものの痛みや怪我を伴う。
今の兜割りだって、まともに受けていたら大怪我は免れない。それを躊躇なく打ち込んできたのだ。
俺は内心焦った。
受け止めたりいなしたり、そういうことは技術があれば出来る。そうではない。
剣道をやっていたから分かるが、竹刀や木刀を防具も何も着けていない人の頭には、おいそれと降り下ろせるものではない。
「そらそらそらぁっ！防いでばっかでだらしない！」
「くっ！」
連結したり切り離したりしながら、インファイトを仕掛けてくる鈴の一撃一撃は重く、そしてトリッキーだ。
俺はそれを割りとギリギリでいなしている。
俺だってＩＳに乗って雪片で相手を切ることは出来る。そこに躊躇いはない。けれど、俺は主に胴を狙うことが多い。無意識に顔や急所は外しているのだろう。
けれども鈴は確実に本命を急所へ叩き込んでくる。
脳天、首へ降り下ろし、鳩尾を突くその攻撃。それらは絶対防御への信頼を揺さぶってくる。もしや自分はこの一撃で死ぬんじゃないかと。

「おらぁっ！」
「ぐっ！やってくれるじゃない……！」
ダメだ！一度落ち着け！冷静になれ一夏！
俺は自分の焦る気持ちを、死への恐怖を押さえるために鍔迫り合いになった鈴を弾き、蹴飛ばして距離を取る。
あのままインファイトを続けていれば、俺は確実に恐怖に飲み込まれていた。そして何の成果もなく惨めったらしく負けていただろう。
一瞬だが俺は鈴のあの場から離れたことで落ち着きを取り戻していた。
そしてまた向かってくるであろう鈴に備えるために向き直った瞬間。
「ッッ!?」
衝撃が俺を襲った。
何だ？何が起きた!?
吹き飛ばされる最中に確認したが、鈴はこちらには全く攻撃の届きやしない距離にいた。
吹き飛ばされた俺は転げ回り、勢いが小さくなったところで受け身が取れた。
その瞬間、鈴が猛烈な速さで突進を仕掛けてくるのを確認した。
「瞬間加速かっ！」
「っせやぁ!!」
「がぁっ!!」
回避も間に合わないし、いなせる勢いじゃない！
俺は鈴のその重い横凪ぎを雪片で受け止めたが、防ぎきることは出来なかった。
防げなかったその一撃は、俺の左肋を深く抉った。
「――――っ!!」
痛い、熱い！痛い!!
なんだこれは……！こんなの初めてだっ……！
俺を抉った一撃は、まるで火傷のような痛みと熱を感じさせ、激し

く俺を責め立てた。血の流れ出るような錯覚さえ感じる。
当たった場所は胸部装甲がない部分で、いわゆるコレが絶対防御を超過した攻撃……。
これが、翔や明菜が見た死の恐怖……。
しかも、この時二人は非武装でテロリストは三人がかりだった。
翔を塞ぐ大きな壁を感じることが出来た……のか？
嫌な汗が頬を伝う気がした。
いや、これはほんの一端に過ぎないのだろう。あくまでこの感覚は一種であって、テロリストの行動は多種多様なことも考えなくてはならない。
どっと恐怖が倍増してのしかかった。
「あんたが望んだ光景、これがそれよ。それもこんなの末端もいいところ」
「……」
鈴が攻撃の手を止めて語りかけてきた。
余裕の表情を浮かべているかと思ったが、そんなことはなかった。何て言えばいいか、複雑な表情だ。
「こんなこと頼むのなんて、やっぱおかしいよな。お前の気持ちも分からずにごめんな」
「……ばーか」
そうだ。俺は鈴とは相互確認が言葉なくても取れるくらいには、友人だと思っている。そんな友人のことを殺そうなんて正気の沙汰じゃない。
仮に俺が鈴に殺すつもりでかかってこいと言われても、きっと手を緩めて中途半端なことをやっていただろう。
鈴は真っ直ぐに受け止めて俺の望みを叶えてくれた。正気の沙汰じゃないことをやってくれた。
じゃあ俺はどうする？簡単だ。
「だから俺は俺なりに、今見つけたこの壁を乗り越える。答えを出す」
「渡良瀬とは違う答え、なのね」
「当たり前だ」

俺はやっぱり、翔みたいにいろんなことは考えられない。だから、俺の考え無しが周りを危険に晒すかもしれない。
けれどバカな俺はそれを真っ直ぐに、馬鹿正直に受け止めて、その危険からみんなを守って見せる。その力を求めて、欲している。
だから俺は強くなる。
ここで立ち止まったりはしない。
「ここからが本番だ」
「あら、あんなにビクビクしてたのに強がっちゃって」
「ほっとけ！」
瞬間加速で一気に迫り、斬りにかかる。
その一瞬、鈴の両肩にあるアンロックユニットがスライドするように開き、空間が歪む。
これがあの衝撃か！
「ッ！」
「ちぃっ！」
強引な機動で真横に跳ぶ。
そして鈴も仕掛けてくる。鈴の周りの空間は常に歪んでいる。
右へ左へ回り込む機動を描きながら、鈴の意図した方へ飛ばないようにフェイントで牽制しつつ、自分の得意な距離へ持ち込む。
あのアンロックユニットから不可視の砲弾が飛んでくることはわかった。
砲身が見えないからセシリアのブルーティアーズのように避けることは出来ないから、完全に避けることは出来ていない。脚部や腕部は避けきれずに当たっている。けれどもそれのダメージを最大限に押さえるために、衝撃には逆らわず、むしろ自分からその方へ飛ばされることで何とか受け流している。
これでようやく俺の距離に持ち込めた！
「らぁ！」
「くっ！あんた、かなり無茶苦茶するわね！」
「オオオオッッ!!」
横凪ぎ、袈裟斬り、切り上げてからの小手狙い。がむしゃらに振り

回すのではなく、鈴に反撃されないように絶え間ない剣撃を浴びせる。
鈴は至って冷静に俺の攻撃を捌く。けれども守り続けるのには限界がある。特に、俺の本命は零落白夜によるバリア無効化攻撃だ。それがいつくるかわからない鈴は、ただ防ぐだけじゃいつからこいつでやられるのを分かっているはずだ。
ならこの至近距離でもあの不可視の砲弾で俺を吹き飛ばし、無理矢理にでも距離を開けるはずだ。
俺はそれをチャンスだと考えている。
授業で習ったが、イメージインターフェースを用いた武装は、武器を自分のイメージで操作するように作られたものだ。
だからそれを使う時、意識をそっちへ向けなきゃならなくなる。分かりやすいのは、セシリアのブルーティアーズだ。
ブルーティアーズのようなビット兵器は、複数機を空中で操作し射撃管制も頭の中でイメージしなきゃならないから、他のことに手が回らなくなる。
鈴の使っているこの不可視の砲弾も、トリガーを引いてるわけじゃないし、砲身もないのだから普通の兵器ではない。ならきっとイメージインターフェースによる武装だと賭けた。
だからきっと鈴が砲弾を撃つ一瞬だけ、鈴の意識は少しこちらから逸れる。
俺たち武道経験者にとって、それは余りにも致命的だ。その一瞬を活かして、俺は鈴に零落白夜を打ち込んで勝ちを納める。
「くっ……」
鈴が強めに俺を弾き、一瞬だけ意識がそれた。
今がチャンス！
「零落白夜っ！」
「――甘いわ！」
「なっ!?」
俺が零落白夜を発動させ、弾かれた隙間を詰めるように突きを繰り出す。

けれどそれは戟の斬り上げで軌道をそらされ、鈴はそのまま巴投げのような形で俺の下に潜り込み、勢いの殺せていない俺の背面に回り込んだ。
そして俺の無防備な背中に向けて、鈴の周りの空間が歪むのを確認できた。
マズい、このままだど……！
「一夏！これで終わりよ！」
「クソッ！」
認めたくないけれど、この瞬間俺は自分の甘さと敗けを悟った。
けれど、絶対に一矢報いてやる！
俺は白式を急制動し、下に潜り込んだ鈴へ真っ直ぐ上から叩き斬るように、回転しながら零落白夜を叩き込もうとした。
そして切っ先がなんとか触れる瞬間、

――――スドドドオオオオオン!!

アリーナ内部に恐ろしい爆音が響き渡る。それと同時に、アリーナ中央に砂煙が巻き上がった。
鈴も俺も、そっちを見ていて固まっている。
白式が警告通知をした。
――――――中央に熱源、ロックされています。
「な、なんだ？何が起こっている!?」
「一夏！試合は中止よ。急いでピットに戻るわ」
「いったい何が起こってるんだよ……！」
「いいから早く出るわよ！」
鈴が俺の横に飛んできて、俺の腕を引っ張るようにする。
砂煙が晴れて、その原因が姿を表す。
深い灰色の甲冑のような見てくれに、顔も頭も体もすっぽりと覆い隠す首のない全身装甲（フルスキン）。腕は肩から垂れ下がって地面に着くほど長い。
普通のＩＳとは一線をかくして異様だ。

頭部にある無機質に動くモノアイが俺を捉えて止まった。
次の瞬間、腕部に付いている銃口をこちらに向け、発砲してきた。
「マズい……！」
「キャァ！」
俺の腕を引っ張っていて反応の遅れた鈴を抱え、奴の攻撃をかわす。
飛んできたのはビーム弾で、かわしたそれがアリーナの壁面を大きく抉り崩す。
あの威力……。アリーナの上面に展開している遮断シールドはISと同じものを使用している。つまり、奴はエネルギーシールドを貫通するだけのヤバい威力を持ったビーム兵器を撃ってくるのだ。
一発でも貰えば大怪我をするだろうと考えると、冷や汗が垂れてくる。
「……」
「も、もういい加減下ろしなさいよ！」
「あ、悪い」
鈴が俺を振り払う。
いつまでも引っ付いてたのは悪いと思うけど、そんな邪険にしなくても……。ほんとに緊急だったんだから。
「で、どうする？」
「あたしが時間を稼ぐからあんたはそのうちに逃げなさい。どうせ直ぐに上級生や国の舞台が突入して鎮圧するだろうし」
「一人で残って時間を稼ぐって、無茶だろ！」
「うっさいわねぇ！実戦経験ないあんたがガタガタ言わないで！」
「俺も残ってやる。二人でやった方が倒せるかもしんないだろ？」
「あんた本当に……！」
『織斑くん！凰さん！手短に説明しますと、今アリーナはハッキングによって完全に封鎖されて閉じ込められている状態です！今、上級生がハッキングに対抗してますから、解除されたら突入部隊が行きます！それまで持ち堪えて下さい！』
言い合う俺らに山田先生から通信が入った。

「こうなったらやるしかないだろ？鈴！」
「あーもうっ！分かったわよ！」
鈴も状況が状況だから、認めざるを得なかったのだろう。
さっきの試合以上に死を感じるこいつとの戦闘。改めて俺は神経を尖らせた。
「あたしがやつの隙を作るわ。そしたらあんたのそいつで一撃離脱！援護攻撃はするからあんたは一撃ぶちこむことに集中しなさい！」
「わかった、鈴を信じる！」
「ヘマすんじゃないわよ！」

◇

織斑くんと鈴ちゃんのこの試合は、どことなく異様だった。
特に、鈴ちゃんは様子がおかしかった。
攻撃一回一回が人を殺さんばかりの勢いで、明らかに急所を狙って打ち込んでいることも分かった。
見ているとあのハリケーンの中のことを思い出して、私の左腕がガクガクと震えて脂汗が噴き出した。
私は観客席じゃなく、ディスプレイで見るコントロール室で観戦していた。
オルコットさんや篠ノ之さんが誘ってくれたからここにいる。翔くんもいた。
そんな見る人が見れば分かる無茶苦茶な試合に、先生たちやオルコットさんに篠ノ之さんも目を丸くしていた。
そしてこの事件。
二人は完全に隔離され、戦力も未知数な所属不明のＩＳ相手に大立ち回りをしている。
私の左腕が一層震えた。
「お、織斑先生！私も二人の救援に向かいますわ！出撃許可を！」
「ダメだ。お前があそこにいってどうする？ブルーティアーズでは、

連携練度のない現状況ではフレンドリーファイアの危険性が高い。今は近接特化のあの二人に任せて置くのが最善だ」
「でもスターライトだけを使って、初歩的ですが一々声に出せば話しは別なはずですわ！」
「……わかった。アリーナの遮断シールドが薄くなり次第、突入できるように準備をしておけ。お前の腕を信じよう」
「ありがとうございます！」
そんな短いやり取りがあって、オルコットさんはかけていった。
「わ、私にも何か出来ませんか!?」
「牧瀬？お前もか……」
私は左腕を抑えながら織斑先生に尋ねた。
怖いことは怖い。だけど、二人に私みたいな怪我をして欲しくない。だから、何か二人を助ける方法があるならやりたかった。
「お前はダメだ。そんなに震えた腕でどうやって引き金が引ける。今のお前では足を引っ張るだけだ。まさか感情論だけで動いてるわけではないだろうな？」
「そ、それは……」
なにも、言い返せない。
居ても立ってもいられないだけで、本当になにも考えていないことだから。
私の内心、焦った感情をものの見事にすっぱ抜かれてしまった。
「取り合えず全員落ち着け。我々が焦ったところで事情は代わりはしない。腰を据えて適格な行動を厳として、冷静に行うことが今一番求められているのだ。コーヒーでも飲んで落ち着こう」
「あ、織斑先生……」
そう言いながら織斑先生はコーヒーに砂糖を入れて、一口、二口で飲み干した。
山田先生は何か言いたげにしていたが、織斑先生に睨まれて口を塞いだ。
私も織斑先生みたいに余裕をもって落ち着かないといけない……。
「よし分かった。このまま待っていても仕方がない。アリーナの観覧

席の生徒を一ヶ所に集め、その反対側の遮断シールドを破壊して強硬突入を敢行する。現段階で投入出来る戦力である、ブルーティアーズと桜花を配置しろ。秋桜はシールド破壊の補助のみを行え」
「え？」
織斑先生の決定に声を出したのは翔くんだった。
「待ってください！桜花に戦力があっても、僕は戦闘皆無の素人です。客観的に見ても、邪魔になるだけですよ」
「渡良瀬！お前こんな時に何を弱腰な！」
「篠ノ之さん、戦力は足し算だけじゃないんだ。実力がバラけるとそれは引き算にも割り算にもなるんだよ」
「篠ノ之さん！乱暴はやめて！翔くんを離して！」
「止めるな牧瀬！こんな軟弱な男……！」
「やめて！翔くんを悪く言わないで！」
「ちょっ、ちょっと二人とも落ち着いて！」
翔くんが織斑先生に反論すると、篠ノ之さんは翔くんの胸ぐらを掴んだ。
たった一つの行動と一言で、一瞬にして私は落ち着きを失い、篠ノ之さんの手を叩いて胸ぐらを掴む手を解かせた。
「落ち着けバカども」
「「痛っ！」」
そのまま篠ノ之さんと取っ組み合いになりそうな空気を、織斑先生の拳骨で止められ両成敗となった。
「決定は変えん。渡良瀬は戦力として投入する」
「で、でも本当に……」
「薬の投与とナノマシンの使用を許可する。話しは博士から伺った。権限も委譲されている」
「……」
薬物？ナノマシン？
私はそんな単語を聞いて頭に？が浮かんだ。
当の言われた翔くんは開けた口をグッと力強く噛み締めて、苦々しい声で一言だけ呟いた。

「……了解です」
「よし。では観覧席に向かえ。オルコットにも連絡を入れておく。システムにハッキングを仕掛けて遮断シールドの出力を一時的に小さくするから、タイミングを計って突入しろ」
織斑先生がそう言って私たちを送り出し、私と翔くんも駆け出した。
「翔くん、今回こそは成功させようね。多分、絶対大丈夫だよ！」
自分の震える腕と心を抑え込んで、苦い顔のままの翔くんに笑いかける。
翔くんはただ前を向いて、こっちに応えてはくれなかった。

身中の蟲は自分

目の前の敵に集中する。
鈴が衝撃砲で牽制と本命を織り混ぜつつ相手の行動を制限し、俺が斬りかかる。その斬り損ないを鈴がカバーして斬りかかる。
ワンパターンになって読まれないように、フェイントを交えて攻撃するも、的確で寸分違わない回避運動と防御によって全て阻まれる。加えて正確なカウンターを仕掛けてくるから、こっちも回避しなくちゃならない。
そんなやりとりによって俺たち二人のイライラがどんどん積み重なっていくのを、精神がヒシヒシと軋むように感じた。
「一夏ぁ!?」
元々沸点の低い鈴が先にイライラを露にさせた。
口元が歪み、歯ぎしりでもしているのか、声が小刻みに震えて聞こえる。
「俺だって一杯一杯なんだよ!ここまでこいつが強いなんて……」
「アンタがザコなのよっ!そんなへっぴり腰で当たると思ってるわけぇ!?」
「うっせー!」
自覚はある。
俺は確かに及び腰だ。何でかってのは簡単なことだ。
今まで鈴と殺し合いのようなことをしていたんだ。そのせいで、本当に自分の剣がアイツに届いちまったとき、俺はそれを想像してしまっていた。
シールドを抜いて絶対防御に干渉するように作られた、この零落白夜が絶対防御を超えたとき。これは殆ど相手を殺すことと同義なんだという考えが、頭から離れなかった。
鈴と試合をしてたときは、興奮していたからか気に求めなかったこと。
我ながらバカとしか言えないが、今さらになってそんなことが気になって仕方がないのだ。

俺は鈴みたいに、ＩＳを信頼することが出来ていないのだ。
「わかってるんだよ、そんなことは……」
俺と鈴は心を落ち着けるようにその場に留まって、地面からこちらを見上げてくるアイツの行動に注視した。
「……」
「あいつはなんなのよ。ブレなく精密射撃も偏差撃ちもフェイントもこなしてこっちの不意打ちにも動揺しない。感情ってものがないのかしらね……。ロボットみたいで気持ち悪いったらありゃしない」
……ん？
なんだこの違和感は。
「鈴、今何て言った？」
「ん？気持ち悪いって言ったのよ」
「その少し前！」
「ロボットみたいって言ったのよ。それが何だって言う……」
鈴がハッとした顔をこっちに向けた。
俺の考えていたことが伝わったみたいだ。
「そ、そんなバカなことってあるわけないじゃない！」
俺もそう思っている。
ＩＳの原則として、人間が装着することで初めて動くように作られている。だから、機械で無人なんていうことはありえないのだ。
そう、ありえないはずなんだが。
目の前のこいつを見ていると、その考えが揺らぐ。
機械的な精確な行動に、疲労や動揺のない様子。
ＩＳ自体の異様な容貌も相まって、俺の考えが固定化した。
「……機械なら、ぶっ壊しちまってもいいだろ？遠慮も要らなくなるってもんだ！」
「確かにそうだけど、でもやっぱりそんなことって……」
「それじゃあ！２回戦といこうぜ！」
「わ、わかったわよ！こうなら自棄よ！どうなっても知らないんだからね!?」
ＩＳを機械で動かす。

俺の中でふと考えてしまうと、これが可能な人間の姿が浮かんで消えた。
今そんなことを考えても仕方がないから。
後でゆっくり考えればいい。
目の前のことに集中しなくちゃならないんだ。
コイツは人間じゃない、無人機なんだと自分に言い聞かせて、心を切り替えて対峙した。

◇

「まだ準備が出来ないんですの!?」
「そんなに焦られても……」
「焦らずにいられる状況になくってよ!?」
オルコットさんが私を急かす。
私と翔くんはアリーナの観客席とを隔てる障壁の薄い場所を探していた。
今はバリアシールドに加えてシャッターまで降りているから、ちょっとやそっとじゃビクともしない。
だから、少しでも薄いところを探す。
「ダメだ……」
ＩＳの計算用コンソールを動かしていた翔くんが手を止めて呟いた。
「火力がどうしても足りない。シャッターの脆い部分はバリアシールドのエネルギー量も多くして補っているし、衝撃を受けた場所は一瞬にしてエネルギー量を最大にして防御力を高めてる……」
「流石ＩＳ同士の戦闘を内部でさせるだけあって、恐ろしく堅牢なんだね。どうしよう……」
「逆にこれだけのシールドを破って入ったあのＩＳ、相当危険だと認識を今一度する必要がありますわ。それにシールドの復元能力やエネルギー集約よりも速く、一撃で破る以外に何かを早く思い付かなけ

ればなりません」
どうすればいいか、頭を必死になって回転させる。
どうやってこのシールドを破るのか……。
バジュンッ！と、何かを溶かすような、高く響く音と蒸発するような音が入り交じった、耳障りな金属音が響く。
ハッとなって顔を上げれば、私たちのところに丁度、あのＩＳの流れ弾が当たったのだった。
思わず私はヒッ！と声を上擦ったが、ある発見をした。
衝撃が加えられたことでシールドのエネルギーが発行して、厚みのようなものを見ることが出来たのだと思う。
当たった瞬間は分からなかったけど、そのあとエネルギーが当たった場所に流れていくのが見えたし、その僅か一瞬だけ周りの光が薄くなった。
必要な場所にエネルギーを回すために、周辺のエネルギーが一瞬だけ少なくなるってこと、なのかな？
「あっ」
翔くんとオルコットさんがその後を忌々しげに見ているなか、自然と私は声を漏らした。
ーーーーーーーーいい考えがあるよ。
と。

◇

明菜が提示した案は、ごく単純だった。
秋桜が持つ吸着地雷を円形に貼り付け、一斉に爆破させる。エネルギーは円を描くように集約し、その円の中心はその分薄くなる。その薄くなったところに、オルコットさんのスターライトＭｋⅡと僕のビームガンで一気に穴を開けて突入する。
あの流れ弾からほんの僅かな時間でここまで考えつくのだから、やっぱり明菜は頭の回転が速いのだろう。
「二人とも、準備はいいね？」

「大丈夫でしてよ」
「うん。いつでも」
明菜の呼びかけに応えると、明菜は遠く、爆風の届かないであろう場所まで退避した。そこで手を振り上げ、ＩＳの通信機能で合図をする。
――――――3、――――――2、――――――1。
轟音とともに吸着地雷は炸裂し、円形に爆風と爆煙を巻き上げる。
そして、その円の中心のエネルギーが限りなく薄くなるのを目視した。
今！
先にオルコットさんからの光線弾が当たり、さらに薄くなったシールドを僕のビームガンが貫いて大穴を開けた。
僕とオルコットさんはエネルギーが回復して閉じてしまう前に、競技場の中に飛び込んだ。
「織斑！鳳さん！」
『遅かったじゃねぇか二人とも！』
『行きますわよ翔さん！一夏さんたちは下がって休息を！』
二人が引くのを確認して、オルコットさんが牽制射撃を始めた。そして僕もナノマシンを起動させ、身体の活動限界領域を向上させた。
ここまで来たんだ。嫌だ嫌だと逃げ出すことは出来ない。
「オルコットさん、連携をあんまり考えないでＢＴをフル活用して。僕は大丈夫だから」
『……その言葉、信用に足りますわ』
一瞬戸惑ったけれども、不敵な笑みを浮かべたオルコットさんはＢＴを全て射出してオールレンジ攻撃を敢行した。
僕は開き直ったというか、居直ったとも言うべきか。相手の攻撃もオルコットさんの攻撃も全て避ける選択をした。当たらなければどうということは無いし、フレンドリーファイアにもならない。
オルコットさんの猛攻が始まった。
全方向から人間的思考の不規則に飛んでくる攻撃に打って変わって多く被弾し始める黒いＩＳ。どこか戸惑っているようにさえ見え

るその姿は痛まし気だけど、今回は思わず笑みがこぼれそうになる。
僕は強引にオルコットさんの攻撃を躱しながら肉薄し、ビームガンを袖口から射出し、荷電粒子の刃を形成する。
そしてすれ違い様に袈裟切りにする。
「!?」
このＩＳ……！
オルコットさんの攻撃を回避することを諦めたのか、違う。僕の斬撃回避を優先して避けたのか！
けれども、その回避の仕方は余りに異様だとしか言えなかった。その事実に僕は顔を歪める。
肩肘があるであろう関節部分がぐるっと一回転した。それはあまりに強引な回避方法で、普通の人間には出来ない関節の動きを平然としたのだ。
こいつは、人間じゃない！
ナノマシンで増幅された反射神経でそれを見て取った僕は、強引に体を捻じ曲げて何とか手首にビームソードを当てることが出来た。
高圧の荷電粒子の刃はそのまま、熱した包丁でバターに刃を入れるように左手首を切り落とした。
バジジッっと切り口から漏電した電気がスパークする。こいつはそれをさも他人事の様に一瞥すらせずにいる。
幸いだったのが、左手首近くにあったこいつのエネルギー弾を出す銃口を潰すことが出来たことだ。
これで攻撃の手は緩くなるはずだ。
僕は一気に勝負を決めにかかる。
この黒いＩＳにタックルするように掴みかかり、アリーナの高さの限界まで上昇する。この時残っている右腕の銃口も制してこちらを撃て無いようにした。
そのまま頭を下にして一気に瞬間加速をする。初速マッハ５の瞬間加速だ。
ほんの一瞬の出来事だ。全力で回転を加えながら頭からこいつを地面に叩き付ける……！

地面に激突するほんの僅か一瞬で、下に投げつけながら自分は真横に離脱する。
強烈なGに襲われるとともに、轟音とともに地面は抉られた。
「な、なにをしてんだよ翔！」
「確実にこいつを潰すには強引な戦い方の方が確実だし、全身装甲に加えて絶対防御があればこれでは死なない」
「そうかもしれねぇけど、お前まで巻き込まれてたらどうするんだよ」
「今の僕はいたって冷静そのものだよ。出来る、可能、効率的。全部合理的だったんだ」
「そ、そうかもしれないけど…」
一夏が僕に色々と言葉を投げるが、そこに意味は無かった。
僕の身を案じているのだろうが、投薬とナノマシンの活用をしている僕にとってはいらないことだ。
いや違う、一夏は僕のこのやり方が気に食わなかったのかもしれない。
確かに常識を逸脱した戦い方で、一歩間違えれば僕が死ぬ、相手を殺す。そういう、色々な意味で危険な戦い方だ。
数分前の僕は戦い云々に僕には無理だと拒絶の姿勢を見せた。だって誰だってそうだ。命のやり取りを進んでやる人間なんて、中世の武人かキチガイくらいしかいない。死の感覚に触れること、近づくことがどれだけ自分の神経を摩耗させるかなんてことは、一度の事故と一度のテロでイヤというほど理解できた。僕は神経の摩耗を快楽として受け止められるような戦闘中毒者（バトルジャンキー）ではなかった。
バチバチと漏電する音が轟音の次に、砂煙の中から聞こえて来た。
四肢のばらけた黒いＩＳに人間のいる面影はなく、無人機であることが判明した。
「……これが人だったら、確実に死んでいたな」
「そうだね、死んでいただろうね。生きていたとしても、きっと二度と自分の足で立つことは出来ないし、何かを持つことも……」
「テメェ！」
一夏が僕に掴みかかって来た。

襲い掛かって来たのは一夏だけじゃない。僕の心自身も襲い掛かって来た。
怒気を孕んだ一夏の目と、冷徹な言葉を言い放ちすまして見せる自分を責める僕の良心と呼ぶべきもの。
今まで出ていた自分の冷徹な心は引き込んで、そこに残ったのはいつも通りの臆病な僕だった。
ああ、なんてことを言ってしまったんだ。
顔の血の気が引いていくのを感じた。きっと真っ青な顔を見せているに違いない。なんて情けなくて無様なんだ。惨めなんだ。
「そうだ、僕は人を殺し掛けたんだ。結果的に人じゃなかっただけで、僕は人を……」
殺しているのと、変わらないじゃないか。
もう擦り切れ切らしたと思っていた僕の心にも、いまだに擦り切れる余地はあったみたいだ。
吐き気がこみ上げてくる。
感情の起伏が不安定になる、自分の中の灰色の感情をコントロールできなくなっている。心臓が心臓を突き刺すような激しく不規則な動悸が呼吸を妨げる。
あっ、あっ……。
バチンと電撃が走ったような感覚に遭ったのちに、僕は意識を手放した。